

和歌を神州第一の大道といひ、京極黄門は五百餘年詠道の軌範なりとて、詠歌大概の旨を敷衍し、菟庵一部は和歌中道の龜鑑なりとて、その中より抜きて評釋し、次に詠方を述べ、終に契沖を非難し、和字正濫妄說條々を列ね、二條派の爲に辯護せり。寛政五年芝山持豊卿及慈延の序あり。上木。澄月は正徳四年に生れ寛政十年歿す。年八十五。垂雲軒と號す。武者小路實岳の門人。

六 義 考 一 卷 寫

小澤 芦庵

古今集序の六義につき顯昭公任清輔等の説を擧げ、私考を加へたるもの。紙數三十六枚、寛政六甲寅の歳八月中日九日奥附ある本京都市圖書館にあり。

耶麻登宇多辨 一 卷

小野 高潔

やまと歌と國號を冠らしめいふは讚美していふ義にて、聊も異邦に對し云ふにあらずと論ずるもの。寛政六年七月の作。◇高潔通稱は齊宮、東山と號す。高尙の子。

偲 種 一 卷

海 量

歌よむには古今集を則とすべきことを述べ、次に古今序の貫之の作にあらで、怪しむべきことなどを説けり。寛

政六年の作。井上頼因氏一本を蔵す。◇海量は近江の人、享保十八年に生れ、文化十四年に歿す。年八十六。縣居門人。遍歴の歌人。紀行歌集ひとよ花の著者。

和 歌 入 紐 一 卷

富 士 谷 御 杖

六百首の古歌の形式を取り、願應後置詞等により、他の詞を補ひ、歌を詠出せることを示すものにて、始に凡例十三條を立て、次に填字すべき圖を出せり。寛政六年自序あり。

吟南辨農夷則 一 卷 寫

同

寛政六年末弟成孚の請により上代より二十一代集までの歌の姿の批評をなせるものにて、書名は古今六帖の「いづくともふみ迷はせるたまづさにこはたなべのいそならなくに」の詠による。各集の是非を説くこと委しく、五級の差を示すこと明かなり。末に寛政六年甲寅皁月念一夜。北邊二世之書末弟成孚の識語あり。首に福田美楯の六運は經にして五級は緯なり。一運ごとに五級三差のけちめと品のさだめありて、たてぬきに、織りなせる綾錦の如くなむと誌せり。

畧式五級並點例 一 卷 寫

始に五級の説明をなし、次に一は富士の高嶺の如し、二はたたなはれる山の如し。三は里近き麓丘の如し。四は野邊に生ふる草木の如し。五は生ひおほどれるかつらの如しとか。或は一以下を江海、温泉、川流、池水、濁沼等に喩へて説明せるもの。次に歌に點を附する制を立て、一より五までを各上中下に分ち、百點より以下或は十點或は五點づつ低くしそれに相當する詞を定めたり。例へば一上百點の時はいともめてたくこそ承り侍れと記し、二上八十點の時はめづらしと記し、二中七十點の時はすがすがしなどそれぞれ定めたり。

吳竹集 小一卷

詞の解釋證歌の外、詠方に關して、まづ公任以降光廣までの斯道の大家の名言を列舉し、次に六義、和歌諸體、病、制の詞、題詠の方法を詳にせり。寛政七年尾崎雅嘉の序を加へて上木。明治に至り印刷す。

みやびこと玉かつら 一折

加藤景範

記紀萬葉三代集六帖の枕詞序詞等八百を、掛けらるる詞の次第により五十音に引く。寛政十年上木。祝園の序あり。◇景範は大阪の人、信成の子、通稱小川屋喜太郎、竹里と號す。有賀長伯の教を奉じ、歌學上の著多し。享保五年に生れ寛政八年に歿す。年七十七。

振分髪 一卷

小澤蘆庵

初學の爲に詠歌の法を説き、一句にても歌なるを、五句に延ぶること、次に異なること詠みて歌を損すること、同じ心にて姿の變れるもの、同じ詞にて心の變れるもの等例歌を示し。終に詞の活用自他及時刻等文法上のことをいへり。寛政八年上木。家藏本には寛政十二年頃の書入あり、何人の手になるを知らず。

國風發蒙 十卷寫

深澤薫

和歌に關する種々のことを問答體にて記せるものにて、寛政十年の再序あり。始には和歌は如何なる物に候やの問に筆を起し、末の卷々には語釋に關すること多し。上野圖書館に一本あり。◇薫は江戸の人、寛保元年に生れ文化六年に歿す。年六十九。骨董癖あり、君山と號す。三日月侯に仕ふ。

古今風歌説 一卷寫

本居宣長

稻掛茂穂が鈴屋翁に歌の古へ今風といふことにつき、問へる狀及宣長の之に答へし狀を含む。太平の茂穂と稱せし時代なれば、天明二年前の作なるべし。伴信友が享和三年書入の新學びと合本にせり。

初山踏 一卷

同

初學に修學の方法を丁寧^ニに教訓せし書にて、その中に、萬葉集を學ぶべきこと、古風の歌を學び詠むべきこと、長歌をも詠むべきこと、後世風をも拾つまじきこと等歌論に關することを含む。寛政十年の作。上梓す。本居全集卷四にも收む。

六義口訣 一卷 寫

度會常夏

詩の六義と和歌の六義とは同じくして同じからずとて、六義の別を説く。寛政十一年肥後細川侯に奉るもの。京都帝國大學に一本あり。文化十五年米田俊秀の寫なり。

雲井の雁 一卷

村田春海

寛政十一年三月廿八日春海より大平に贈る狀、八月一日大平の答書、十一月七日春海再贈書三篇を集む。書名は第一書の首の詞に取る。眞淵歿後江戸派對伊勢派の關繫を見るべき歌論公開狀なり。續歌學全書二編に收む。◇春海は江戸の人、通稱平四郎、延享三年に生れ、文化八年歿す。年六十六。縣居門の高足、琴後又稱繼齋と號す。

なしこ草 一卷

雲井の雁に同じ。賀茂季鷹が長谷川親廣より一本を得て讀過後斯く命名せるもの。その理由に關して「この文

のもと本居が新古今集ぶりを詠めるを我も人も沙汰あることにて遂に春海がとひかけしなれば難新古の心もてなしこ草と誌して返し侍りぬ」と自筆の識語を加へたる一本あり。

和歌薙の塵 三卷

有賀長伯

初學の爲に、各題下に五七言の句を類學し作例を示す。享和元年孫長收序を加へて上木。弘化二年再刊。

和歌難波津 二卷

弄花軒祖能

三代集等の中、則とすべき歌を撰み、頭首によみくせ等を加へたり。書名は百人一首の次に初學の學ぶべき爲に作れるより名づく。寛政十一年上板。

いその浪 二卷

似雲

武者小路實陰公の歌の教を筆録せるもの。詠方に關すること多し。享和元年芝山持豊序、本居宣長の跋を加へ上板。一名似雲法師開書ともいふ。

泰富小路三位書 一卷

加藤千蔭

富小路貞貞卿よりの消息に對し、青山興成以下十首の評をなし、萬葉略解既刻の分を加へ弟季應をして奉獻せしことより歌に對する種々のことを述べたるもの。

於歌道成業譜代頗相違之事 一卷 寫

飛鳥井雅威

寛政十二年に成る。藤岡作太郎博士一本を藏す。◇雅威は雅重の子、寶曆八年に生れ文化七年薨す。年四十五。正二位大納言。

國雅管窺 一卷

加藤景範

歌の詠方を簡條を立て、細に記せるもの。嗣子敦善享和二年上木。享和元年有賀長收の序あり。

慈延和歌聞書 一卷 寫

烏丸光廣の公宴御會式及百人一首秘訣、古今傳授切紙秘説、伊勢物語秘説を合録せるもの。◇慈延は文化二年歿す。爲村卿の門人。和歌四天王の一人。大愚和尚といひ吐屑庵と號す。二十一代集概覽の著あり。

信濃漫錄 一卷 寫

荒木田久老

一名を病床漫筆ともいふ。享和元年信州善光寺に旅し、病臥中に認むる隨筆にして。中に歌の風體論、詞に新古なき論あり。語釋に關することあり。みもろづく、神風の、あられふり等枕詞に關する説多し。◇久老は正身子、名は正恭。延享三年に生れ、文化元年歿す。年五十九。外宮の神官。家を五十槻園といふ。日本紀歌解、槻の落葉等の著あり。

病床漫筆 一卷 寫

信濃漫錄に同じ。

詞の珠衣 六卷 寫

小國重年

記紀萬葉の長歌を取り、對句の有無及對句の形式等により分類して、句格を示せるもの。人麿赤人の如き主なる萬葉歌人の長歌の形式に附き説ける所もあり。歌格研究上の創見あり參考とするに足る。享和元年に成る。◇重年は明和三年に生れ、文政二年歿す。年五十四。鈴屋の門人

筆のさが 一卷

村田春海等

千蔭、春海が北隣の翁橋本地藏磨の匿名にて、景樹が歌十首を批評し、その缺點を示したるもの、終に俗情雅情

の論あり。桂園叢書第一集に收む。享和二年頃の作か。

東さとし 一巻

佐々木真足

前書の非をあげて、景樹の爲に辯護せしもの。桂園叢書一集に收む。◇真足は京都の人、通稱は壽六。寶曆十二年に生れ天保十年に歿す。寛政六年鈴屋門に入る。後蘆庵などの教を受く。

雅俗辨 一巻寫

小川布淑

筆のさがを批評し、その附録に出せるもの、千蔭の俗心雅心の説を攻撃し、その師蘆庵のたゞごと歌の義を主張せるもの。前書と同じく、桂園叢書第一集に收む。◇布淑は寶曆六年に生れ、文政三年に歿す。年六十五。後萍流と稱す。蘆庵の高弟。九々園と號す。

續雅俗辨 一巻寫

伴蒿蹊

讀雅俗辨説とある方正しからむ。小川氏の雅俗辨を讀みて評を加へしもの。桂園叢書第一集に收む。享和三年の作。

雪岡禪師に與ふる書 一巻寫

村田春海

雅俗辨につき辯明せる書にして正月廿八日の狀なり。

雅俗辨のこたへ 一巻寫

同

雪岡禪師に與ふる書に同じ。

雅俗再辨 一巻

昇道

春海の雪岡禪師に與ふる書を見て、蘆庵門下の昇道が駁撃を加へたるもの。井上頼園氏一本を藏す。始に彼の文の句を抜きて、順次に難ぜり。

佐喜草 一巻

藤井高尙

享保三年の板。歌及詞書の部を見よ。

家集辨 一巻寫

村田春海

千蔭が家集花に自序を加へて板行せるを或人の誹るに對し、古今の例を引き反駁せるもの。享和三年の作。

百千鳥 一卷

岡崎年平

二六

班鳩等の小鳥が集ひて問答せるさまに記せるより書名に冠す。歌の本義及其の變遷を説き、美しき素直の歌を起さむとせるもの。享和田子の自序及板行を助けたる長橋眉見の序あり。◇年平は鈴屋の門下。青字と號す。小菴の人。後荒木田久老にも就く。

芳宜園歌話 一卷寫

加藤千蔭

未だ管見にふれず。

つづら文 一卷

上田秋成

萬葉、古今、新古今の歌風を評し、そのかみの代表的作家の作風を摸する利弊を論じ、終に自作數十首を添へたるもの。秋成遺文に收む。

歌學古今論 一卷寫

平岡敏道

敏道がその師英舎大人即ち從五位下平朝臣祇寧に歌の起、歌體、古辭近辭、二條家、下冷泉家、詩と歌との境、

傳授、學書などのことを文化五年に質しし時、一つ一つ問答體に記ししものにて、古學の要を論ずること、近世八家の批評など見るべき説あり。大和田久茂の序、本間保之の跋あり。佐々木博士藏本。

歌かたり 一卷

村田春海

歌の變遷を説き、歌體多ければ一方に泥むべからずとし、題詠の心得を示し、次に古今のみに由るもの、新古今を從憑するもの、近體と古體とを分つものに對し、痛撃を加へ、最後に長詠をよむべきを勸めたり。文化五年野集奥附として正木千幹跋を加へて出版。又縣門餘稿卷一にも收む。

朝敵辨 一卷寫

清水濱臣

堂上派の人々が眞淵等が唱道せる古學派を目して朝敵となせるを、詳に辯明せるもの文化五年に成る。

歌談斥非 一卷

石塚龍麿

村田春海の歌談の中、首肯しかたき所十八ヶ條を抜き、一々批難せるもの。文化八年の奥附あり。南葵文庫に一本あり。◇韻麿は遠江の細田の人、天明元年に生れ天保六年に歿す。鈴屋門人。古言清濁考、假名遣奥の山路等を著す。

遊伎乃不類道

一卷寫

村松眞船

二六

新庄敬恭に贈れる消息にて俳諧歌に偏るべからず、正しき歌をよむべきことを勸む。書名は「わけそめし人のあ」と、めふみては惑はじものを雪のふる道』の歌による。文化七年に成る。井上頼圃博士一本を藏す。

詠歌一體密註

一卷寫

度會常夏

望月長好が延寶六年住友交信に傳へし詠歌一體密註を、寛政五年九月に寫し、更に悦目抄中禁詞、八雲御抄用意部、愚秘抄、通茂卿口傳及宗尊親王三百首中初句詞嫌あるものを抄出す。追加は文化三年の筆に成る。

光輔に答ふ

一卷寫

金谷興詩

近藤光輔が文化八年本居大平に請ひて興詩の歌『ものおもふ人の袂にふきそめて草葉にうつる秋のはつ風』以下六十四首を評せしめしを、興詩之が辨をなせるもの。

歌道大意

一卷

平田篤胤

文化八年の講義にて、歌は誰もよむべきこと、歌の字義、歌の起原、萬葉集、二條冷泉家、古今傳授、近世歌詠の

評、和歌三神・樂天と住吉明神の間答等のことを説く。明治十八年出版。角田忠行の序あり。門人矢野玄道の書入本あり。◇篤胤は秋田の人、安永五年に生れ、天保十四年に歿す。氣吹屋と號す。本居宣長歿後の門人にして國學四大人の一人。古史徵、古史傳を始めその著作多し。

歌字訓之考

一卷寫

藤原信行

歌の字は打の義、物にふれる意なり。物にふれては自ら聲出るなりといふことを説く。文化九年の作。不忍叢書に收む。紙數縫に三枚。

雜體詠歌略抄

一卷

西村千穎

長歌、短歌、反歌、混本歌、旋頭歌、折句、杵冠、物名、詠物、謎字、疊字歌、廻文等の諸體を明にせるもの。旋頭歌と片歌とは全く同じものとせり。文化十年上板。

俳諧歌論

二卷

高田與清

前編二冊文化九年に千鐘房より上板。上卷には、俳諧連歌の始、長歌短歌片歌のこと、歌學、俳諧の字の釋義、雅樂寮大歌所催馬樂風俗等の由來を説き、二卷には發句季なしの句、連歌式目の沙汰、正風等のことを説く。

二六

◇與清は武藏の人、天明三年に生れ、弘化四年歿す。年六十五。村田春海の門人。松屋また擁書樓と號す。致仕の後、將曹といひ、氏を小山田と改む。索引等の著作多し。

今様考 一卷寫

同

松屋外集十五に收む。その起原等を論ず。雜藝考と合本とせり。高田早苗博士眞筆本を傳へ藏す。

歌學大成 一卷寫

高田與清

歌詞をいろは順に集め註を加へたるもの。未完の書たり。

作家故實 二卷寫

同

儀式の部を見よ。

歌體辨

同

歴史歌考

同

この二書未だ一見せず。或は成上せざりしか。

松門和歌談 一卷

同

水蛙眼目、長明無名抄、遠鳥御抄等より、歌合、大嘗會卷頭歌、秀歌、晴歌、地歌、げす歌、九品の歌、忠岑十體、道濟十體、中古風等歌學歌談に關する語を抜き、その原書の卷丁を記せる索引の如きものなり。松屋叢書十四に收め、一名作歌故實とあれど二卷本の作歌故實とは全く別なり。

歌はもとより 一卷寫

竹下直道

源氏の雨夜品定め體にならひ、詠歌道をとけるもの、紙數僅に數十に過ぎず。自筆の一紙本居豊額氏藏す。◇直道は伊勢松阪の人。元之の子、通稱彦市、宣長及春庭の教を受く。

今井氏に答ふ 一卷寫

本居大平

松井周防守殿家中今井清生が歌をよむに世の風體によむと萬葉風によむといづれがよきとの間に答へたるもの。文化十一年二月十四日の日附あり。◇大平は伊勢松坂の人、初の名は稻掛茂穂、寶曆六年に生れ、天保四年に歿す。鈴屋の門人にして後その學統を襲ぐ。藤垣内と稱す。

詠歌大概正譯 一卷

齋藤彦磨

稱名館蔵本とあり。文化十一年四月廿四日の自序あり。詠歌大概評に同じ。

歌學集腋 七卷

見田尚之

卷一は増損古言梯、二は刪補假名用格、三は語路八衢詳節、四は重訂氷鏡映辭、五は瓊緒約辭、六は冠辭例撰註、七は永言寫式に分つ。文化十二年の自序あり。後嘉永二年四本に上刻す。

詩歌論 一卷寫

田中道麿

或人の歌と詩との區別及その優劣を問へるに答ふ。末に本居宣長稱讚の消息を添へ、文化十四年千村仲雄の序を加へて上木す。續歌學全書三編に收む。◇道麿は名古屋の人、通稱庄兵衛、榛木翁と號す。享和十五年に生れ、天明四年に歿す。年五十五。

五もじ七もじ 一卷寫

本居大平

立春より祝まで題を設け、五もじ七もじの句を擧げ初學の爲にせるもの。一名五七材ともいふ。自筆稿本本居豊顯氏藏す。

神風伊勢考 一卷寫

同

枕詞中、神風伊勢とつづく故由を説けるもの。自筆本本居豊顯氏藏す。

冠辭考抄出混本歌及歌考 一卷

足代弘訓

文化十一年霜月八日混本歌は旋頭歌と同じものなること、反歌は短歌の義なること等を綴りて、その師本居大平に送りたるもの。大平が此御考すべて宜しく御發明と見受け候などの褒詞ある一本神宮文庫にあり。

眞葛葉 一卷寫

石塚龍麿

萬葉集等の短歌の格に、十餘の格あることを歌を擧げて示せり。例へば三四一二五と見る格とか、或は上の句を三一二と見る格とかいふが如し。師宣長及春庭、千秋、大平、道麿の考へたる句の次第は歌の下に誰の考と記せり。黒川眞道氏内藤廣前の寫したる一本を藏す。

和歌十體抄 一卷寫

加藤古風

飯野侯の夫人の爲めに、定家卿の毎月抄に見えたる幽玄以下の十體を解説し、歌の詠方を知らしめたるもの。東

大國語研究室に自筆の一本あり。家藏本はこれを謄寫す。◇古風は忍侯の士、通稱十左衛門といふ類題和歌集補闕を著す。

萬葉摘翠抄 一卷寫

橘 守 部

萬葉の短歌につき、一篇中無レ節格、第四句末而爲レ節格、第二句末而爲レ節格、第三句末而爲レ節格に分ち、例歌を挙げ且總考を述べたり。文政元年の作。豊後千葉常文茂人の跋あり。佐々木信綱氏その自筆本を藏す。松井簡治氏の藏本は天保二年蓬室主人の序、六十三翁橘貞暉の寫せるもの、外題には萬葉摘翠とあり。

神樂催馬樂燈大旨 一卷寫

富士谷御杖

文化十二年成る。

五級例歌 一卷寫

同

歌となりいづる心詞の條理を一より五までに分け、それに例歌を添へたるもの。

誦道舉要 一卷寫

同

氏の歌學說の要を述べたるものにて、公爲私爲の別を説き、神武紀に見えたる諷歌倒語の妙を述べ、倒語に比喻と比喻にあらずして外へそらしてそれを知らしむる法とあることを論ぜり。文化十四丁丑十月下浣とあり。文政七年仲秋福田美楯の寫せる一本は墨付十四枚あり。

北邊髓腦 二卷寫

同

上卷には歌道と神道を説き、下卷には詠歌の心得を示す。その中に詠歌の時、詠歌と言語の別、五級のこと、體の新古、三具、經緯、よせ歌、冠のこと、表裏境五典を説けるものにて、晩年の作なるべし。

五體辨 一卷寫

同

六義に就きて論ぜるもの。

短歌撰格 二卷

橘 守 部

歌の起源、片歌旋頭歌混本歌の別を論じ、次に短歌の句格を句絶によりて分ち、萬葉集三代集新古今集につき統計を擧げて、その説を證し、末に語脈、助辭、修句等を説く。文政二年成る。明治十八年上木。松浦詮、鈴木重嶺の序、橘道守の跋あり。この書は次に擧ぐる長歌撰格及文章撰格と共に守部の三撰格といひて、創見に富みたる

この方面の研究を示したるものとす。◇守部始の名は庭廐、通稱を北山元軒といふ。池庵と號す。天明元年に生れ、嘉永二年に歿す。年六十九。創見に富む學者にして、稜威道別、稜威言別、神樂催馬樂入綾を始め著書多く、天保の三大人の一人たり。

長歌撰格 二 卷

橘 守 部

長歌の復古を希ひ、句格を聲調聯疊以下十三種に分ち、詞遣を連實、光彩、數量、方邊の四法とし、紀記萬葉のよき長歌を撰出し、一々以上の符簽を施し、且當代の長歌の衰頹を指摘せり。文政二年稿成り、明治六年上板同十六年再板。松浦詮等の序あり。

追記。この書及短歌撰格の成生の年代につき橋純一氏は橘守部全集首卷解題の部に於て、長歌大意の奥附を引いて、原稿又は略稿は文政二年に成りたりむ。今見る如きは天保十一年のものとするべしと説けり。尙同書を參考すべし。

落葉集 二十五卷寫

文政二己卯、平野世外、源勝貞の集録せるもの。一より六まで乾坤門、七は時候門、八と九は神釋、十より十二まで人倫、十三官位、十四衣食、十五器財、十六十七草木、十八十九氣形、廿支體、二十一二三言語、二十四五

數量門とし、歌學の便なることを載せ所々例歌を載す。

清話抄 三 卷

淺 草 庵

和歌手引の種に同じ。文政三年上木。

宇奈爲能春佐備 一 卷

中 島 廣 足

近體家の古學派を誹る説を辯駁せるもの。雜誌歌學一卷四五六七八九號に分載す。彌富破摩雄氏によれば、文化末年頃に成れるかと。◇廣足は肥後の人、寛政四年に生れ文久四年に歿す。年七十三。始の名は春臣。樞圖と號す。語學に詳に、歌文に長じ、著作多し。

海量が歌論批評 一 卷

中 島 廣 足

文化十三年二月成る。

うたぶくろ 六 卷

富 士 谷 成 壽

一卷には和歌六則、六連、五體、歌人名檢字を、二卷には詠格、撰辭、詞及題を、三卷より六卷までは四季各題

につき詠方の心得及例歌をあぐ。御杖が尙成壽と稱へし時代の作なれば文化中に成りしならむ。弘化三年版行す。

二條家傳書 一卷 寫

鳥丸光榮教訓十五條及詠歌一體備忘等を并せたるもの。文政二年源清貞の寫本宮内省圖書寮にあり。

後の歌がたり 一卷

中島 廣 足

村田春海の歌談の體裁にならひ眞淵及宣長の説を本として、千蔭春海蘆庵千古などの歌論を品隲せるもの。文政三年に成る。氏の歌に關する思想はその後一變したりと見えて奥に『此の歌かたり後に見れば皆僻事なりやりすつべし』と朱書せり。彌富破摩雄氏一本を藏す。

言葉の眞路 一卷

賀 茂 直 兄

歌の主旨は古今序に存すとし、その發端より天地の開け始まりし時云々までを釋し、次に近世の俗語若しくは賤しきものの詞を譯して短歌によむ方を案せり。文政四年津守國冬の序を加へ、弘化四年に至りて上板す。◇直兄は松田氏。藤園と號す。賀茂の縣主、正四位下に敘せらる。天明三年に生れ、嘉永七年に歿す。年七十二。

神明憑談 一卷 寫

富 士 谷 御 杖

五十にして世に用ひられざることより始めて、その歌風の世に異ること、五級のこと、倒語のこと、詞の檢札のこと、歌の體のことなどにつき、門人の問を發せるに對し、一々答ふるやうに誌したり。末に十一歳にして父を失ひ、叔父成均の教を受けしことなども記したり。佐々木信綱氏所藏。

興 歌 考 二 卷

林 園 雄

狂歌はくるひ歌にあらで座興を主とする歌なることを説き、并せて戲咲歌、俳諧歌、夷曲歌、夷歌等を説き、終に萬葉古今及その以下の集より之が證歌を出したり。富小路貞直卿の序を加へ、文政四年板行す。◇園雄は寶曆八年に生れ、文政二年に歿す。年六十二。通稱を大船重楫といひ、常磐居と號す。鈴屋門。

和歌布留の山踏 四 卷

城 戸 千 楯

和歌の初學者の契とて、四季戀雜の部を立て、各部多くの題を擧げ、題の下に五七言の句を集め、次に作例を示せり。文政七年大江廣海の序及自跋を加へて板行。◇千楯は京都の人、通稱蛭子屋市右衛門。安永七年に生れ弘化二年に歿す。年六十八。宣長及久老の門に入り、紙魚室又野廼舎と稱す。

聲 文 私 言 一 卷

吉 田 令 世

廣く皇國學のことを述べ、萬葉集以下學書及その註釋のこと、當時の歌人の評なども載せ、漢學者的見地より歌のことを説きたり。文政八年成る。同九年高田與清、江澤謙修の序を加へ上板。日本文庫四編にも收む。◇令世は通稱平太郎。活堂と號す。水戸烈公に仕ふ。弘化元年歿す。歴代和歌の撰考等を著す。

歌 の し る べ 一 卷

藤 井 高 尙

三のしるべの一にて、萬葉派桂園派のいづれにも偏せず歌は何の爲に詠むべきか、如何やうに詠むべきかといふことを説く。文政九年成り、同十一年上木す。又歌學全書第三編にも收む。◇高尙は寶曆五年に生れ、天保十一年に歿す。年七十七。吉備津宮の神官にて、長門守に敘し松の舎と號す。松の落葉、伊勢物語新釋等を著す。

遠 山 彦 一 卷 寫

兒 山 紀 成

人の間に對し、始伴蒿蹊、有賀長收につきて學びしは皆枝葉なることに心づき、文政四年神無月より古學者の説を斥け誠並に調といふものにつき景樹の説を信じ、これによるべきことを説く。京大圖書館本。◇紀成は伊勢の人、本姓早川後兒山氏を嗣ぐ。愛松軒と號す。天保十一年歿す。桂園門下。

獨 語 辨 一 卷 寫

本 居 内 遠

春臺の獨語中和歌に關する説を條を分ちて辨せるもの。文政十一年五月成る。内遠のなほ濱田孝國の名を稱せし時の作なり。自筆本本居豐顯氏所藏。◇内遠は寛政四年桐生に生れ、安政二年に歿す。年七十八。本居大平の養子となる。木綿垣又榛園と號す。

永 言 抄 一 卷 寫

吉 田 令 世

道の長手、道の八十限、道のきぶりの三篇より成る。

道 の 八 十 限 一 卷 寫

同

倭歌二神三神より様々の故實、懷紙短冊の書法等を記せるもの。

道 ゆ き ぶ り 一 卷 寫

同

上古より近世の歌人千蔭春海に至る人々の傳を記す云々とあれど、脱稿するに至らざりしが如し。

道 の 長 手 一 卷 寫

吉 田 令 世

歌の起原變遷より歌の種類等を記す豫定にて、稿を立てしが、全部成上せざりしが如し。鶉舟すさみ一卷に以上三書のことをいへり。

古詠考 一卷

伴信友

古書に散見せる歌詠の記事を挙げ、その語ふ節は恐らくは今の御詠歌の節ならむと論ぜるもの、伴信友全集第五卷に收む。◇信友は小濱侯の臣、安永二年に生れ、弘化三年に歿す。年七十四。考證の大家にて天保三大人の一人なり。

神樂歌考 一卷

同

神樂歌は鄙び歌にて後世の風俗體の歌なるべしといひ、追考には神樂歌は殊更に神の故實など由緒ある歌を撰みたるに非ざる由を論ぜり。信友全集五卷に收む。

冠辭考略 一卷寫

安達盈

冠辭考を縮めて自家の考を入れたるもの。文政十一年成る。渡邊重名、長瀬眞幸の序あり。◇盈は豊前の人、渡邊重名の門。

歌神考 一卷

千家尊澄

住吉、玉津島の神を歌神となせることの誤を辨じ、短歌は諸冊二神に始り、長歌は大國主神に始れりと論斷せるもの。文政十三年に成り、文久二年上木す。◇尊澄は享和三年に生れ明治十一年に歿す。もと大社の宮司後華族に列す。松壺と號す。本居内遠の教を受く。

通俗辯 一卷寫

並河基廣

和歌に關しその師富士谷家の説と桂園の説とにつきて論ぜしもの。天保二年成る。◇基廣は京都の人、通稱式部寛政二年に生れ、天保十二年に歿す。富士谷御杖の門人。

長歌格調考 一卷寫

西田直養

天保二年六月の序あり。同九年に成りたる萬葉長歌格の稿本と見ゆ。松井簡治氏一本を藏す。

和歌六體考 一卷寫

高橋殘夢

古今の序の歌のさま六つに就き、從來支那六義の説による説を斥け、そへ歌は序歌、かぞへ歌は算歌等の義を説

き例證の歌を擧げたるもの。天保三年に成る。井上通泰氏一本を蔵す。◇地夢は備中の人、安永四年に生れ、嘉永四年に歿す。年七十七。名は正澄、清園と號す。香川景樹の高弟。言靈派の語學者。家集及語學上の著書少からず。

三四

古今集正義總論 一 卷

香川景樹

古今集註解たる正義の總論にして、歌はよく詠むことの難きにあらず、知ることの難きなりと筆を起し、歌の心を知らむには大和魂を知るべしと説き、理より入るものは感淺く、調より入るものは感深しとのことより詩歌の區別などを論ぜり。天保三年に成る。續歌學全書四編にも收む。

古今集正義總論補註 一 卷

熊谷直好

前書の説の疑はしき所あるを質さむとせし程に、師歿せられたれば云々と端書ありて、まづ景樹の説を擧げ、次に一段下げて自説を註す。天保十四年成る。續歌學全書五編に收む。◇直好は周防の人、天明二年に生れ、文久二年に歿す。年八十一。桂園門下の高弟、岩國の吉川侯に仕ふ。集あり、浦の沙貝といふ。

古今集正義總論補註論 一 卷

八田知紀

直好の補註につき意見の異なるを論ぜるもの。始に直好の説を一段下げて記し、次に自説を述ぶ。弘化二年の奥附あり。續歌學全書五編に收む。◇知紀は薩摩の士、寛政十一年に生れ、明治六年に歿す。年七十五。桂園門下の高足、桃園と稱す。

古今正義總論補註論辨 一 卷

熊谷直好

知紀の論につき、更に辨ぜしもの。前書に書入せるもの續歌學全書五編に收む。

古今正義序註追考 一 卷

同

景樹が、古今の序は貫之詩に激して書けりと説けるを、然にあらず、當時世に云ひならせる説を、そのまゝ、紀氏の記せるなりと論ずるもの。景樹の在世中に作せるよし始に見えれば、天保の半頃の作なるべし、續歌學全書五編に收む。

夫木緊要 三卷 寫

橘守部

天保四年に成る。尙夫木集條下を見よ。

歌日記 一卷

野々口隆正

天保中記せる歌の隨筆にて、やまと歌、六義、六歌仙、自警、異體、てにをは、語格、古今兩序等につきて説を述べ、又語釋をなす。天保五年自序あり、板行す。◇隆正は石見の津和野の人、寛政四年に生れ、明治四年に歿す。年八十。始め氏を今井といひ中頃野々口といひ、後に大國と改む。伊吹乃舍門下にして眞瓊園と號す。

古風三體考 一卷

田中芳樹

長歌短歌旋頭歌の三體につき、旁引博證して、五七七五の調の變遷を説けるもの。天保六年成る。同八年加納諸平、篠崎小竹の序、穗井田忠友の跋あり。忠友の論も亦見るべし。天保八年板行す。◇芳樹は長門の人、享和元年に生れ、明治十三年に歿す。年八十。本居大平の門人にて、寄居子と號す、後近藤家を襲ぎ、明治の始文學御用掛となる。寄居歌談等の著あり。

千代の古道 一卷

八田知紀

調の直路の稿本にて、天保六年成る。

千代の古道辨 一卷

三宅意誠

前書を評したるもの。◇意誠は桂園門下にて、天保八年歿す。

永言格 三卷

鹿持雅澄

萬葉集長歌の格を研究したるものにて、上卷には端文(ハシカガ)(句のこと)、雙句(フタカ)(對句のこと)、括句、獨句、短句、長句等に分ち、中卷には結尾例、發端例、裝飾例、及疊句、補語等を説き、下卷には照略、整齊、反覆、倒語、贅句等修辭に關するもの、及山柿論、或問等に分ち論ぜり。天保六年稿を起し同八年成る。明治二十六年萬葉古義と共に上板。◇雅澄は寛政三年に生れ安政四年歿す。年六十八。氏を柳村ともいひ、古義堂、又山齋とも號す。一生土佐にありて萬葉を研究す。萬葉集古義の大著あり。

萬葉長歌格 一卷

西田直養

長歌の格を、輕起穩結、輕起巧結、重起穩結、重起巧結、序起穩結、序起巧結、承初結末の七つに分ち例を擧げたり。天保九年成る。水戸清龍閣に一本あり。余も一本を藏す。◇直養は寛政五年に生れ、慶應元年に歿す。筱舎と號す、筱舎漫筆を著す。

七夕百首序難詞 一寫卷

男川嘉雅

菅沼定敬の七夕百首に本間游清が序をかきしに、その文不可なりとて難じたるもの。

類聚證 一卷寫

古き歌學説を述べたるものにて、源順の説を挙げたるころあり。新見正路の賜盧拾葉中に收めたり。

心の種 三卷

橘守部

詠歌の手引にとて、古の髓腦、歌合の判、歌論の書を讀く搜り、中正なる説を取り、意義の足らざるは梓に入れて加へ、引歌引句等の註には俗語をも交へて平易に記せり。上卷には歌の必よむべきもの以下十條、中卷は題の虚字心得あるべきこと、下卷にはよからざる取方以下各數條を載す。天保七年の自序あり。同九年門人吉田秋主序を加へて上木。

詠歌玉津島 三卷

同

心の種の初稿本にして橋純一氏藏す。後増補改題して上木す。

詠歌眼目 一卷

西田直養

歌の範とすべきは新古今にありとし、その秀逸を取り、升堂篇と入空篇とに分ち、前者を道理體、花露體に、後者を幽玄體と餘情體とに分ち、例歌を擧ぐ。尙新古今集の條下を見よ。別に縣門餘稿の中に收めて上板。

比那能歌語 一卷

千家尊孫

上代の歌と近世の歌との論、歌體の變りしは連歌の起りしよりの論、書寫の誤の論以下助辭用言等のこと、歌の心得につき説きたるもの。千家尊晴の序、天保九年上板◇尊孫は尊之の男、寛政五年に生れ、明治五年卒す。年八十五。出雲の國造たり。

歌學初訓 一卷寫

五十嵐篤好

本慎誠の三事、詞の働、てにをは調べ、題、名所、讀書、會集、風體、情、事がら、言葉、心、稽古の題を設けて歌學者に便す。天保十年五月の序あり。附録には大江春平批評あり。上野帝國圖書館に一本あり。◇篤好は加賀の人、寛政二年に生れ、安政七年に歿す。年七十一。富士谷御杖門。また數理に明かにして測量に關する著書あり。

歌學次訓 一卷寫

同

前書の續篇にして、敷島の道、歌よむに三品あること、一筋を貫くこと、右をいひて左を云はざること、事を云ひ盡さざること、物に迫りて云はざること、主たる所は詞に云ひ出さざること、言外の用のこと、一言もよく心を用ふべきこと、二の級稽古のこと、情の緩急によりて詞前後すること、俗言活用のこと、字餘のこと、云掛のこと、人情のこと、情の切なる時裏をいふこと、古歌を説くこと、枕詞序歌のこと、長歌のこと、端書序文等のことを項を設けて説く。天保十年の作。

歌 學 三 訓 一 卷 寫

五十嵐篤好

前二書の續篇ともいふべく、憑處のこと、古體近體の長歌のこと、古言を遣ふこと、眞心を述ぶること、大和魂といふこと、及歌書假名遣てには等のことを説く。天保十二年十月成る。東京帝國圖書館に一本あり。

歌 體 緊 要 考 一 卷

岡部 東 平

初學の人、往々歌の法に拘泥するを痛み、冠辭、名所、體留、縁語、俗語、字音、遠語等に分ち、これを詠む可否につきて論ず。中に近調古調等の辨あり。總論にも歌につきて長き説あり。一名を七禁考ともいふ。◇東平は筑前の人。濱田侯に仕ふ。堅室葛根と號す。堅室葛根日録等の著あり。安政三年歿す。

よみうたのむねたるさた 一 卷 寫

大江 東 平

七禁考の別名あり。序に庚子冬葛根堅室に筆をとるとあれば天保十一年の作なること明らかなり。青木幸躬の寫せる一本佐々木信綱氏所藏。

穂井田忠友歌論 一 卷 寫

忠友がその師景樹の調即歌の説に對し、意見を述べ、景樹のこれに對し消息を送りしものを收めたり。

長 歌 大 意 一 卷 寫

橘 守 部

或人より長歌撰格借覽の請ありし時その中より二三ヶ條要を摘みて書き送りたるもの。天保十一年十月三日の日附あり。自筆稿本橋純一氏藏す。

古 學 大 意 一 卷 寫

鹿 持 雅 澄

一名を本霍公鳥といふ。天保十一年に成る。古學の必要及その大旨より本言の研究の必要なること、古調の歌を詠むべきこと、歌には文飾の必要なること等を説く。

證歌類葉 十三卷寫

大野廣城

部門を立て古集より夥しき證歌を載せたるもの。例へば天部を景宿類、雲雨類、風雪類などと分ち、更に小分して例歌を多く出す。◇廣城は幕臣。忍軒とも忍屋とも號す。泰平年表等の作者。天保十二年歿す。

銅島直興に與ふる書 一卷寫

戸澤正令

古學派の歌の貴ぶべきことを論ぜるもの。

題詠篇 一卷寫

同

題詠の由來及その可否に就きて論ずるもの。◇正令は文化十年に生れ、天保十四年に卒す。年三十一。新庄侯、能登守といふ。歌は村田たせ及齋藤彦麿を師とす。壯歲にして多くの著書を遺す。

萬葉緊興 二卷

橘守部

始に萬葉集十卷より風情なき歌を擧げ、次によき歌を抜き、字眼照應及續けがら、字句の面白き所には簽を附し一見して知り易からしめ、次に句格に連續、四句直絶、四句倒絶、二句起、二句直絶、二句倒絶等の法あること

を示す。天保十二年門人日下麻蟻麿の序を加へて上板。

寄居歌談 五卷

近藤芳樹

第一卷は天保十三年に、第二三卷は翌年に稿を終へ、四五の二卷は後れて明治十六年に上木す。文章流暢にして最も趣味ある歌話の一なり。近世歌人の消息、人々の名吟若くは古歌との關繋、自家の考へたる並に友人の説をも合せ出せり。

あはれの種 一卷寫

花垣幸國

古今序を引きて歌は心に思ふ事を聲にあやなして著すものといひ、常言と詠歌との差別を述べ、蝸玉に入れる琉球人の歌をひき同胞の詠歌に動むべきことをいへり。天保十四年上木。船越常有の序あり。◇幸國は通稱一衛、阿波の人、石川雅望、岡部東平に學ぶ。

みさびえ 一卷寫

内山眞弓

下條といふ人に答へし書にて紙數八葉より成り、歌は清淨潔白なるのみならず、却りて煩惱執着のものといひ、歌は有のまゝにのみいふものに非ずといひ、調のことを述べ、宮下正岑の説を斥したり。井上通泰博士一本を藏

す。

歌學提要 一卷

同

景樹の説を、自ら筆記せるもの及社友中澤重樹が記したるもの等より抄出し、總論、雅俗、僞飾、精粗、強弱、趣向、實景、題詠、贈答、名所、古歌、據假字、天仁遠波、枕詞、序歌、謔書、謔詞、文詞に分ちて記せるもの。天保十四年自序平保秀の跋あり。嘉永三年成島司直の序を加へ上板。◇真弓は信濃の人、天明六年に生れ、嘉永五年に歿す。年六十七。香川景樹の門下。聚芳園と號す。

香川景樹大人筆話 一卷

並木周子、吉田重興等が詠草奥書七通を収めたるもの。

東塙亭塾中聞書 五卷

内山真弓

内山真弓が、景樹の東塙亭にありて教を受けし間の筆記にて、歌學提要と同じき所あり。語學に關することも少からず。天保十五年の奥附あり。歌學提要はこの書より抄出せるものならむ。

東塙遺言抄 一卷

同

桂園塾中聞書の抄にして、歌は思情の俤、枕辭の論、詠歌論、最上の調等の説あり。桂の下枝に收む。

桂園素障 一卷

香川景樹

一名を桂園歌評といふ。詠草奥書に同じ、高橋正澄以下多くの門人の詠草に親切に書きつけたる批評を全部集めたるもの。景樹の歌論を見るべし。蓋し門人の蒐集せるものならむ。

ひとりごち 一卷

大隈言道

世俗の歌を木偶の歌と罵り、天保の民は天保の歌を詠むべしと主張せるもの。福岡市平岡良助氏の藏本。

こそのおちり 一卷

同

新しく商人風の歌を主張し、堂上などの型におちたる歌を斥くるもの。福岡の辛島小四郎氏その自筆本を藏す。二書共に佐々木信綱、梅野滿雄二氏の著なる大隈言道に收む。◇言道は福岡の人、寛政四年に生れ、明治元年歿す。年七十七。萍堂と號す。草徑集等の集あり。幕末の最も優れたる歌人。二川相近の門人。

芝山持豊卿聞書

一卷寫

深田正詔

一名芝山持豊卿歌道御答書ともいふ。詠草の詞書の書方、學書、加難詞、聲調のことなど、詠草の添削につきて教を乞ひし答書なり。天保十五年七十二才深田正詔記する旨奥書あり。◇正詔は尾藩の世臣にて香實と稱す。安永二年に生れ、弘化の始に歿す。芝山持豊の門人。

神路山

一卷寫

屋代弘賢

和歌傳書にて、視、觀、察のこと、時所位のこと、心、體、事のこと、和歌極秘三神、和歌の徳、秘傳等のことを載す。輪池叢書三十九に收む。◇弘賢は幕臣。寶曆八年に生れ、天保十二年に歿す。年八十四。書を善くし、輪池と號す、藏書家を以て知らる。歌は糸泉爲村爲泰二卿に學ぶ。幕府の書物奉行となり、古今要覽等の編纂に與る。

歌道必携

三卷

藤原匡聘

和歌來歴並系圖、三神の事、歌傳、會式之事、書法、題之事、讀方之事、附制の詞、天爾波之事、假名遣、歌品並風體、學書、雜事、宗匠家系傳を詳に擧ぐ、古今の諸書を參考せり。内閣文庫に一本あり。◇匡聘は進藤氏、幕

臣なり。

久老が歌の風致論の辨

一卷寫

花園春里

文苑玉露に載せたる久老の説を評し、本居翁の爲に辨じたるもの。又歌の詞に近古なしといふ論の辨をも載せたり。

古調考

一卷寫

本居内遠

古歌の格調を論じ、終に之が類例を擧ぐ。但し未完の書なれど、さすがに見るべき所多し。七言の句中、三四を正格にして、四三は變格、五二などは善からぬなどこまかなる説も見えたり。自筆本本居豊顯氏の所藏。

學の主旨評

一卷寫

同

足代弘訓の學の主旨につき批評を加へたるもの。神學、事實學問、歌學の三條につきて一々意見を述べたるもの。

紀記歌撰

一卷寫

赤井夏門

内遠の古調格により紀記の歌の格を長歌、正格、段落格、變格、格に違へる歌、短歌、片歌、三句の歌、六句の

歌七句八句の歌等の別を説く。本居豐顯氏の藏本。

二條家御秘傳之歌書 一卷 寫

松岡家より献納の宮内省圖書寮本の一にて、枕詞の解釋を主とし、まづ久方の天、荒金の土、敷島の大倭、神風や伊勢、千早ふる宇治、足引の山、玉鉾の道、天さかる鄙の八つは特に宗匠家よりの相傳なることをいひ、その他のものを加へて解説し、作歌のたよりとなせるもの。

贈香川景樹書 一卷 寫

海野 游翁

景樹の調につきて意見を述べたるものにて、中島廣足の樞國隨筆に收めたるものを一本とせるもの。◇游翁は幕臣、名は幸典、家を柳園と號す。寛政元年に生れ、嘉永元年歿す。年六十。前場默軒の門人。

言葉の正道 一卷 寫

野々口隆正

言語、音韻、歌道、指辭等に關することを考へて説けるもの。天保七年の自序あり。刊行。

歌學下和玉 一卷 寫

宮下正岑

天保七年成る。古學派に對して意見を述べたるもの。武島又二郎氏一本を藏す。◇正岑は信濃の人、安永三年に生れ、天保九年歿す。桃澤夢宅の門人。

わか草 一卷

今井 仲

首に和歌に關する一般の事を述べ、次に門人の歌を集めたるもの。◇今井仲は野々口隆正が中年時代に於ける氏名なり。

歌學入門 一卷

野々口隆正

歌は心詞調の三つ必要なこと、次に詞同じく心かはれる類、今人の心得違へる詞を擧げ、活き詞、てには、かなづかひ、歌よむ心得を説く。明治二十三年九月號の養徳會誌に收む。

和歌問答 一卷 寫

問答體により歌を詠む稽古の術を説く。題の意を得ること、趣向を求むること、詞を知ること、制、用捨の義等を説く。京大圖書館本。

聲調は人麿の『ほのゝと』貫之の『結ぶ手の』二首にて餘蘊なしといひ、和歌は日本の禮樂なりなどのこと見ゆ。弘化四年の奥書あり。

歌道手引種 三卷

黒川春村

俳諧歌のことを諸書を引きて釋し、子供の歌をあげ、歌話を載せ、名吟により異名を得し例などを示し、歌體歌書のことを記す。弘化四年上板。

詠歌心のたね 小二卷

萩原廣道

嘉永元年上板。儀式の部を見よ。

旋頭歌四體 一卷寫

草鹿砥宣隆

記、紀、萬葉、古今、拾遺、千載集等に見えたる旋頭歌を、上れる世の風、問答の風、中つ世の風、後世の風の四に分類せるもの。嘉永元年の序あり。◇宣隆は文政元年に生れ、明治二年歿す。年五十二。三河の砥鹿の神官。平田篤胤の門。

旋頭歌抄 一卷寫

同

前書を訂正し、正體變體の二類に分てるもの。嘉永二年の作なること、森田光尋の書入に見えたり。東大國語研究室に一本あり。

長歌規則 五卷

中村知至

萬葉の長歌を、小篇則、中篇則の部門を立て、まづ十五句までの長歌を説き、次に對起とて對句を以て起句とする小長歌を、次に十七句までの中長歌を、冠辭對、序辭對、地名對等の略符を施して示す。嘉永二年成り、安政二年上板。又別に星野忠直氏校して明治二十五年活版に上せり。

稻木抄 一卷寫

伴林光平

始に歌の目標を説き之に達するには四級あり、第一題、第二歌、第三生活、第四精神これなり。中に就き、題には情と事と景との三あり。歌には趣向、言辭、聲調の三あり、と理を分ちて説きたるもの。紙數三十八葉。嘉永二年に成る。書名はその師飯田秀雄。加納諸平二人の恩を忘れじとてその郷國たる稻葉紀伊の字を取るなり。大阪の佐々木計二郎氏一本を藏す。◇光平は河内の人、文化十年に生れ元治元年歿す。年五十二。通稱六郎、班鳩

今様考證土代

一卷 寫

黒川 春村

空穂、枕草紙、榮華、かげろふ日記、紫式部日記、袂衣、朝野群載、百練抄等の諸書に見えたる今様の記事を括弧せるもの。天保十年以降の作なるべし。白筆本黒川眞道氏藏す。◇春村は江戸の人、寛政十一年に生れ、慶應二年に歿す。年六十八。狩谷菟齋を師友とす。薄齋と號す。碩鼠漫筆、墨水雜抄を始め著書多し。

虚字詠格

二 卷

橘 守 部

清輔の一字抄及後水尾院の一字抄ならび、虚字の詠み方を示さむが爲に、一々歌を引き、朱點縦線孤線白圈黒圈等の符を用ひてこれを知らしむ。提要に悦目、一字抄などを批判せり。弘化元年成る。上木。

和歌言葉能千種

六 卷

石川 蓮 和

四季戀雜の各題を擧げ、題意を示し、類語、名所、歌例を載す。弘化三年植松卿の序を加へ上板。

古今和歌うひまなび

八 卷

鈴木 重 胤

四季戀雜の部に隨ひ、各數十題を擧げ、各題下に五言七言の句を網羅し、作例を載せたり。弘化三年平賀譽重の

序あり。上木。◇重胤は淡路の人、文化九年に生れ、文久三年に歿す。年五十二。樞の家と號す。平田篤胤及野々口隆正に學ぶ。日本書記傳、祝詞講義等を始め著書多し。

歌の大武根

二 卷

長野 義 言

上卷の始に初學の程は、まづ歌は如何に心得て、いかなるさまによむべきものと大意を知るべしといひ、次に俗語を擧げて、これを歌に詠める數多の例を示し、下卷には古歌の辨につきて説く。弘化二年成る。同三年序を加へ上梓。堀内廣坡校す。◇義言は近江の人、文化十二年に生れ、文久二年歿す。年四十八。桃舎と號す。井伊直弼に用ひらる。玉緒末分楠等の著書あり。

敷島の道芝

一 卷 寫

願詠を非とする説を斥けその心得を述べ、婦女子の歌及歌書、添削につき師の苦心を知るべきこと、返歌等のことを説く。文化頃の例を引きたる所あり。日尾荆山の著か。◇荆山は武藏の人、寛政元年に生れ、安政六年歿す。年七十一。名は瑜、儒を業とし、至誠堂と號す。訓點復古などの著あり。

詠格聲調極秘之傳

一 卷 寫

深田 正 韶

聲調は人麿の『ほのく』と『貫之の『結ぶ手の』二首にて餘蘊なしといひ、和歌は日本の禮樂なりなどのこと見ゆ。弘化四年の奥書あり。

歌道手引種 三卷

黒川春村

俳諧歌のことを諸書を引きて釋し、子供の歌をあげ、歌話を載せ、名吟により異名を得し例などを示し、歌體歌書のことを記す。弘化四年上板。

詠歌心のたね 小二卷

萩原廣道

嘉永元年上板。儀式の部を見よ。

旋頭歌四體 一卷寫

草鹿砥宣隆

記、紀、萬葉、古今、拾遺、千載集等に見えたる旋頭歌を、上れる世の風、問答の風、中つ世の風、後世の風の四に分類せるもの。嘉永元年の序あり。◇宣隆は文政元年に生れ、明治二年歿す。年五十二。三河の砥鹿の神官。平田篤胤の門。

旋頭歌抄 一卷寫

同

前書を訂正し、正體變體の二類に分てるもの。嘉永二年の作なること、森田光尋の書入に見えたり。東大國語研究室に一本あり。

長歌規則 五卷

中村知至

萬葉の長歌を、小篇則、中篇則の部門を立て、まづ十五句までの長歌を説き、次に對起とて對句を以て起句とする小長歌を、次に十七句までの中長歌を、冠辭對、序辭對、地名對等の略符を施して示す。嘉永二年成り、安政二年上板。又別に星野忠直氏校して明治二十五年活版に上せり。

稻木抄 一卷寫

伴林光平

始に歌の目標を説き之に達するには四級あり、第一題、第二歌、第三生活、第四精神これなり。中に就き、題には情と事と景との三あり。歌には趣向、言辭、聲調の三あり、と理を分ちて説きたるもの。紙數三十八葉。嘉永二年に成る。書名はその師飯田秀雄。加納諸平二人の恩を忘れじとてその郷國たる稻葉紀伊の字を取るなり。大坂の佐々木計二郎氏一本を藏す。◇光平は河内の人、文化十年に生れ元治元年歿す。年五十二。通稱六郎、班鳩

隠士と號す。勤王歌人。南山踏雲錄、野山のなげき等の著あり。

新續無名抄 二 卷

本間 游 清

游清の耳敏川には歌に關すること所々にあり。それ等の中の歌話を集めたるもの。◇游清は安永五年に生れ、嘉永三年歿す。年七十五。村田春海の門人。九江又百里と號す。伊豫の吉田侯の臣。有職本草に委しく、尙古鑑色一覽、織文圖繪等の著あり。

さしもぐさ 一 卷 寫

飯塚 久 敏

古今集は世人皆清撰のものとなせど、奏上の歌數は多からざりしを後人書き加へしものにて、序も偽作なりとてその證左を數多擧げたり。

次に久米の岩橋、さしもぐさ、いもせ川等の古歌集に見えたる地名の所屬などにつき、古説を正し、又古歌取のうれたきこと、古歌をあしく直したること等をいへり。嘉永二年の奥附あり。橋純一氏一本を藏す。◇久敏は上野の人、橋守部の門人。松廼舎と號す。

垣内の七草 一 卷

伴 林 光 平

和歌風調の沿革を論じ、次に春夏秋冬戀旅賀の七題を、太古風、上古、中古、近世、後世風、近世堂上方風、當時地下風と七體により分ちたるもの。嘉永三年成る。刊行。

七題七體 一 卷

同

垣内の七草に同じ。

道の幸 一 卷 寫

足代 弘 訓

學問の大綱三つあり。一には神學、二には事實の學、三には歌學なりとし、歌學をするに見るべき書などを擧ぐ、夙く阿波にありし時記し、ものなること、門人佐々木弘綱の序に見ゆ。◇弘訓は天明四年に生れ、安政三年に歿す。年七十三。度會神主。寛居と號す。本居春庭に就く、和歌は芝山持豊の門人。

詠歌入學抄 一 卷 寫

伊庭 秀 堅

古集を見ること、前段の句々の連續を知るべきこと等を説き、本居春庭の詞の通路の歌のかへりの圖を引きて説明せるもの。嘉永四年に成る。

桐の落葉 一巻

桐園宗章

三六

柱園の流を酌める人として、調姿、俗調、凡調、雅調等の説を述べ、古學派の人々契沖眞淵宣長等を排せり。引例その他につきて黒を白と唱へたるが如き所あり。嘉永五年上木。家藏本。

天門抄 一巻寫

草鹿砥宣隆

記紀萬葉等の古歌中特異の形を有せるもの五十一首を抜き、斷節及構造により十二類に分ちたり。例へば短歌を二つ合せたる、片歌と短歌を續けたる、片歌を二つ合せたる等の格を立てたり。奥書に森田光尋訂嘉永五年云々とあり。東大國語研究室に原本あり。

日井治堅遺稿 一巻寫

古に偏せず後に傾かずその宜しきに隨ふべき歌論を述べ、萬葉集の防人の歌は精撰せられたるものにて、拙劣なるは載せざる説、歌合の考、尾張の家苞の評、四季詠物歌詞の考、その他文章をも載せたり。一本慶應大學圖書館にあり。◇治堅は鳥取藩士、文化六年生れ、嘉永六年歿す。年四十五。飯田秀雄の門人、尙徳館出仕となる。詠草銀杏の落葉、隨筆畫寢の枕等の著あり。

山口歌談 一巻寫

源定俊

古今集の序を基として歌學を説けるもの。心を種とすること、歌の起り、てにをは家は横道に陥ること、本歌と狂歌、古體と近體、堂上風、歌のさま等に就きて説けるもの。嘉永六壬子夏六月の漢文序あり。◇定俊は大官司従五位とあり。眞野亭と稱す。

歌道詠事十五ヶ條 一巻寫

前田利保

詠歌之大事七ヶ條 一巻寫

同

富山侯前田利保の嘉永六年に誌せるもの。宗匠家の説を受けたるものに自案を加ふ。前田伯爵家に一本あり。

さよあらし 一巻寫

神吉弘範

河西重就の問に對し、古學派と柱園派との歌の風調に就きて論せるもの。◇弘範は播磨の人、本居太平に國學を受け、歌は香川景樹の風を尊ぶ。

千木の片そぎ 六巻寫

山田常典

三五

歌の格を、省略、轉倒などの如何によりて九格に分ち、證歌を擧げたり。例へばことの省かれたる、二重に云ふべきを片へに譲りたる、まのあたりの事に或は本歌に譲りてことそぎたる、二筋のことを一つに結べる、言を下上にいへる等に於けるが如し。嘉永七年の序あり。南葵文庫本は花鳥風月の四卷となす。◇常典は文化四年に生れ文久三年に歿す。年五十七。落園と稱す。海野游翁及本間游清の門人。紀伊丹鶴水野侯に仕ふ。

歌學式 一卷寫

竹内享壽

その師景樹の調の自説を抜き説を加へなどしたるものにて安政二年に成る。享壽は京都の人、文化九年に生れ、元治二年に歿す。年五十三。箭園と號す。

東湖歌話 一卷

藤田彪

歌は皇國の爲に學ぶべきものにて、世々に變遷あれど、新葉集の歌など範とすべきことなど例を擧げて説けり。東湖全集に收む。◇彪は文化三年に生れ、安政二年に歿す。年五十。水戸の烈公に仕ふ。東湖と號す。常陸帶、弘道館記述義等の著多し。

六句歌體辨 一卷寫

野々口隆正

草鹿砥宣隆の旋頭歌四體を讀み、意見の異なる所を示さむとて、詠歌格調辨といふ未定稿に筆を加へ、短歌の上若しくは中、若しくは下に一句を加へたる混本歌と、五七七の頭を旋らす旋頭歌と、佛足跡體、小長歌體等に分ち説けるもの。東大國語研究室に一本あり。安政四年に成る。

進國歌説 一卷

上田千風

國體を論じ、國民たるものは、國歌を詠ぜざるべからざることを漢文にて記したるものにて、進國詩説、後進國詩説の二篇より成り、安政四年橋冬照の序、上田善教の跋を加へ安政六年上板。◇千風は信濃佐久郡の人。

湯津爪櫛 二卷

五十嵐篤好

上卷には言擧及言響をよめる歌の限りを解釋し、下卷には歌は天地の法則に従へる道にして、延喜の頃まではよく辨へたる人もありとて、古今序を評釋し、歌法に種々あることを例を擧げて述べ、附言として守部の短歌撰格の梗概を擧げ意見を加へ、又萬葉緊要の説を撃ちたり。安政四年稿成り、文久二年門人吉田友春上板す。

雉岡隨筆初編 二卷寫

同

種々の考六十二項を含む。中に歌に關するもの大部分を占む。安政五年成る。

獨學綱 一卷寫

黒澤翁滿

歌の體には古來種々の説あることを擧げ、自説としては長歌、短歌、旋頭歌、混本歌、連歌、片歌、俳諧、物名折句、廻文の十種説を奉じ、又修辭上よりは喻歌、直言歌の二つに約すべしとなし、次に歌論の所説區々なることとを、上は新撰髓腦より近代までの説を擧げ、世人多くは撰集などにより風體異なることを説けど大綱は一なりと斷じ、末に二十一代集より所謂活氣ある歌數百首を抜き、歌の趣意を簡潔に註せり。◇翁滿は寛政七年に生れ安政六年歿す。年六十五、菴居と號す。源氏百人一首、童話長編等の著あり。

犬物語 一卷寫

黒澤翁滿が千種三位有功卿に歌を請ひ、二首の詠を得しに、歌の天爾波意を得ずとて意見を申し、により、有功卿書翰にてその問題を論ぜられし關係書類を纏めたるもの。

園の池水 一卷寫

伴林光平

その師加納諸平の説を引き、和歌は皇國の大道にして、皇統を經とし之が緯たるべきものと説く。安政六年成る。大阪の佐々木計二郎氏一本を藏す。

和歌本義 一卷寫

前田利保

和歌の字義につきて、言靈上の説を述べたるもの。以下の著前田伯爵家にあり。◇利保は富山侯、寛政十二年に生れ、安政六年に歿す。年六十。歌は海野幸典に學ぶ。歌道にては清薰又在樹と號す。本草の大家。龍澤公と諡す。

贈答新式 一卷寫

同

安政二年成る。和歌贈答の法式を示せるもの。

和歌の徳 一卷寫

同

歌に字妙、句妙、意妙、始終妙、逸妙あること、又歌徳に自然感情之徳、深義含藏之徳、賢愚同詠之徳、詠吟懋心之徳、神佛感應之徳の五つあることを述べ。

むかひごと道行觸 一卷寫

同

歌の對に正對、反對、語對、意對、合對、餘意對の六つあること、そへ歌、かぞへ歌、なすらへ歌、たとへ歌、

ただこと歌、いはひ歌所謂六義につきて説く。

題詠のこと 一卷寫

前田利保

歌は眼前のこのみいふものにあらずとて、題詠を卑む説を斥け、次に題詠の方法を説く。

山彦傳 一卷寫

同

貫之高遠の駒迎の歌につき、調のことを述べ、歌を詠むに下句よりよます上句より詠むべしと辨じ、次に歌は何の爲に詠むぞと辨へ、又風體のこと、歌の餘意のこと、景樹及海野游翁の二人が歌の清調を心得たることを述べ又門下の歌を添削する注意、合せて十五條を含む。安政四年の作。

活用雅俗風調の辨 一卷寫

同

雅俗は言葉によらず活用によりて分ること及萬の詞は共に轉りゆくこと等十一條を含む。

時運の差異 一卷寫

同

富士谷氏の説に基き、上古より近世まで、文學和歌の上に六期の變遷あることを説く。各期に互り代表的作物の

名を挙げ、又語法修辭等の變遷あることを説く。

近隣 一卷寫

同

和歌の風調に、京都宗匠家の風、古學派、及五七十年以來の風の三派あることを論ず。安政五年の作。

園のすて草 一卷寫

同

歌位に通俗、白雪、高調、有心、得意の五體あることを説き、各體とも自詠數十首の例歌を載す。書名は

「さかひをばいかで立てまし花も實もあれわたりたる園のすて草」

に由りたるものなり。

歌判記隱 一卷寫

同

一首の歌をみて、その判を定むるには、春夏秋冬四項に従ふべし。まづ調のことを、次には語脈を検し、次に辭の係結を、終には對言六等を校ふべしとなす。

又別に風調につきては、昔ぶり、あるべき風、桂ぶり、柳ぶり、今様の五つありとせり。桂ぶりとは桂園派、柳ぶりとは柳園即游翁の風、今様とは自家の作をいふ。

國頌専門 一卷寫

前田利保

國頌とは皇朝の歌學の義なり。この書は初學の爲ならで稍深く進みたる人に説く。内容は和歌、意、辭、調、骨節、語脈、對語、緣語、秀句、體語、用語、虚語、雅言、俗言、時言、懸辭、結辭、活用六位等を説く。

國頌専門嘉々 一卷寫

同

國頌専門の補篇ともいふべく、前書よりは一層高尚にして周易などの義にて説ける所あり。

玩辭象 一卷寫

同

歌學を周易の原理に附會して説けるもの。前田侯の卒らる、鳳皇連の教なり。始に「皇國倭歌と稱する神用の教道は凡天下の通利にして、思慮分別より詠吟する物に非ず。皆乾坤本然の動靜にて天地の道を瀾論する大業なり云々。」などいへり。

龍澤公歌道隨筆 一卷寫

同

隨筆の部を見よ。

詞之大綱 小五卷

四季戀雜に分ち、題を擧げ、題意を説き、五十音順にて詞を集め讀合及發語を載す。所々繪を挿みて上板す。

桂園遺文 一卷

鈴木光尙

景樹が時に觸れ事に臨みて致へし歌のこと、門人の詠草の奥に記せし文を集め二卷となし、安政六年上木す。片岡謙光の序あり。中に新學異見或問に答ふる文あり。終に桃澤夢宅に答へし董の説あり。

伊勢家苞 二卷

井上文雄

本居宣長の玉叢、萩原廣道のさよしぐれの中のこと、その他歌のことを記す。中に枕詞の論などもあり。上卷は安政六年に下卷は文久二年に上板。書名は門人佐々木弘綱の伊勢へ歸れるに送るとの義に由る。◇文雄は寛政十二年に生れ、明治四年歿す。年七十二。田安家に仕ふ。柯堂と號す。一柳千園の門。幕末歌人の雄たり。

詞の塵芥 十卷

鈴木重胤

歌題歌趣等を説明し、多くの例を示して、作歌の手引とせるもの。四季戀雜の順に従ふ。袖珍本二卷安政七年上

板。自序あり。

調の直路 一 卷

八田知紀

歌は詠ふべきものにて理るものならずといふことを、歌につきて説き示し、師の調の説を述べ古歌の秀逸は大方喉音の字の多きものにて、後の俗調は多く齒音の重るに由るといへり。折本として上本す。又歌學全書十二編にも収む。

敷島考 一 卷

同

贈勝安房守書 一 卷

同

答三浦千春書 一 卷

同

續歌學全書五編桂の下枝に収む。敷島考は嘉永七年に記しおきたるを安政六年高橋正風が需によりて記す旨奥書あり。後の二書も歌道に就きて論せるもの。

調の直路辨 一 卷 寫

山田泰平

知紀の調の直路の説を辯駁せるもの。千代の古道辨と合冊とせり。◇泰平は香川景樹の門。

殿づくり 一 卷 寫

中島廣足

詠歌の標準を後世に取るを非とし、昔の歌は大極殿、紫宸殿の如く、後世のものは小座敷茶室の如しと喻したるものにて、紙數五六葉に過ぎず。翁の孫武田寧氏自筆本を藏す。安政の末頃に成るか。

倭歌諸説 一 卷 寫

同

やまとうたといふ詞を諸書に求めて、先輩のこの詞に關する考説を擧げ、更に之を考證評論せるもの。文久元年六月に成る。

權園歌語 一 卷

同

著述目録に見えられたれど、現存せざるにや。管見に觸れず。

咏物六帖草稿 一 卷 寫

谷景井

首に題詠の論を掲げ、次に四季に分ちて題を掲げ、各四段に分ち、一段には初句三句に詠むべき句を擧げ、二段に名の詞を置き、三段には縁語を擧げ、四段には結句に用ふべき詞句を載せ、證歌は萬葉集の卷丁數を註し、題

は濱の眞砂より、戀の歌のみは式より取り寄せて詠作のたよりとせるもの。◇景井は谷好井の子、通稱萬七。寛政七年に生る。世々土佐侯の儒臣にて文久二年文館の助教となり、明治三年歿す。年七十六。谷千城の父。

六帖詠格 一卷寫

谷 景 井

四季戀雜に分ち、題を擧げ、各題につきて、體、用、名所、枕、因物と項を分ちて參考となすべき詞句を記したるもの。前書を改訂せるものか。自筆本谷子留家にあり。

和歌手ひき草 一卷寫

行 麿

寛平延喜より屏風歌により題詠を生ぜしこと、詠歌者は五十音圖により假名遣を心に留むべきことよりその他詠歌の心得を説き、その師大國隆正の説を引き語格などのことを説く。中に「天保調どうか弘化とおぼえたり、またもしらべを嘉永とぞいふ」の如き狂歌を擧げたれば、その成りし時代を知るべし。慶應大學圖書館に一本あり。

かた糸 一卷寫

渡 忠 秋

古今序正義の説などを引き、歌は皇國政化の本ともなるものなれば、一つの風流となし藝術と見做すべきにあらず、又正史の補ともなるべきものなれば重んぜざるべからずとの意見を述べ、又舊歌を以て師となすとの説は弊

害あり、歌は只實情を述べべきものにて、詞は義理を害はぬかぎりは時勢に従ふべしとの意見を述べたるもの。自筆稿本佐々木信綱博士所藏せらる。◇忠秋は近江の人、楊園とも桂蔭とも稱す。文化八年に生れ、明治十四年に歿す。年七十一。

袖の露 一卷寫

橋 村 淳 風

伊勢の御巫清友が歌集の序につきて、近來思ふがまゝに書列ねて、對句もなく、文字の数も定まらず、古き例なきさまなり。今も撰集の風に倣ふべしといへるを評せるもの。彌富破摩雄氏一本を藏す。◇淳風は天保五年に生れ、明治三十四年に歿す。年六十八。度會彌宜にて、足代弘訓等に學ぶ。足代弘訓中島廣足井上文雄等の教を受く。

爲博噬虎 一卷寫

御 巫 清 直

橋村淳風が父の歌集の序に關する説をうてるを憤り、安政七年父に代りて辯駁せるもの。始に淳風が説を平假名交に記し、辯駁は一字下げて片假名交り文にて記せり。

狩場の山 一卷寫

橋 村 淳 風

爲博識虎の説之排したるもの。彌富破摩雄氏著書自筆の一本を蔵す。

和歌濃杖 一卷寫

阿部惟貞

始に萬葉の假名、次に冠辭の抜書、次に歌詞にてをば等を註す。圖書寮に一本あり。

發情一家言 二卷寫

中條信禮

詠歌上の係結語格等に就きて説明したるものにて、紀傳學の一家の歌學に必要なこと等を説く。萬延二年に成る。◇信禮は幕府の高家にて、豊蘆館と號す。

長歌玉琴 一卷寫

六人部是香

始に長歌の變遷を説き、次に一篇の製作上、序辭、發起、述義、判辭、結語の五階を設け、萬葉集の歌例を示し、又對句を常對、長對、短對、隔對、三連對、義對、反對、組織對の八つに分ち、又體制八則を設け、古歌を例證し符號を用ひてその關係を知らしむ。狩野亨吉氏一本を蔵す。家藏本はこれに據りたり。奥に萬延二年起稿、文久元年全く成る旨與書あり。◇是香は文化三年に生れ、文久三年に歿す。年五十八。平田篤胤の門人。家を榮舎と號す。山城向日神社の神主。美濃守と稱す。

詠歌本論 三卷寫

同

目錄にも見え、他に引用せる所あれど、已未だ見ず。未定稿なるか。

古今集序文義考 一卷

堀秀成

貫之の序文を、歌といふもの、すべての論、歌の古盛なりしことの論、歌の今衰へたることの論、この集の成りぬることをいへる論の四大段に分ち、更に十六の小段に分け、二十八格を設け、守部の三撰格にならひ符號を以て分てり。文久元年成る。自筆本藤岡好古所藏。◇秀成は文政二年に生れ、明治二十年歿す。年六十九。琴舎と稱す。音韻學文法家。音義大全等の著書多し。

遠藤千胤和歌聞書 一卷寫

桂園翁傳、活言考、すみれの説、みあれの考の四條を録す。みあれの考は文化十年金田元就の問に對し、香川景樹の答へたるもの。すみれの説は桃澤夢宅に景樹のいひ送れるもの、桂園翁傳は野史の誤を訂正せるもの。活言考は景樹の唱へし延、振、少動、彌氣、萌の五條に竹内享壽が氣、令、被の三條を加へて八條とせるもの、文久二年七月法眼享壽の序あり。以上坐光寺益堅の稿本を内山眞弓より傳へて寫せるもの。

宇太鷺多理 三卷寫

西原晁樹

上編には短歌の正體を、中編には同じく變體を、下編には長歌、祝詞、壽詞等に就きて論ぜり。その説古風三體考に基く所多し。草場佩川の序あり。慶應二年門人の寫本あり。◇晁樹は柳河の士、安永九年に生れ、安政五年に歿す。年七十九。通稱多門。川隈舎と號す。清水濱臣の門人。

歌學正言 一卷寫

鈴木雅之

歌は情をのぶるものなること、之に内外の別あることを知り、本末の辨あることを説き、次に歌體、情、言、調に分ちて論じ、終に或問を設け、餘意を發揮せしめたるもの。◇雅之は天保八年に生れ、明治四年に歿す。年三十五。伊能顥則の門下。明治の始大學少助教となる。

みちのさきはひ 一卷寫

井上文雄

詠歌の法を論ずる小冊子にて、賀茂本居二翁を排擧せる所あり。門人大神御牧が文久四年の序あり。書名は「言靈のさきはひ道に入る人は神もうれしとみそなはすらむ」の歌に由る。

景恒歌話 一卷

香川景樹

又景賢問答ともいふ。宮原賢の問に答ふるもの。歌の趣向の心得、直好和紀の優劣、點取歌の添削心得、歌合を見る心得、當座題歌よむ心得、短冊の墨色心得、撰集の心得等十餘項を含む。井上通泰氏一本を藏す。◇景恒は景樹の子文政六年に生れ、慶應二年に歿す。年四十四。

歌格新論 一卷

井上淑蔭

主として兼句のことを説く。慶應二年の著にかか。東大國語研究室に一本あり。

言葉のしをり 二卷

古今集の語格を解剖せるもの。中西惣兵衛自筆、作林光平批判奥書ある本、井上頼國氏藏す。

歌格諺話 一卷寫

同

心詞聲にあやあることを、俗諺等を引きて説明す。慶應三年著。◇淑蔭通稱は多藏、武藏の人。文化元年に生れ、明治十九年に歿す。年八十三。清水光房の門人。井上文雄にも就きたるか。明治の初大學助教となる。

古歌韻解 三卷寫

小川弘

書紀の歌に押韻ありとて八雲以下の歌を漢文にて記し、詩經などの體に誌せるもの。例へば八雲は家を修むるなり、第二第二句韻、後段換韻、句々韻などに於けるが如し。後慶應四年に序を加ふ。聖駕北巡の時甥旗野十一郎進覽に供す。上野帝國圖書館に一本あり。◇弘は越後の人。

略註續古歌韻解

二卷 寫

旗野十一郎

小川弘の古歌韻解にならひ、古事記の歌を悉く韻ありと説けるもの。始に散韻格、三韻格、律韻格に分ちて説ける所あり。慶應四年の序あり。

八雲のしをり

一卷 寫

間宮永好

詠歌法を細に説けるものにて、歌をよむ數のことより、先題を定むべしとか、形をうるはしくすべしとか、題詠と實景とはよむべき様等數十條を載す。自筆稿本佐々木信綱氏藏す。◇永好は水戸の人、文化二年に生れ、明治五年に歿す。年六十八。小山田與清の門人、松の屋と號す。妻八十子と共に歌名あり。八洲文藻の編輯に與る。

翠園歌論

一卷 寫

鈴木重嶺

明治七年佐渡にありし時、屋代柳漁の問に答へしもの、宮中御會の題などにつきての考、星野千之よりの問に答

ふるもの、八年一月柳漁の問に對し歌學の書及準とすべき歌につきての答等を含む。井上頼園氏その寫本を藏す。

國歌風調論

一卷 寫

同

世々の撰集を音樂に比して説けるもの。萬葉は俗耳に遠き雅樂、新古今以下三代の頃までは琴唄、金葉詞華は上方長唄、古今新勅撰は長唄常磐津清元の類、それより以下玉葉風雅の類に至りては新内節なりなどと説き、古今の風調を宜しと説けるもの。翠園叢書の中に收む。◇重嶺は幕臣佐渡奉行たり。伊庭秀賢の門人、翠園と號す。明治三十四五年頃まで存命。

言葉の徳

一卷

安部直貞

言の葉の人心を感動せしむる功を述ぶ。長周叢書卷三に收む。直貞は山口の人。

資枝卿御教訓書入

一卷

佐々木弘綱

日野一位卿の和歌教訓十五條を挙げ、その中意見の異なるものに印を附けたるもの。但しこの十五條は烏丸光榮の説に出づ。一本佐々木信綱氏所藏。

和歌庭訓抄 一 卷

安部直貞

歌を詠む心得二十三ヶ條を一つ書にせるもの。例へば

歌をよまむと思ふときは心を鎮め氣を治むべし。

初心の程はむづかしき題をよむべからず。

歌は下句よりまづ詠みて次に上句を案すべし。

わざとかまへて巧によむべからず。

さら／＼とよみ流したるに妙ありと知るべし。

等に於けるが如し。自筆本佐々木信綱氏所藏。

歌格分類抄 一 卷

高須葛根

長歌の格を示すもの。例へば古事記の長歌の中、夜知富許の伴には對句の置處を立てずとか、慈延久佐能の伴には長歌に短歌を加ふとか、阿米那流夜には無對句とか、宇陀能には二斷歌とか、夜麻登能には短歌の間に片歌答を以てすと説くが如し。明治二十一年に成る。東大國語研究室にあり。◇葛根は三河の人、文政十年に生れ、明治二十五年に歿す。年六十五。中山美石の門人。

歌のことあげ 一 卷 寫

稻垣琴成

記紀萬葉以降八代集の歌の變遷を論じ、世の並々の歌人が眞淵の尙古主義に傾き、あやもなく調べも整はぬ歌を詠み續くるを非難せるもの。附録に萬葉古今の歌と題して、歌の盛時は奈良時代新古今時代に限るべからず、その代その代の歌あるべきことを説き、眞淵の推獎せる余槐集の歌は却つて作り物なりなどと説けるもの。門人石川稔稻の聞書なり。◇琴成は文化三年に生れ、明治二十一年に歿す。年八十三。平田篤胤門。

心のよるかた 一 卷 寫

谷千生

八田知紀の調の直路を評せるもの。知紀の主調説に對し、歌はうたふものにて理るものならずとは甚だしき僻事なり。ことわりは本として調はこれにつげるものとすべし。調は天賦に成るの道などいふは何の義たるを知らず、理とは言語の約束上に成れる法則なりとて、一々その意見を一字さげに記し、擧げたる歌をも一々に評せるもの。明治六年に成る。◇千生は徳島の人、大麻比古神社の禰宜などを勤む。藤屋春雄の門人。

和歌禪話 一 卷 寫

伊達千廣

明治九年十月より十一月にかけ、その和歌禪堂に於いて講ずる所の三回の講説にして、歌と禪とを合して説く。續

歌學全書十一編にも收む。◇千廣は紀伊の人、享和三年に生れ、明治十年歿す。年七十五、本居大平の門人、晩年は自得居士と稱す。伯爵陸奥宗光の父。大勢三轉考、餘身歸、枯野集等の著あり。

伊勢の家苞辨

一卷 寫

堀 秀 成

井上文雄の伊勢の家苞の中、本居翁の玉あられに關する批評及その他語格などの誤謬ある點を指摘せる小冊子にて、明治十一年八月十九日成る。藤岡好古氏その自然本を藏す。

歌の姿の論

一卷 寫

同

長明が無名抄に見えたる、景氣の浮べる歌、浮校の如き歌、匡房俊成顯輔の歌のこと、及國部春平の六禁考、高崎正風の歌評等を掲げ、次に批評を加へたるもの。

歌 名 考

一卷 寫

同

歌といふ名稱につきたる考にて、紙數纒に三葉に過ぎず。

古許呂能志遠理

一卷

野々口正武

古典に基き、道、歌、作堅、瑞穂等の諸項に分ち、古道を説けるもの。明治十一年安倍喜平の序あり。正武は隆正の養子。

歌よむことの論

一卷

伊能 穎 則

雜誌歌學二號に載するもの。纒に一篇の文のみ。

およつれごと

一卷 寫

鈴木 重 嶺

或人の歌學の順次を問ふに答へたる書。長歌文章の問答と合本とす。

歌學裁捨衣

八 卷

上 田 及 淵

四季各題を擧げ、次に五言七言の歌句と例歌とを載す。明治十二年出版す。◇及淵はもと滋野貞麿といふ。天草の人、上田宜珍が孫、後岡山に住み名を改む。南宮と號す。勤王の功により大正八年從五位を贈らる。古歌大義南宮十體歌抄の著あり。

歌道本義神風の伊勢の海

五 卷

村 山 守 雄

一卷には總論十ヶ條を挙げ、歌道は神武天皇の御道なること、歌に男女二調ありて、この二つは句數の奇偶による等の説を立て、次に句數の多寡により記紀萬葉の歌を連ね、序句、對句、長對、連句、連對句、首尾等の符號を定め、之を一々歌の上に施したり。明治十三年印行。◇守雄は文政元年に生れ、明治二十三年に歿す。年七十三。大阪朝日新聞の村山龍平氏の父。

長歌學柱 一卷 寫

權田直助

一名を長歌品定といふ。青島貞賢の記す所、長歌の一篇に起格、進格、成格、收格の四部あること、五七の連續せるものを一句と見るべく、其の五七各句を未成句、二句を既成句など、分ちたり。自筆本逸見仲三郎氏所藏。◇直助は武藏の人、文化六年に生れ、明治二十年に歿す。年七十九。名越舎と號す。平田篤胤の門。維新の頃王事に勤む。晩年相摸大山神社の宮司となる。

長歌學柱別本 一卷 寫

明治十四年二月初稿本に同十六年二月訂正して緒言を加へ、十九年四月増訂せる一本は緒言及首の數葉は普通本とは多少の差あり。佐々木信綱氏一本を藏す。

開化新題和歌梯 一卷

佐々木弘綱

新題を挙げ、例歌三首つと次に五七の詞を載せ、附録に歌を集む。復古、自由、廢刀、斬髮、牛店等の題あり。明治十四年に出版。◇弘綱は伊勢石樂師の人、文政十一年に生れ、明治二十四年に歿す。年八十四。足代弘訓の門。竹柏園と號す。佐々木信綱博士の父。

進講筆記 一卷

高崎正風

明治十六年一月六日、御講書始に、古今集序に就きて進講し奉りしを、門人香川景敏の記せるもの。續歌學全書十二編に收む。◇正風は薩摩の士、天保七年に生れ、明治四十五年に歿す。年七十七。明治二十二年御歌所長を拜命。明治十八年男爵を授けらる。鶴廬舎といひ恩波閣老人とも稱す。

和歌入門 一卷

三田葆光

短歌を學ぶべきことを述べ、和學の參考書等を掲ぐ。明治十七年十二月出版。集あり、楳紅葉といふ。

石園歌話 一卷 寫

飯田年平

歌のあやとふしとの二つあることをいひ、萬葉考玉勝間等の説を引き、石原正明の説を排し、景樹の歌を評し、歌病なども論ぜり。明治十七年成る。本居譽顯氏一本を蔵す。◇年平は因幡の人、通稱七郎。文化七年に生れ、明治十九年に歿す。年六十七。石園と號す。秀雄の子。伴信友加納諸平を師友とす。集あり、石園集といふ。

初技折集 一 卷

熊耳立哲

題、縁の詞、歌の病等の古説を摘記し、次に助辭などを擧げ、俗譯して次に例歌を出す。齋藤勝明の関、明治二十年版。

此花の葉 一 卷

近藤清石

熟語纂の一部にて梅に關するもののみを抄して明治十八年に上版。例へば雪間の梅、時知る梅、冬木の梅等の題を掲げ古歌により來れることを註す。

和歌王言使 一 卷

松本帶川

歌作に關し文法上の心得などを記す。題名はわかかなづかひと訓む。明治十八年上版。

歌 學 新 論 一 卷

物 集 高 世

歌は感哀の聲にして、理に泥むべからず。詞は心のよく聞ゆるやうに詠むべし等の説を述ぶ。元治元年に成り、明治二十年上版。◇高世は豊後の杵築の人、文政六年に生れ、明治十六年に歿す。年六十一。定村直好の門、菴屋と號す。物集高見博士の父。

國學和歌改良論 一 卷

小中村義家等

第一章には和歌の流弊を論じ、第二章にはその改良を講じ、三章には 謠を論ず。明治二十年刊行す。

國學和歌改良不可論 一 卷

武津八千穂

和歌山の人。尾張の家苞などを引きて高崎正風翁の景樹辯護説を斥け、和歌改良不可を論ず。有栖川宮殿下の題辭あり。明治二十年上版す。

歌 謠 教 育 論 一 卷

西村正三郎

教育時論の主筆西村氏がその雜誌にのせたるものを敷衍して一冊子となせるもの。明治二十一年刊行す。

長歌改良論 一 卷

佐々木弘綱

明治二十一年成る。萬葉の五七調は古きに過ぐるをもて古今の七五調に據るべきことを説けるもの。

長歌改良論辯駁 一 卷

海上胤平

佐々木弘綱氏の長歌改良論を駁す。久我、副島二公の題字、忠胤の序あり。明治二十一年に成り翌年刊行。◇胤平は通稱六郎、加納諸平に學ぶ。文政十二年に生れ大正五年に歿す。年八十八。

歌の葉 一 卷

佐々木信綱

技藝百科全書的一篇に收む。歌の沿革及種類を説く。明治二十一年發行。

古代歌格 三 卷 寫

渡邊真楫

記紀萬葉の歌を三部に分ち格調の新古を論じ、歌も擧げたるもの。佐々木信綱氏一本を藏す。

新撰歌典 一 卷

落合直文

歌の沿革、歌の作法、類語及作例、枕詞の四つに分ち、親切に手引す。又著者の新しき意見の加へられたる所あり。明治二十四年出版す。◇直文は本姓鮎貝、落合直亮の養子となる。文久元年に生れ、明治三十六年に歿す。年四十三。萩の舎と號す。

間島冬道歌話 一 卷 寫

門人の問に對し、歌の本質を説示せむとて、歌は言語の美術なること、戀歌のこと、歌に諧謔及快活の要あること、景樹貫之等の批評及今人の説などを評したるもの。井上通泰氏の寫本による。◇冬道は名古屋の人、第一國立銀行の支配人たり。

新撰歌かたり 一 卷

中村秋香

明治二十四年毎日新聞などに連載せるもの等を輯めて、一冊子となし、同年十一月發行。歌話歌評等を含む。◇秋香は静岡の人、天保十二年に生れ、明治四十三年に歿す。年七十。松木直秀の門人。不盡廬舎と號す。第一等學校教授御歌所寄人となる。

正調新案和歌作法指南 一 卷

笹村良昌

始に真歌は詠むに難からず以下二十三條を説き、次に新年より四季の各題を掲げ縁語を載せ、例歌を示す。明治二十四年刊行す。◇良昌は高知の人、天保三年に生れ、明治四十二年に歿す。加藤千浪の門人、野紅花園と號す。聞幽會を開き子弟を教ふ。

類辭類言撰歌集 小一卷

魚住長胤

上卷は勅選の中主として古今集などに就き、助辭により類歌を集めたるもの。その順序はすぬねむめ等の如く八衛等に見えたるが如き文法上の關係による。下卷はあはれ、あは、いかが等の如く、富士谷氏の所謂かざしを含める類歌を五十首順に擧ぐ。明治二十五年出版。

和歌遠鏡 三卷

佐々木弘綱

歌語をいろは順に擧げ、その例歌を二首づゝ載せ、旁に片假名にて詞の意義を俗譯せるもの。天の卷には東久世通禧の序、人の卷には井上文雄の序(安政三年)あり。明治廿五年上木。

歌の栞 一卷

佐々木信綱

上篇には歌の沿革種類法則雅遊書式を、中篇には類題名所、假字格、冠辭、歌詞の便覽を、下篇には作法、類語

集、作例、名歌集を擧ぐ。明治二十五年出版。

新體詩學 一卷

大和田建樹

通俗文學全書第一編に收む。明治二十六年刊行。長歌の作法を説く。

應用歌學 一卷

同

歌よむ譯、歌よむ法等初學詠作の助となること四十二項を説示せるもの。通俗文學全書の五編に收む。明治廿六年博文館より出版。

今様考 一卷

佐藤誠實

雜誌歌學の八及九號に載せたるものを集録す。

歌格類聚 一卷

富田良穂

類似せる句の歌を連ねたるもの。例へば、春は來にけり春めきにけりの類を相並ぶるが如し。明治二十六年出版。

歌學會歌範評論 一 卷

海上胤平

明治廿六年印刷。批評の部を見よ。

大八洲學會詠歌正邪論 一 卷

春日敬之

明治廿六年印刷。批評の部を見よ。

和歌詞の千種 二 卷

聽雨庵遺稿を百合園主人の明治二十七年に再輯せしもの。和歌によむべき歌を集め詠方の助となす。

歌學作法指南 一 卷

川上文彦

歌よむ法、歌の種類等二十餘項を説き、終に歌の稽古便法と題し、填字法により練習せしむる法を擧ぐ。上欄には雅語要解、中欄には假名用格及歌言類語等を載す。明治廿七年印刷。◇文彦は鳥取の人。

歌學案内の詞の解 一 卷

三田村熊之助

作歌法を説き、次に歌語を多く擧げて註釋す。明治廿七年發行。

初學必携和歌獨まなび 小 二 卷

東 遷

上卷には短歌長歌の別、文字餘りより、てにはのこと等を、下卷には題の意及例歌を擧げたり。又上欄には今古假名遣を載す。明治廿七年宮澤時次郎編みて上板す。

組立自在歌學作法新書 一 卷

平野長興等

歌よむ稽古等より、題のこと、歌文字等のことを擧げ、終に歌作り方早覺えと題し、桂園派の人々の歌を抄し、その或句を空圖となし、これを填めしむ。啓蒙的のもの。明治廿七年出版。

歌學捷徑 一 卷

井口隆太郎

女學全書第三編に收む。始に歌の起原沿革種類句法等を説く。終に恰野草野二集の歌を抜き填字法により練習せしむ。明治廿七年出版。

明治の歌 一 卷

小 出 榮

撰抜歌、歌學入門、かなづかひの考、冠辭類編及懷紙短冊詠草の書式を説けり。明治二十八年小出氏の序あり。翌年出版。

和歌蘆の葉 一 卷

岡 吉 胤

四季戀雜新題に分ち、題意を説き、詞及例歌を擧ぐ。同二十九年出版。◇吉胤は大保四年に生れ、明治四十年に歿す。年七十五。佐賀の人、古川松根の門人、皇祖教管長たり。

國歌新論 一 卷

末 松 謙 澄

讀賣新聞誌上にて、與謝野鐵幹と歌を論ぜしものを纏め、之に詩歌問答十則並に松永松齡に答ふる書を併せて、明治三十一年出版。

増補詠歌自在 一 卷

佐々木信綱

詠歌法を説き、附録として詞のしをり、假名のしをりを加ふ。父弘綱の原著を増補せるもの。明治三十年出版。

詠歌辭典 一 卷

同

少年歌話 一 卷

同

萬葉集及新葉集につきて、及歌學の變遷を説き、後に近世名家々集拔萃を載せ、附録には藻かり舟と題し自家の新體詩を載せたり。

作歌の葉 一 卷

下 田 歌 子

明治三十一年發行の家庭文庫に收む。

和歌韻法 一 卷

東 敬 治

序説、韻法、評論、和漢洋詩歌對照の四篇に分ち、七格五十二式を説く。明治三十一年出版。

和歌蘆の葉 一 卷

平野七左衛門

初學の爲に歌釋を擧げ作法を説く。明治三十一年出版。

新撰詠歌法 一 卷

武 島 羽 衣

始に總論及日本歌學史の梗概を擧げ、本論を三篇に分ち第一編に歌の本質及分類を、第二編に歌の體製を、第三編に歌の聲調を詳論せり。維新後の歌學書中新撰の名に負かぬもの。明治三十二年出版。

今様考 一 卷

江刺恒久

今様に本體調、對句調、連句調の三種の別あること等を説き例を擧げたり。明治三十二年出版。◇恒久は盛岡の人

女子歌物語 一 卷

石原和二郎

采女より阿波局まで三十一人の歌物語をあぐ。明治三十二年出版。

霞裳歌話 一 卷

武島又次郎

雜誌に載せたるもの、その他を集めて一冊子となす。歌とは何ぞ、和歌と狂歌、初學者のよむべき姿を始め、東西の歌人歌話などを載す。明治三十三年發行。

歌まなび 一 卷

大和田建樹

新年四季雜に分ち、題をあけ意を説き、次に用語材料及所等を擧げ、次に五言及七言の句を載せ例歌を加ふ。始に

歌とは何ぞ、歌の種類以下言葉修辭書式等のこと三十項を説き示し、終に歌題類聚を添ふ。明治三十四年博文館にて出す。◇建樹は宇和島の人、外舅飯田武郷の門人、東京高等師範學校教授たり。

歌かたり 一 卷

金子元臣

雜誌國文學その他誌上に載せたるものを輯む。『歌は』『四大作家』『高崎男の歌評の評』『歴代の歌』等を始めすべて七十七條、考證あり論斷あり見識あり趣味多き歌談なり。明治三十五年明治書院より發行す。

こぼれ松葉 一 卷

林陸夫

歌の組織、短歌の種類、詠歌の方針、題詠と實詠、言語の應用、結論の數章より成る。調の説を附録とす。明治三十五年松風會より發行す。さくら園大島爲足の序あり。

教科適用歴代歌典 一 卷

淺野井之冽

和歌の變遷、歌集の二門に分ち、教科用の爲、言文一致體に記せるもの。明治三十五年出版。

短歌小梯 一 卷

森田義郎

總論、短歌の研究、既に作られたる作物の研究、結論に分ち、補遺として短歌會論難を加ふ。明治三十六年出版。

歌徳記 一巻

黒田清綱

庭の摘草附録として明治三十六年博文館より出す。古今歌の功徳に關すること凡一千項を含む。

新自讃歌評論 一巻

海上胤平

徒然坊の集めたる小出榮、鈴木重嶺、松波資之、高崎正風等十人の新自讃歌を評せるもの。明治三十六年出版。

和歌作法 一巻

戸川安宅

女子學藝全書下に收む。古今集の歌を抄きて解し、題、枕詞及歌詞を説く。明治三十六年出版。

和歌心の姿見 一巻

岩田文藏

前書には初心、裏入、氣韻、餘情、修飾、兼意、比喻、妙用、懸語、誠意の十體を明し、後書には歌よむべき心得など細條數多擧げたり。明治三十二年小杉樞邸の跋あり。同三十六年出版。

作歌のしそり 一巻

志賀正光

四章より成り、第一章歌學には歌とは何ぞや、詩想の變遷、歌の詞を説き、第二章作法には歌の法則、想像、記憶判斷等を、三章には歌調を、四章には詠歌上の諸注意を載す。明治三十八年出版。

短歌作法 一巻

筒井源次郎

女學講義に載するもの。明治三十八年出版。

今古歌話 一巻

西村秋彦

大阪朝日新聞に掲載せしものを、一冊子となし、明治三十九年發行す。

和歌入門 一巻

金子元臣

明治三十九年十一月發行。

歌人寶典 一巻

久木田英夫

歌の體形、歌の沿革、歌の書式、歌書解題、歌人の略傳と項を分ちたり。明治四十年出版。

秋香歌かたり 一 卷

歌の正義、古人の口眞似、歌詞、雅言俗言、歌の新形式、茂睡、氣淵、千蔭、春海、蘆庵、篤胤、桂園、知紀、徹書記その他の人々の評などを交へ擧ぐ。明治四十年五車樓より發行。

新體詩の作法 一 卷

作法全書第三篇として明治四十年博文館にて出版。

和歌捷徑 一 卷

赤松玄吉

巻頭に文法を説き、次に題を擧げ題意を説き、作例として古今、新古今、六帖、他の勅選千首龜山院七百首等より歌を引く。明治四十一年香川新報社より發行。

和歌獨學 一 卷

高橋毅堂

題の種類、詠法、語格、假名遣を第一章より四章に分ち説き、次に題を擧げ四季に分ち平安朝より徳川時代に至

る人々の歌を引く。自序あり。明治四十二年修學堂より發行。

歌謡字數考 一 卷

中根淑

明治十四五年より三十年頃にかけて、各種の歌謡につきてその字數を考究したるものにて、これに六條の結論を得たることをいへり。歌謡は一々例を擧げたるのみならず各種類に一々叙説を加へたれば、一種の歌謡史とも見らるべしとて、木村正二郎氏が著者に請ひて、明治四十一年に大日本圖書株式會社にて出版せるもの。◇淑は幕臣、香亭と號す、金港堂の編纂主任たり。その遺稿香亭雅談、香亭遺文あり。大正二年歿す。年七十五。

歌學論叢 一 卷

佐々木信綱

著者の明治三十八年以來和歌學に就きての研究を集めたるものにて、和歌と時勢以下二十一項を收む。中に仙覺以前の萬葉研究及其の年表、歌格の研究につきて、戸田茂睡等種々有益の論文及趣味ある説話を含む。明治四十一年九月博文館にて發行。

短歌作法 一 卷

窪田空穂

編を八つに分ち、第一編には國民詩としての短歌、舊派和歌、新派和歌、新派の歌人と作品を説き、第二編には

短歌の立場と短歌の調子を説き、第三編には情緒と感興、作歌の手心、作歌の趣味を、第四編には一首の取りま
とめ以下の要項、第五編には創作時の態度などを、第六編には調子のことを、第七編には自己の特色等を、第八
編には短歌評釋をなし、蓋頭には例歌及景樹の歌論を加へたるものにて、明治四十二年三月通俗作文全書の一編
として博文館より出せるものなるが、この類の書としては出色なるものなり。

勅題詠進のため 一 卷

小神野芝太郎

新年勅題詠進者の爲に、年々の御題、及書式その他の参考となるべきことを説けるもの。明治四十二年發行。

歌人必携 一 卷

大町壯

歌はいかして詠むべきか以下三十二條、和歌書式及景樹の歌評をかかぐる小本。

歌合の作法 一 卷

同

歌合の次第作法を簡單に記し、會席用に充てむとせる手帳形の小本。明治四十二年發行。

歌の手引 一 卷

大和田建樹

初學に詠歌の教を示すもの。古今集などの歌を引き、詠作の心得文法などを説きたり。所々に畫を挿み、上欄に
多少の註を加ふ。自序あり。明治四十二年博文館にて發行す。

新題詠歌詞林 一 卷

羽根田文明

新題を五十音順に排列し各題に詠むべき詞を擧げその意義を詳しく説き、作例として自詠及近代の人々の作を載
す。明治四十三年内外出版協會より出版す。

和歌の作り方 一 卷

島崎末平

首に歌の意義を説き、次に和歌發達の歴史を述べ、新舊二派を説き、作例として新派には落合直文、佐々木信綱、
與謝野寛同晶子、服部躬治、金子薫園、尾上柴舟の作を、舊派の例としては古今集の歌を引く。明治四十三年文
成社より發行。

和歌と助辭 一 卷

三矢重松

和歌には助辭の大切なることを説き、助辭を動助辭靜助辭に分ち、その用法を詳しく説明せるもの。明治四十
三年出版す。

帝國歌學史 上 一 卷

神谷保朗

1170

大篇は七章より成り、記紀時代、萬葉集時代、古今時代―三代集の外後拾遺集の撰定まで、金葉集時代、新古今集時代、玉葉風雅時代、三玉和歌集時代に分ちて説き、附録連歌の沿革を三章に分ち、尙附録に歌會故實二章を附す。明治四十年出版。

日本歌學史 一 卷

佐々木信綱

編を二つに分ち、第一編は中世歌學を、第二編には近世歌學を各十三章に分ち、これに序論及結論を附し、参考書目を挙げ、終に中世歌學道統譜、近世歌學學統譜二葉を添へたる學術的の良著、明治四十三年博文館にて發行す。

歌學文庫 八 卷

室松岩雄

古來著名の歌學書を室松氏が編輯し、叢書として一致堂書店より發行せるもの。第一卷は明治四十三年九月に出で以下八卷大正二年六月に至りて完結す。左にその目錄を掲ぐ。

卷一、奥儀抄、袖中抄、

卷二、俊秘抄、井蛙抄、綺語抄、無名抄、戴恩記、悅目抄、

卷三、袋草紙、歌袋、袋草子遺篇、大ぬさ、秀歌之體大略、老のすさび、詠歌大概抄、歌枕、新撰髓臈、

卷四、幽齋問書、歌林良材、續歌林良材、耳袋記、新學異見辨、正風體抄、三體和歌、近來風體抄、和試肝要、

かりねのすさび、

卷五、和歌色葉集、歌乃大武根、和歌紀聞、

卷六、礎の浪、詠歌緊要考、歌學提要、席話抄、

卷七、徹書記物語、烏丸三代口授、吉備集、歌林一枝、

卷八、時秀脚問書、和歌深秘抄、河社、三代枕辭例、一葉抄、吾妻問答、さ、めごと、老のくりごと、若草山、

歌ものかたり 一 卷

高崎正風

高崎正風男の歌ものがたりを遠山稻子の編纂せるもの。雪中馬上の御断答以下、趣味ある歌話四十五條を載す。柳原典侍、小池掌侍の序を加へ東京社より明治四十五年に發行す。

1171

二、隨筆
總說

三三

隨筆は系統なく統一なく、見るにつれ聞くにつけ思ふがまゝに記せるものなれど、不用意の處に作者の面目も見はれ、録するところの事項も各種各般のことに互れるを以て、唯讀過するのみにても興味津々たるもの多し。百家説林に收むるもの正續合せて九十七種。尙この外にも少からず。されど全篇悉く歌道のみの隨筆とては僅に指を屈するに過ぎず。以下歌に關すること多きものをも併せ説くべし。

隨筆の祖にして且王とたへらるる枕草子も歌に關すること少からず。長明が無名抄の如きは歌道隨筆の古きものならん。足利時代に何々問書といふ中には歌道隨筆と名づくべきもの多しといへど、歌集の部に擧げたれば茲には言はず。徳川時代に於てはまづ契沖の河社をその始とすべし。二十一代集三十六歌集等につき考説せる所流石に卓見あり。門人安藤爲章の年山紀聞には、歌道の古實、歌書、歌人傳、名歌等につき、師説又は自家の考を記し、伴暢が歌林備考亦斯道に資すべき隨筆たり。堂上の教を奉じ歌俳を兼ねたる岡西惟中が消閑雜記には、漢詩文と和歌と意相通するものを列擧し、又萬葉の無心所着と俳諧歌とを併せ論ず。その續無名抄は、その名稱よりして長明が祖ならひたること著し、その一時軒隨筆は古今集、連歌其の他名匠の歌に關すること多し。仁木充長が在京隨筆は冷泉家の文庫歌書儀式その他堂上家に關すること多く、野村尙房の一枝軒隨筆も香川梅月堂の教

を傳へて其の方面の歌道を説く。柳湖方塾が秋夜隨筆は歌の起のこと以下三十一條悉く歌に關せざる所なし。

次に漢學者の隨筆にては、徂徠の和歌世話を始として春臺が獨語の中には歌連歌俳諧を論ずること極めて詳密に、鳩巢が駿臺雜話卷五には、儒學を説くのかたはら六義の沙汰及倭歌に感興の益あることなど歌に關すること説き、茶山が筆のすさびには、詩歌の語勢強弱、詩歌の語など歌に關する數條を載せ、その他の儒者にも多少これに論及せるもの少しとせず。冷泉門下の萩原宗固の一葉抄は中古の歌話より興味あるものを抄し、入江昌燾の幽遠隨筆は萬葉以下鎌倉初期までの歌に關することを擧げ、石野廣通が大澤隨筆及蹄溪隨筆は自他の歌物語等に就きて部を立て、誌す、最も参考となすに足る。瀬下敬忠の川岡雜談も中古の歌人に就きて論ずる所多く、小野高濂が百草露の第三卷は歌學傳授に關すること多けれども別に自家の案はなし。本多忠憲のなりのその第九卷には歌話に屬することを多く載せたり。

國學者の方面にては特に歌に關することを説かざるなし。本居宣長の王勝間には、長歌の詞づつき五七なると七五なるとの論、混本歌、たとへ歌、六義のこと、萬葉集を學ぶ心得、古今集の長歌、初學のよむ様等、自説若しくは他書より抄出してこれに意見を加へたるもの各所に散見す。一部十四卷に存するものを拾ひなば、凡そ七八十項にも上るべし。富士谷成章が大海のはしは純然たる歌話にして、足利の季世より當代までの歌人の消息并に名吟などを知るに便あり。嗣子御杖が北邊隨筆には、自家の考父の説など交へ擧げたるが中に、歌の巧拙、歌の得失、歌の次第、歌の四知、題詠、探題、志貴島の道、貧窮問答等歌に關する諸説見るべく。伴蒿蹊が閑田耕筆

三四
卷四には、戀歌論、國歌體裁等の説見るべく、同次筆には、反歌の考、宜胤卿の類葉抄、その他歌の景物所屬の考など載せたり。蒿蹊と和歌四天王の一人に數へられたる滑月が和歌爲隣抄に契沖の説を痛駁せる、又木下幸文がさや草紙に宣長の説を駁せる、村田春海が織錦舍隨筆に、美濃家苞を駁せる如き隨筆により批評品騰をなせるもの。堂上派對古學派並に伊勢派對江戸派の關繋を見るべし。織錦舍隨筆には、家集辨、唐大和の歌のけぢめ等、十數項の歌に關することを載す。中には分ちて別本とせるものあり。門人清水濱臣が泊泊筆話は、全部歌に關するものにして、享保以降聞えたる歌人若しくは世に埋れたる作家の逸話を擧げ歌風を説けり。その遊京漫録も亦歌に關すること多し。同門本間游清が隨筆耳敏川、四方硯抄、蝶のふるまひの中にも多少歌に關する断片的の資料を收む。鈴屋門下の藤井高尙が松の落葉の中には貫之のかきたる古今集、爲家のかきたる百人一首本、昔の今様、古歌の心を説くべきやう等、歌に關すること十條を録す。春庭門下の森嘉基が醉月園隨筆には惟方西行并に後鳥羽院の歌に關することなどを載せ、大平門下の西田直養が笠舎漫筆には萬葉長歌格、長歌五選等の説最も見るべし。近代にては、吉田令世が鶉舟のすさみ、中嶋廣足が攝園隨筆、岡部東平の堅室日録、井上文雄の伊勢家苞、前田夏蔭の枕の塵、岡本保孝の浪波江、堀秀成の典舎漫録等とりどりに面白きことあり。今一々記さす。

書目解題

貞徳翁筆記 一 卷

松永貞徳

慶長十年頃まで細州幽齋に隨ひて教を請ひし間の歌物語を録せるもの。元祿二年寒川入道の寫は卷物なりしを、安政四年某日蓮翁の寫せる本錦江叢書に收む。續類從九五五卷にも採りたり。

一時軒隨筆 一卷 寫

岡西惟中

我朝をやまといふこと、いろはの事、古今集のこと、連歌のこと、こそ留りのこと、長嘯子の歌の事、光廣卿詠歌のこと等を説く、天和三年黒川道祐の序あり。宮内省圖書寮に一本あり。

消閑雜記 一卷

同

和歌俳諧その他考證などに關することを載す。中につき漢詩漢文と和歌との對比、萬葉の無心所着につき、俳諧論、萬葉古今百人一首の訓、和歌傳二條冷泉兩流等のことあり。萬葉假名にてかける自序及晋臥風の跋あり。後文政八年上刻す。又百家説林に收む。

もすの草ぐき

三卷寫

古歌の難事を解す。一卷にはもすのくさぐき以下二十二條、二卷には常陸帯以下十八條、三卷には曾我菊以下十八條を載す。松永貞徳の説を引きたる所あり。

雑和集 三卷

歌話にて、上卷には蟻油明神以下三十三條、中卷にはいつて繩のこと以下二十三條、下卷には余吾湖織女のこと以下二十一條を載す。上板の年月詳かならず。

言の葉草 二卷寫

上卷には歌の父母といはるる難波津、淺香山の歌等の歌話より、三夕、四季、五倫、五常、五色、五行、七夕、七小町、八景、十體、十二月、三十六歌仙等の名數に關する歌などを擧げ、下卷には倭國より廿四孝まで種々のことを掲ぐ。

河社 五卷

契沖

記紀を始め、古物語、三十六人集、神樂催馬樂、萬葉を始め古今以下の七代集、その他の歌集等につき考證し成は新考をも加へたるものにて、歌以外有職故實等に關することも交れり。元祿頃の作なるべく書名は卷首の題目に由る。自筆稿本賀茂別雷神社にあり。寛政八年小澤蘆庵は前波默軒に勸め、一々引書に照合して上板せしむ。寛政九年蘆庵の序あり。百家説林にも收む。

年山打聞 二卷

安藤爲章

年山紀聞と題せるもあり。六卷の完本の初稿本なるか、箇條も少く排列の順序も多少異なれり。別に拾遺一冊あり。打聞にもれたるもの六十餘項を收む。

年山紀聞 六卷

安藤爲章

故實典故に關することもあれど、主として歌に關する事項を收め、人麿赤人猿丸大夫の傳の如き、西山公契沖長流仁齋等の歌の如き、萬葉、百人一首、色葉和難抄の著作の如き、代匠記、釋萬葉集、漫吟集、蝶夢集、しのぶぐさ等の序の如き、或は種々の名歌の類を六卷に記したり。條項二百三十餘。元祿十五年に成る。寛政十一年小宮山昌秀の漢文の序、伴蒿蹊の和文序、享和三年橘経亮の跋あり。文化元年上板。百家説林にも收む。◇爲章は丹波の人、萬治二年に生れ、享保元年に歿す。年五十八。通稱新介、年山と號す。中院通茂公の門人、水戸義公に

仕へ、契沖にも學ぶ。紫女七論、千年山集等の編著あり。

一枝軒隨筆 五卷

野村尙房

主として歌學に關することを諸書より抄出し、又元祿より享保の頃までのこと及當時人々の歌などを多く載せたり。その師香川宣阿の歌を多くあげたり。◇尙房は備前の人、通稱權六、寛文三年に生れ、享保十四年に歿す。その歿年を寶永三年とするは誤。一枝軒と號す。香川宣阿の門人。

歌林備考 二卷寫

伴 暢

和歌に關する種々のことを集めたるもの。寶永元年の作なり。水戸彰考館に一本あり。吉田令世の鶉舟のすさみに、有職備考も同人の著と擧げたれど、そは藤咲正方の作なり。◇暢名は資矩、香竹と號し、水戸義公に仕へて釋萬葉集訂定のことを掌る。萬治二年に生れ、享保十七年歿す。年七十四。

仁木隨筆

享保八年柿本社に正一位宣下の宣命のこと、二十一代集長歌の調のこと、後水尾院御製、四式、五體腦のこと等を載す。仁木充長の聞書たるべし。松井簡治氏一本を藏す。

獨語 一卷

太宰春臺

歌、茶湯、俳諧連歌、音樂歌舞の變遷を説き、自家の意見を記したり。歌に關しては、詩歌はその趣同じきこと、詩歌共に時世に従ひて變遷あること、我國の歌は定家卿より衰へたること、堂上家の歌の權を握ることその弊害等を論ず。百家説林一に收む。これに關して濱田孝國の獨語辨あり。◇春臺は信濃の人、名は純、字は徳夫。延寶八年に生れ、延享四年に歿す。年六十八。徂徠の門人。經濟錄を始め著作多し。

在滿雜筆 一卷

荷田在滿

歌その他のことを記す。享保八年の長歌あり。佐々木信綱氏一本を藏す。

南山雜記 一卷寫

加藤枝直

始に萬葉集の歌の誤りて古今集に入れたる歌十首を載せ、次に萬葉古今等の語をよりく釋す。中に枕詞に關するもの及權馬樂の説などあり。自筆本東京帝國大學にあり。

修竹庵雜々記 一卷寫

安永四年七十五歳の時書き終へたるもの。修竹庵は誰なるか未詳。但しこれをさゝのきと調む。百首部類中の歌の考、堀河百首年紀、千五百番歌合の作者、その他種々のことを載す。

和歌打聞 一 寫

富士谷成章

次の大海のはしに同じ。神宮文庫にその自筆本あり。又清田君錦の批評の點を加へたる寫本あり。大聖寺藩の明庵主人の寫あり。

大海のはし 一 卷

富士谷成章

三條西道遙院の頃より延享の頃までの公卿の由緒ある歌をあげ、これに關する物語を載す。中務皇子の笏を奉る歌話より中國季豊の短冊の歌まで數十條なり。百家説林正編下に收む。

繪本蘭奢待 五 卷

宰相雅經以下古今名歌及それに関する逸話を載す。明和元年上板。醉雅子の題辭、月岡錦堂の畫を挿む。

幽遠隨筆 二 卷

入江昌熹

萬葉以下三代集、堀河兩度百首等より定家頃までの歌などに関することを載す。自序あり。安永三年上板。

久保之取捨尾 一 卷

入江昌熹

歌詞俚言日本紀等に互り、古説をあげ、今案を加へかどせるもの。天明四年に上木。

眞珠の船 三 卷

同

前書に同じ。但し書肆の請により、山川正宣、萩原廣道二人の閱評を加へ、嘉永三年再板す。篠崎小竹序、廣道の端書あり。

久照聞書 一 卷

京都帝國大學に一本あり。種々の考説六十七項を載す。中に序詞枕詞、俳神、歌字盡し等歌俳に關すること多し。天明二年の卑附あり。

隨筆叢 一 卷

貞丈の勢語臆斷別勘、眞淵の應問、宇萬伎の十二ヶ月名考等を收む。誰の集めたるか明かならず。

一葉抄 三卷

萩原宗固

三三

歌書より種々のことを抄出せるもの。例へば袋草子より藤原節信の逸事を、井蛙抄より爲家不堪のことを、八雲御抄より烏頭白きことをといふ如く、諸書より取れり。その簡條百五十三條。奥に、一葉抄三冊は百花庵宗固翁の隨筆なり。西田忠禮家藏彼翁手澤の本を乞ひ、文化七年秋是を書寫せしむ。大草公弼とあり。宮内省圖書寮に一本あり。◇宗固名は貞辰、元祿十六年に生れ、天明四年に歿す。年八十二。百花庵と號す。武者小路實岳冷泉爲村の門人。

大澤隨筆 六卷

石野廣通

第一二卷は人の物語を、第三卷は人に答ふる類を、第四卷は打聽、打思ふ類を、第五卷は他よりの抄書を、第六卷には平生口號の古歌並に出詠歌諸體、當時世俗の詞出でたる古歌古諺和歌打聞拾遺を載せたり。四五卷 各上下二冊とせり。自序あり。紙數八百枚に及ぶ。廣道赤阪溜池の邊に住みたるより書に名く。井上頼國氏一本を藏す。

蹄溪隨筆 一卷寫

同

大澤隨筆の補遺にして枕詞の事より白馬節會のことまで、凡百項に互る隨筆なり。始に序及目錄あり。前書と異り類を分たざることなど序中に記せり。井上頼國氏一本を藏す。又賜蘆拾葉にも收めたり。晩年の作。蹄溪も麴町に於けるも住地より名づく。

川岡雜談 二卷寫

瀬下敬忠

上卷には鴨長明、東野州、正徹、頼阿、長嘯子、石川丈山等より似雲、芭蕉まで四十一條、下卷には隨軒以下の人々のこと數十條を載す。傳記の補となすに足る。東京帝國圖書館に一本あり。◇敬忠は信濃の野澤の人、字は子信、樵路庵、浮瓢子、鶴巢軒などと號す。寛政元年に八十一歳にて歿す。

隣女晤言 二卷

慈延

和漢の古事古言、六百番歌合のこと、髪麥と床夏とのこと等歌その他に關する隨筆なり。桑門晃淵の序を加へ、享和二年上木す。◇慈延は京都の人、吐屑庵といひ、大愚と號す。冷泉爲村の門。文化二年寂す。

さやく草紙 三卷

木下幸文

上卷には四大人論、疑年山論、枕言葉、榮華物語總論、垂雲軒上人等のことを、中卷には三山歌、心同じくいて

三三

ひなしことなる歌、てにをほもじ重れる歌、樂山翁、樸翁居士等のこと、下卷には梅のあかと題し、玉の小櫛中詠歌に關する説を駁せるもの。◇幸文は備中の人、安永八年に生れ、文政四年に歿す。年四十三。朝三亭又亮々舎と號す。始め慈延につき後香川景樹の門人となる。集あり、亮々遺稿といふ。

貴耳隨筆 一卷寫

昌因

歌詞及俳諧に用ふる語につきての考説を載す。不忍叢書四に收收む。東京帝國圖書館本。◇昌因は里村氏。

錦織舍隨筆 二卷

村田春海

歌學歌話及歌詞の解説等に關する隨筆にて、上卷には千蔭が歌、三夕の歌、露草考等の項あり。下卷には家集辨、美草の考、莫書回隣考、三山歌考、美濃家苞難等の歌に關すること、その他師の冠辭考、同門千蔭が萬葉略解、宣長が記傳等につきての詞の註などに關し自家の考を加ふ。百家説林續編上に收む。

泊酒筆話 一卷

清水濱臣

全篇多くは歌話にして、隱口美仲が歌の話より、縣居織錦詩作の話まで三十六項を載す。趣味多き説少からず。文化五年に成る。百家説林正編上に收む。

斧の響 一卷寫

古歌集中、詠人を誤りたる歌九首、作者正しく記す歌五首、詞を誤りてにをほを誤りたる歌、又戲吟歌にあらずる歌等の題目をあげて考説せり。又道頼、胤國等の問に答へたる所あり。唐衣橋洲等の句をも終に出す。作者詳かならず。

卯花園漫錄 五卷

石上宣續

世事百談、桂林漫錄、とはすかたり、閑散餘錄、和學辨、玉勝間、秋齋閑話、その他諸書より抄出し、又自家の考をも加へたる隨筆にして、文化六年成る。天保九年日尾荊山所々書入をなせる本、靜嘉堂文庫にあり。◇宣續は卯花園と號す。

和歌雜記 一卷寫

屋代弘賢

松宮觀山のひふみよの歌、その女松給尼のこと、加藤枝直の觀山へ送る詞、法印安榮の家訓和歌、成章の此君泉銘等種々のことを記す。輪池叢書九に收む。東京帝國圖書館本。

北邊隨筆 一 卷

富士谷御杖

和歌、言詞その他有職等のこと、志貴島の道よりてつづといふ語に至る百五十八項に上る隨筆にて、多少父の考をも記したるところあり。仁徳天皇御製、御國言、歌の巧拙、冠辭、よみづめの一格、歌の四知、歌の次第等歌に關すること多し。文化十三年三月萬葉風の自序を加ふ。百家説林上に收む。

歌林一枝 三 卷 寫

上杉謙信より近代に至る人々の秀逸を擧げ、その逸事を記す。その體無名抄などに倣へるが如し。例へば貞徳が詠草を盗まれしときの歌を詠ぜしこと、似雲が西行を慕ひたること等に於けるが如し。

清貞漫筆 一 卷

源 清 貞

古今序、歌道の傳來、八月十五日夜、白河關、唐音を知ること、源語秘訣、百人一首五ヶの秘事、古今人々の名歌等種々のことを載す。圖書寮に一本あり。◇清貞は京都の人。安節堂と號す。賀茂季鷹の門人。

神 わ さ 一 卷 寫

三 島 自 寛

神わざ、花の口すさび、盃の贊、詠源氏物語和歌、樂亭壁書、土屋英直朝臣夫人開書の六部を合せたるもの。神わざとは飛鳥山にて神樂をききたる日記及歌學等を載せ、花の口すさびは自寛が忍岡の花の日記及歌を含み、盃の贊は堀田正敦の作なり。樂亭壁書とは樂翁公の壁書なり。◇自寛名は景雄、延享二年に生れ、文化九年歿す。方壺又三樂庵と號す。有栖川家の門人。

吾 孀 琴 二 卷 寫

吉 田 令 世

上卷には文かくこと以下菊水紋まで凡三十條、下卷には、複姓以下ままきの弓まで數十條を載す。歌に關すること多し。男尚徳の清書本松本愛重氏藏す。

和 歌 物 語 一 卷 寫

われもしか泣きてぞ人に戀られし云々の歌以下の歌物語なり。作者を知らず。狩野亨吉氏一本を藏す。

醉 月 園 隨 筆 一 卷 寫

森 嘉 基

後鳥羽院御歌、武隈松、西行歌風體、惟方卿の歌など歌に關する隨筆なり。◇嘉基は通稱光太郎。名古屋の人。醉月園と號す。文化七年本居春庭の門に入る。

日本書紀

臺山隨筆 一 卷

源 清 風

三八

雅俗文武などのことを論ず。雅俗論中和歌に關することあり。松崎悽堂の序あり。書名は著者の號に由る。◇清風は廣瀬氏。寶曆二年に生れ、文化十年に歿す。年六十二。津山侯の臣、臺山と號し又書畫齋、白雲窩ともいふ。

蝶のふるまひ 一 卷

本間游清

月清集に高瘦艶三體あることを説き、又詠史の歌を多く載す。その他雜考を擧ぐ。清水千清叢書卷八に收む。

蝶のふるまひ別本 上 卷

同

珠庵の記、すみかのさま、わらは遊び、配所の月、ほととぎす、あやめのせち等二十三條を含む。

松屋叢話 二 卷

高田與清

蒲生氏郷千宗易贈答の歌以下、歌詩書畫并に慶元以降の名家のことなどを雜載す。太田錦城村田たせ及林信の序を加へ、文化十一年初編二篇各一冊を出版す。溫知叢書卷三にも收む。

四方硯抄 一 卷 寫

本間游清

實陰公、徵書記、浦達、蘆庵、澄月、景範、長孝その他人々の歌話などを擧げ、源氏の歌評、西行頼阿の歌評等を記せり。書名は俊成の『四方の海硯の水につくすとも我思ふことのかきもやられず』の歌に由る。清水千清叢書八に收む。

視聽隨筆 一 卷 寫

同

京の鶯、蛙を放つ、荊芥睡を催す、田舎人、松の毛蟲を奉る、檜の小木生花等より、歌、狂歌、詩文、博物等に關する、視聽のまゝに記せるもの。文化十二年四月十三日の自筆横綴の一本靜嘉堂文庫にあり。

淫舎漫筆 二十卷 寫

西田直養

種々の事に關する隨筆なれど、中に長歌五變又萬葉集長歌格、詠歌教、當年の歌人、和歌題、百人一首、歌の沿革、江戸の歌合等の如く歌に關することを録す。井上頼國氏所藏。

篠の跡 一 卷

立 綱

一名を淡海隨筆といふ。さゝなみの淡海、磯前八十之濱、近江ぶり、網浦、曝井、稻負鳥、茂睡がこと等三十一條を載す。文化十四年の自序、本間游清の序を加へ上木。◇立綱は近江の人。大疵庵と號す。海量法師に學ぶ。

寶曆十三年に生れ、文政七年に歿す。三哲小傳などを著す。

百草露 四卷 寫

小野高潔

第三卷には歌神、歌の種類、歌の體、和歌倭歌國詩國風の別、傳授歌話等を載す。宮内省圖書寮に一本あり。

なおりそ 一卷 寫

本多忠憲

種々のことを記せる隨筆なるが、その九卷には歌話に關すること多し。圖書寮に一本あり。

堅室日録 四卷 寫

岡部春平

文政十二年の稿にして秋本直道の序あり。一卷は春平が濱田にありし時小篋震の問に答へたるものにて、その内容は式島の道、題詠、道之衰、催馬樂、旋頭歌に就て述べたるもの、末に以上堅室の草案せ、不許^ニ他見、葛根堅室主人石己丑年八月十六日記畢とあり。二卷は呂智郡矢上村醫上岸守次の家において同年十月十日に書き了りたるもの、アカラ柏アカラ橘、移心現心の辨、眞樺は今の萩なること、伊呂波歌の體裁作者考、阿和雪の例歌以下。四卷は再論五番之内以下十條を收む。なほ幾卷ありしか知るべからず。

野乃舍隨筆 一卷

大石千引

日本紀、大友皇^ヲ等歴史に關すること多き隨筆にて、中に歌人 政嗣^ノ歌、權等歌に關すること數條あり。文政三年高田興清の序及、引女な世の跋あり。◇千引は明和七年に生れ、天保五年に歿す。年六十五。野乃舍、又、星廬等と號す。橘千蔭の門。大鏡短觀抄、言元柳等の著あり。

鵜舟のすさみ 三卷 寫

吉田令世

歌道に關する隨筆にして、書名は風早公雄の「大井川かへらぬ水の鵜舟つかふと思ひし御世ぞ戀しき」の歌に由る。正徹の歌評、小倉色紙、蒲生氏聊の歌、蒲生秀實、小澤蘆庵が事、宰相中將の歌、板倉内膳正の辭世、菴山、綱齋の歌等數十條を收む。狩野亨吉氏藏本は天保四年五月土浦の大保親主の本により更^ニ滄庵寫せる旨奥書あり。

老牛餘喘 三卷

小寺清之

神祇その他種々のことを記せる隨筆なれど、中に和歌三神論あり。天保八年の序、藤野守克の跋を加へ、天保十一年上梓。◇清之は備中の人、清先の子。棟園と號す。國書解題に榕園と號すとあるは父と混同せるなり。

嚶々筆語 二卷

西田直養、大國隆正、岡野東平、東條義門、長澤伴雄、加納諸平、城戸千橋、本居内遠、村田春郷、小泉保敬、大橋長廣、伴信友等が、月の二十三日相集りて、各考究せし論文を携へ來り、その中を初篇二篇に撰びて上木せるもの。その題目は例へば、隆正の古今集三鳥説、やまことば、四季十二上名義考等の如し。天保十三年上板。初篇には岩倉具集の序あり。二篇には千種有功の序あり。

玉巖隨筆 一卷

草木の花の色、韻字、心より歌をよむ、離屋の歌訓、和泉式部がこと、諦忍律師のこと、その他長明の無明抄などを引き、又自家の歌をも所々交へあげたり。◇寅阿は名古屋の人。

氣吹舎筆叢 二卷

單行本の外に平田篤胤全集卷二に收む。上卷には立志、俗に所謂博識家、平維章などの事を説きたるが、下卷には歌は公家の人々に及び難しといふ俗論、詩文家の争、萬葉集略解、鈴屋老翁を誹るへの論などをあげたり。明治十七年孫胤氏活版に附す。

平田篤胤

檀園隨筆 二卷

板本と異なる所多く、始に天王寺舞樂アマの面の圖を載す。所々、「後見るに僻事多し」と書し消したる所あり。板本の稿本はこれに取る所多し。

中島廣足

檀園隨筆 二卷

同

歌道隨筆にて、上卷には水こひ鳥、百千鳥、喚子鳥、稻負鳥等に就きて新考を述べ、又空海、實朝、西行、樂師寺某が歌を擧げ、佐々木春夫が歌の評、海野游翁が景樹に送りし歌道の消息等を載せ、下卷には後撰及拾遺等の歌のこと及鈴木高柄橋守部等の説も擧げたり。

檀の下枝 二卷

その隨筆より考説の面白きを抄して編めるもの。嘉永四年男廣行の序を加へ、同六年上梓。

中島廣足

木綿垣の記 一卷

内遠の未だ本居氏を擧がざりし時の隨筆にて、歌その他種々のこと百二十一條を載す。書名は、「かざすべきしろ

濱田孝國

日本書紀

はなくとも言の葉にもれたる名には道のゆふ花』の歌による。自筆本木居豊頼氏蔵す。

小山孝經漫筆 一 卷

小倉色紙、歌仙裝束のことなどを記す。清水千清叢書十四に收む。東京帝國圖書館に一本あり。

瓦 玉 集 一 卷 寫

日下百枝

古より天保頃までの歌物語にて、始に仁徳天皇の御時の難波津の歌物語あり。狩野博士によれば、百枝は富士誌百卷の大著をなせる人なりといふ。

諸書拾歌集 卷

吳綿堂永良

上は衣通姫の歌より徳川始頃までの歌を諸書より抜き、その端に當時の歴史を載すること、十訓抄などの體に同じ。嘉永七年自序あり。吳綿堂永良は御前倒乍らを書改めたるもの。實名詳かならず。

小林歌城翁論說 一 卷 寫

武藏野集序などにつき、作者の無學を誹り、會席の狀況を罵り、てにははも流行あるか弟子師匠よむ歌ごにこ

れもなりけり』等の歌を添へ痛罵を加へたり。

歌林雜考 一 卷 寫

横山由清

嘉永の末安政の始頃、井上文雄、千葉葛野、幻裡庵田教、池邊眞漆、大鐘清風、間宮永好、伊能顯則、横山由清、岩瀬百山等相集り、各歌その他につきて考ふる所の論説を出したるものを三冊に合せたり。由清及春村の評を加へたる所あり。南葵文庫に一本あり。

歌堂醉語 一 卷 寫

井上文雄

題詠のこと、貫之眞蹟古今集、森川竹窓の難波帖、定家中納言の名もしろしの歌のこと等を誌す。佐々木博士本。

伊勢の家苞 二 卷

井上文雄

宜長の玉霞、廣道のさよしぐれ等につき批評を加へ、又歌の詠みやう、類題集言寄せ、家の集、序歌俳諧歌枕詞等種々のことを記せる隨筆にて、一篇は安政六年に、二篇は文久二年に上板す。

龍澤公隨筆 一 卷

前田利保

幼時の経歴より、歌を學びしこと、並にその方面の著述考究に關することを雅文にて自ら録せられたるもの。前田伯爵家に自筆本あり。

圍爐裡譚 一卷

井手曙覽

書齋の側にろりを設け、こゝにて縦談せしより、隨筆の名とす。題詠といふことより始めて、中古萬葉に疎き、その他種々のこと、蘆庵翁の歌までを載す。曙覽全集に收む。曙覽は福井の人、文化九年に生れ、明治元年に歿す。年五十七。田中大秀の門人、藥舎又志濃夫題曾と號す。集あり。世に愛讀せらる。

枕の塵 一卷

前田夏蔭

歌の隨筆にて、歌よみ、歌づくり、歌人、七夕七首、連歌の名譽談、了俊一子傳、撰歌會、はたる大、明倫集、佐郡師歌、教諭百首、題者等種々のことを載す。夏蔭は寛政五年に生れ、元治元年に歿す。年七十二。清水瀨臣の門人。菴園と號す。蝦夷志料編輯の事を掌る。著作も少からず。

蟋蟀考 一卷寫

鈴木新

きりぎりす、こほろぎに就て古今に混同あることを考證せるもの。新は一橋家の臣。

難波江 七卷

岡本保孝

況齋保孝の隨筆にて、自筆本七卷十四冊靜嘉堂文庫にあり。一卷には於鳥假字以下、慕景集のこと等四十條を載せ、二卷には復古學譜、書籍沿革、萬葉集の歌のこと等、以下の卷々には和歌歴史逸話語法その他くさくさのこゝとを載す。

梅の木かけ 一卷

堀秀成

甲州のたつ町に梅を探り歸來すれば、門人腰石安興待ち居て、質問せしに答へしことを記す。花のかどりの衣、雪のしづり等十二條、中に先哲の歌の論は契沖、長流、眞淵、宜長、千蔭、春海の歌を評せるもの一讀すべし。慶應二年正月成る。自筆本藤岡好古氏藏す。

楓の板屋 一卷

同

玉霞に倣ひて、花にかをり、かねにね、風かよふ等歌語三十七條に就きて説けるもの。書名は、『玉霞こすゑをもれて二たびも楓の板屋を驚かすなり。』の歌による。夙く脱稿せしを明治十年序を加ふ。藤岡好古氏自筆本を藏す。

典 舍 漫 錄 一 卷

堀 秀 成

二九六

歌垣、道灌が歌、千蔭が歌の誤、萬葉の歌、平田の歌、象の歌、古の雁等歌に關することを聊かづつ記せり。雜誌歌學二卷一二三四號に分載す。

歌 學 (二の二)

三、作 家

總 說

和歌が、作家の感想を讀ひ出でたるものなる以上は、作家の稟性嗜好並にその生活がその作物と關繋あるべきや言を缺たす。又その表現が一種の形式に支配せらるるに至りたる時代に於ては、その傳統及時世の傾向を考察せざるべからず。斯かる意味に於て作家の傳記を考究することは大に必要なるものなり。されど從來この類の書殆んど缺けたり。抑我が國上代の歴史といへば單に政府に屬する事項の記載に外ならざるを以て、歌人の傳記の如きは固よりこれあるなし。その萌芽と見做すべきは、歌集の作者目録なりとす。類聚古萬葉集の編者たる藤原敦隆は、萬葉集作者目録を作り、大江佐國は拾遺鈔目録を作りたりといへど、その書は佚して今傳らず。藤原仲實が古今和歌集目録は現存せるその古きものならむ。これらの書の成りたるは平安朝の中則若しくは末期なり。而してその體は、解題に示せるが如く各卷の作者と詠せし歌數とを擧げ、次に位地により、帝王とか、公卿とか、庶人或は僧侶とかいふが如き身分による分類を用ひて、作家の世系官歴年等を記するに止まる。蓋し上代に於

ては今日の如く、歌人といふものあらず。上下各階級に亘りて多少これを嗜みしものあるも、下流の人のことは傳らず。上流のえ々ののは、六國史等の正史に散見すれば、これらの中より官歴等を抄出して、これに宛つるに過ぎざりしなり。

壽永の昔、藤原盛房が記ししといふ三十六人傳は、人麿貫之躬恒等より能宣、兼盛、忠見、中務に至る、歌仙の世系官歴歿年を漢文にて簡單に記述せるもの。單行本の歌人傳としてはその嚆矢のものならむ。和泉式部、能因法師、會丹後以下清少納言等に至る中古歌仙三十六人傳は、寶治以前の作にかゝり、前書の後を承くるものなり。これに先ち、藤原清輔は袋草子中に人丸勅文をものし、その弟顯昭は一層詳細なる人丸勅文を著し、その種姓、官位、時代、歌仙、家集、渡唐、妻妾、幕所の八項に分ち論ぜり。これに少し後れて成りし上覺の和歌色葉集卷四には、萬葉より千載集に至る作家四百二十餘人を抜き、帝王、貴女、親王、大臣、俗人、女房、僧侶に部類して、同じく世系官仕歿年等を擧げたり。斯くの如く歌聖の研究より歌仙に及び、それより一般歌人傳の研究にも及ぶは自然の徑路なりといふべし。但し以上の諸書は多くは資料の臚列に止まり、斯道に携はりたるものにも汎く讀まれたるにあらざるべく、これが補助となるべき古今著聞集第五卷の如き、或は十訓抄、長明の無名抄の如き歌物語こそ却りて興味深く讀まれたりしならむ。建武の頃に於ける元盛法師が勅選作者部類は仲實の古今目錄の後を承けたるものにて、古今より新後拾遺集に至る十六代集の作者を、地位階級に部類し、各々入撰の歌數世系官歴を略記せり。後刑部侍郎光之その誤を訂し、更に風雅新千載二集の作者部類を加ふ。徳川時代に至り、

正保中源考巧勅選作者部類を著し、新拾遺、新後拾遺、新續古今三集の作家を部類す。こゝに至り勅選二十一代集作者部類成る。考巧はまた明曆中、新葉集作者部類を著す。姫路城主榊原式部大輔忠次の勅選作者部類勅選作者部類及新葉集作者部類あり。その自筆本と傳ふるものにも序跋なければ、或は考巧の作に據りたるか、否かを知らず。異本もあり恐らくは多くの手に成りたるか。その他百人一首作者部類も夙くよりこれありたるが如し。歌の研究が勅選集、三十六歌仙集、百人一首を中心とせることこれにても知るべし。尙二十一代集につきては、漢文にて記せる二十一代集才子傳といふもの、採録するところ千百數十人に及び參考するに足るといへども、四品以上の人に限られて地下の著名なる歌人を擧げざるは惜むべきなり。又假名文としては和歌千年の友あり。その第二卷より卷五に亘り足利時代までの歌人七十九人の傳を擧げたり。こゝは著聞集などの流を酌みて傳を立てたる啓蒙的のものなれど、一般に廣く用ひられたるなるべし。

貞享元祿の復興期に至り、下河邊長流、圓珠庵契沖が萬葉の研究に意を注ぎしより、その作者の傳記も漸次考究せられ、契沖門下の若沖は萬葉作主履歴を著すに至れり。こゝは萬葉の作者を研究するに根柢となるものにて、鹿持雅澄の萬葉人物傳に至り、その研究は一步を進めたり。但し作物の上より對映してその人物を發揮せしむるが如き傳記は今後の新しき人の手に埃たざるべからざるなり。徳川幕府の世にありて漢文に記されたる歌人の傳記は大日本史及野史を推すべし。大日本史第二百十八卷は歌人傳にして上は、麿赤人より下は鎌倉末期の四天王に至る三十三人を收む。野史はその後を承け第八十三卷以下九十二卷に至る十卷は文臣列傳となし、上は二條良

基より下は風早公雄に至る百餘人を擧ぐ。多くは歌人傳なり。これら史乘の外に人物志といふ小冊子行はれ、その中に歌人の傳を収むるものあり。歌道人物志六卷の外、皆川淇園の校閱にかゝる諸家人物志には木下長嘯子より楳取魚彦に至る徳川前期の歌人三十六人を擧げ、青柳茂明の同續篇には和田以悦より塙檢校に至る五十九人の傳と著書とを載せたり。次に古今六帖に關しては岸本由豆流の手に成れる作者小傳あれど、未定稿にして唯こゝに指を染めたるを多しとすべく、女房三十六歌仙に關しては橋本直香の女房三十六歌仙抄最も参考となすべし。地下三十六歌仙に關しては、黒川春村の集外歌仙土代考據よく努めたれど、從來殆ど世に知られず。小倉百人傳は尾崎雅嘉の百人一首一夕話詳密にして世に用ひられたれど、干係の圖書を最もよく網羅したるは笠亭仙果の百首傳彙なるべし。されどこれらの書は稿本のみにて多く世に知られず。

彼の元祿以降の歌人國學者を傳したるものには、川喜多直彦の近世三十六人歌仙あり。清宮秀堅の古學小傳はその収録する人も多く、前書よりも大に世に行はれたり。天井政徳の古學傳稿は未完のものながら根本資料となるべきものを採録したれば参考となすべし。歌傳授の系圖に關しては平間長雅の作たる和歌血脈道統譜あり。遠藤胤忠の古今歌道血脈圖あり。高田與清が作歌故實には、古學道統の圖を掲げ、姓名の下には郷貫と專攻せる所を略註し、古學小傳にも亦學統の譜を載せ、岡本保孝が浪花江には國學復古派系統を擧ぐ。古學道統圖、國學師名錄、近世歌人略草、關東歌道系傳の如き一枚摺若くは折本の類も多く出てたり。これらの類には脱漏もあり、誤謬も交るべけれど皆參考資料たらざるはなし。又諸家の門人錄及畫關集作者部類、六蔭和歌集の作者傳に於けるが

如き私撰若くは類題集の作者名錄、墓所一覽等は皆參考となすべし。

明治の御代に至り、國學三遷史、國學家略傳も出て、尋いで大川南二氏の國學者傳記集成刊せらる。この書は慶長の末より明治三十六年の間に物故せし國學者六百十人を歿年の順に排列し、博く探り普く索めてその傳記學統著書逸事等を根本資料より抄出し、末には年表及名號索引までも添へたれば、歌人史家語學者神道家故實家の參考として缺くべからざるものたり。二氏の勞作想ふべきなり。但し二十餘年を経過せし今日より見れば尙加ふべき多くの學者歌人を逸せるあり。また採録せられたる人士の生歿を誤り、又著作の如きは鑑定便覽及著述目錄の誤を承けて甲の著作を乙のものとなし、同一異名の書を他のものとなし、その卷冊の如きは大なる舛誤を傳へたるあり。敢へて瑕疵をあらざるにあらざれども、改訂せらるる日あらむことを望みて止まざるなり。

書目解題

101

類聚古萬葉集作者目錄 一 卷

藤原敦隆

今佚して傳らず。

拾遺鈔目錄 一 卷

大江佐國

今佚して傳らず。

古今和歌集目錄 一 卷

藤原仲實

始に毎卷の歌數を記し、詠者の名とその作の員數とを擧げ、その終に各種の書に見ゆる歌の統計を記し、次に作家百二十二人の傳を身分わけとなし、漢文にて簡単に記述せるもの。類從二八五卷に收む。

異本古今集目錄 一 卷 寫

嘉吉三年十二月二十七日東野州の爲備將來證本不願不堪手跡、以相傳本令書寫之進上、集數多舊本

校合畢。居此家遺莫失幽志、猶得尋百應證本者、可加勘校而已、下野守平常縁と與書せる本を、六人部是香が嘉永四年九月十五日、以吉田定孝本一校せる一本松井彌治氏藏す。

三十六人傳 一 卷

藤原盛房

公任の撰といふ人麿、貫之、躬恒以下、兼盛、忠見、中務に至る三十六歌仙の世系官歴歿年を、漢文にて簡単に記す。壽永二年三月十四日記之一本にあり。類從六五卷に收む。盛房は定成の子、肥後守たり。

歌仙傳 一 卷 寫

中古歌仙の傳を漢文にて記す。承保二年依左府仰盛方(齋宮次官)註出以行盛朝臣自筆本贈左大臣時信被書之。次に、文和二之比書之泰直筆也とある一本有栖川官家にあり。

柿本朝臣人丸勘文 一 卷

顯昭

柿本人麿の種姓、官位、時代、歌仙、家集、墓所等に分ちて論ぜるもの。類從四三六卷に收む。

色葉和歌集所載作者部類 一 卷

上覺

102

色葉和歌集卷四に載する萬葉より千載集までの作家を、帝王、貴女、親王、大臣、俗、女房、僧の七部に分ち、その世系、官仕、歿年等を記するもの。その作家總べて四百二十一人。

中古歌仙三十六人傳 一 卷

和泉式部、能因、好忠等より清少納言まで、中古三十六歌仙の官歴、父祖、歿等を、漢文にて誌すもの。一本に寶治二年五月廿三日寫之、大外記師光備送此本者也とあり。類從六五卷に收む。

古今名譽之歌仙者 一 卷 寫

集の打聞に入りたる名高き歌人四百五十五人を、貴女、親王、大臣、俗、女房、僧、入道に分ち、その詠める歌の統計をあげたる一文にして、末に應永元年七月二日延光寫之とある一本神宮文庫にあり。

勅選作者部類 十六卷 寫

元 盛

一名を和歌作者部類といふ。古今集より新後拾遺集まで、十六代の勅選集の作者を、一集毎に、官位を本として部類し、その父祖、官仕、歿年を略註し、歌數を擧ぐ。部類の目は帝王、親王、執政大臣、大納言、中納言、參議、散二三位、諸王、四位、五位、六位、僧正、法印、僧都、法眼、律師、法橋、凡僧、女院、后宮、准后、内

親王、女御、御息所、更衣、女一二三位、尙侍、女王、庶女、不知官位、神明、佛陀、化人、作者異議三十餘に及ぶ。建武四年丁丑七月の奥書あり。

勅選作者部類 二卷 寫

刑部侍郎光之

風雅集、新千載集を、集毎に前書の如くに分つ。この二書を合して一本となせるあり。康平二年の奥書あり。

古今集讀人不知考 一 卷

名の如く、集中讀人知らずとあるを、傳説等により、それぞれ名を記したるもの。永正六年法印昶智の奥書あり。續類從四五三卷に收む。

續勅選作者部類 三 卷

源 考 巧

新拾遺、新後撰、新續古今三集を、元盛の作、倣ひて部類せるもの。正保 年源考巧の奥書あり。

續三代集作者部類 三 卷 寫

續勅選作者部類と同じ。高松宮家本にはかく外題せり。

勅撰作者點 一卷 寫

後撰より新古今に至る七代集の作者の名の讀み誤り易きを集別にあげたるもの。高松宮家に一本あり。

百人一首作者部類 一卷

何人の作なるを知らず。古寫本あり。百人一首作者系と題せるは中院通勝の著なり。

續勅撰作者部類 三卷 寫

榊原忠次

新葉集作者部類 一卷 寫

前書は新拾遺、新後撰、新續古今三集の作者を部類し部数を擧ぐるもの。卷末に氏名と藏書印あり。後書は圖書寮に一本あり。◇忠次は幼名國千代、慶長十年に生れ、徳川氏に仕へ功あり、姫路に封ぜられ十五萬石を領す。式部大輔より四位侍從に至る。寛文五年卒す。年六十一。公卿傳分類等の著あり。

新葉集作者部類 一卷

新葉集中作家の明かなる歌千三百廿九首の作者を、元盛法師の作者部類の體に倣ひて、世系、官仕、歿年、詠出

の歌数を擧ぐ。明曆廿壹年の跋文中に参考とせし書籍のことをいへり。明治三十五年八代集抄の附録として勅撰作者部類と共に印刷す。

廿一代集才子傳 八卷

廿一代集の作者を身分によりて分ち、一階級につきては、年代の古きものより順次に擧げ、漢文にてや、詳しく傳を記し、次にその作歌の撰集に入れる數を記せり。部立は、帝王、親王、攝關、大臣、大納言、中納言、參議、散二位、散三位、四品、四品諸士の十一に分ち、人數は無慮千百五十七人に上る。原本は宮内省圖書寮にあり。地下人は除きたれど、この類の參考書としては貴きものなり。作者未だ詳ならず。

中原本作者部類 三卷

安永四年中原廣通が校正せる本靜嘉堂文庫にあり。寛保四年寫本、明和本、小野高深本等を考へ合せ、且つ諸本異同のことを序中に述べたり。◇廣通は石野氏、花月堂と號す。その傳前に出づ。

勅撰作者部類 八卷 寫

靜嘉堂文庫に西莊文庫藏書印ある八卷本の勅撰作者部類あり。坊門内大臣藤原忠信より始まる。忠信は新勅撰の

新葉集作者部類

作者にして、官は大納言に止まり、坊内大臣はその父信陸なり。完本ならざるが如し。尙考究すべし。

五十音引作者部類 一 卷

清水濱臣

勅撰作者部類の索引不便なるを愛へ、五十音引とせるもの、井上頼圓氏一本を蔵す。

校訂増補 五十音引 勅撰作者部類 一 卷

濱臣の五十音引を基とし、流布本作者部類等を参酌し、歌數は各撰集につき、毎卷毎に細書し、且つ部門を日帝王至庶人、僧、女流、神明、佛陀、作者異議の五とし、更に作者の名の一音を取り五十音 排列したるもの。八代集附録として明治三十五年國學院より出版。

大日本史歌人傳 四 卷

源 光 圀

大日本史二百十八 より二百二十一 までを歌人傳とす。上は山柿二聖、在中將、古今集撰者等より、鎌倉末造の所謂四天王、即ち頼阿、淨辨、慶運、兼好まで、三十三人の傳を收む。◇光圀は寛永五年に生れ、元祿十三年に歿す。年七十三。水戸侯、權中納言。梅里等の號あり。義公と諡す。諸書を刊行し、大日本史を撰す。常山詠草等の著多し。

萬葉集作主履歷 九 卷

海 北 若 冲

萬葉の作家及本集中に見えたる人物の官歴世系等を、古事記、六國史等の諸 により、一分階級等に分ちて記せるもの。萬葉人物履歷といふ書と大同小異なり。蓋し若冲が師説を收録せるものなり。◇若冲は契沖の一人。岑柏と號す。浪花玉造の人、延寶三年に生れ、寶曆元年に歿す。年七十七。

萬葉作主履歷書入 九 卷 寫

四卷以下黒川春村が若冲の著に増補を加へたるもの。黒川眞道氏蔵す。

和歌血脈道統譜 一 卷 寫

平間長雅の撰ぶところ、和歌傳承の系譜を示せるもの。◇長雅は寛永十三年に生れ、寶永七年に歿す。望月長好の門人。

歌道人物志 小 六 卷

一卷より四卷までは、人麿赤人以下の歌人を、五卷には僧侶、六卷には女流作家を、年代順に擧げて、その傳記

を載せ、その秀歌につき説明し、六巻の終には詠方大概を添へたり。

歌道人物誌 十一卷

いろは順に古來の歌人を序で、その略歴を擧ぐ。安永九年定堂より板行す。

和歌千年の友 六小卷

素兄堂止靜

古來歌人凡百三十人の傳記にして、第一卷より四卷までは、人丸赤人より源頼政まで在俗の人を、第五卷には、僧侶作家を、第六卷には、女流作家を擧げ、六巻の終に詠方概を載す。寶永三年序あり。

和歌藻英小傳 小二卷

同

和歌千歳の友の複本にて、歌人の傳を擧げ、終に少しく詠方を説く。享保丙午年新校正とあり。大阪和泉屋次郎兵衛板行。

和歌作者傳記

住吉明神、柿本明神、凡河内躬恒、大作家持、在原業平、素性法師等より中務まで主として三十六歌仙の人々の

撰集次第、家系並に作者の時代を説けるもの。高松宮家本。

古今集作者系圖附歌數 卷

古今作者百三十二人を、原本の順によりて次第し、十一卷系圖などを引きて略系を擧げ、次にその詠歌は卷數と第一句とを載せたるもの。南葵文庫に一本あり。

萬葉作者部類 一卷寫

源義雅

萬葉人物傳 三卷

鹿持雅澄

古典歌集の中萬葉の部に出す。

歌集人名錄 一卷寫

いろは順に名を連ね、その下に、氏姓、官、年號を記す。文政十三年河南喜兵衛より調之と、川村知時の跋あり。

右栖川宮門人契約年月記 一卷

寛延四年より明和六年までの入門の人々の身分紹介者を熾仁親王の自ら誌させ給ひし一本高松宮家にあり。寶曆

二年五月廿一日の條勢州谷川淡齋士清とあり。振假名コトキヨと見ゆ。この類参考となるべきことあり。

はまのみるめ 一卷 寫

蘆庵、涌蓮、長流、契沖、春滿、眞淵等の略傳を掲げ、次に詠歌に關すること數條を載す。

古今六帖作者小傳 一卷 寫

岸本由豆流

志貴皇子以下人々の傳を、少しづつ記せるもの。自筆稿本黒川眞道氏藏す。但し完成のものにあらず。◇由豆流は寛政元年に生れ、弘化三年に歿す。村田春海の門人、柱國と號す。

集外歌仙考土代 二卷 寫

黒川春村

後水尾院の欽撰と傳ふる集外歌仙、一名 下三十六歌仙の傳記にて、始に御撰者の論、名目、諸本につき説明し、上卷には前編より長嘯子まで、下卷には宗祇より貞徳までの傳を、百四十餘部の参考書を引きて考説す。天保十三年十二月成る。稿本黒川眞道家に存す。

作者小傳 甲 六卷 寫

伊庭時言

中古の歌人をいろは順に列ね、索引に便し、且その傳を掲ぐ。黒川眞道氏一本を藏す。

作者小傳 七卷 寫

同

中古歌人を地位に分ちて排列し、その小傳を載す。黒川眞道氏一本を藏す。その人々は、三代集の作者及歌仙歌集所見人名録より成る。石橋重國の書入本黒川家にあり。

歌俳百人傳 一卷 寫

海壽

正徳より天明前後の知名の人士の歌俳句合せて百を抜き、その略解を附し、合せて作家百人の傳を載す。明治一十五年足立庚吉出版す。

三哲小傳 一卷

江澤講修

契沖、賀茂眞淵、本居宣長三大人の傳と圖像とを擧げ、詠歌十數首を附記す。山本信陽小山田與清の序を加へ天保二年上梓。白井信常の跋は文政十一年の日付なり。◇講修は上總の都原の人、大寂菴立綱に學ぶ。

先哲譜 一卷 寫

小栗永言

縣居、宣長、千蔭、春海四人の傳及び氣吹屋叟の話合せて五人の先哲の傳なり。始に天保十三年九月成るよしあり。氣吹屋叟の話は一名ひとり松といひて天保十四年十月の奥書あり。◇永言は樂園隱士と號す。

蓬齋日抄 一 卷

越智直澄

卷四に契沖、眞淵、宣長、春海、在滿、千蔭、忠興、春滿、蘆庵の傳を記せり。圖書寮に全部七卷あり。

近世三十六名家傳 二 卷

川喜多眞彦

元祿以降古學者歌人の名ある人、上は契沖より下は景樹まで三十六人（その他御杖、百合女等を附録す）を撰み、行狀、墓碑銘その他を參考して詳に記し、著書をも挙げたり。元政法師の如きは、元祿以前の人のなれど、その中に交へたること、凡例にいへるが如し。嘉永二年六人部是香の跋あり。板行。◇眞彦は京都の人、通稱眞一郎、作樂居又學樹園と號す。六人部是香の門人。文政元年に生れ、明治元年歿す。年五十一。正保遺事、高山彦九郎傳、東山名所圖繪を著す。

東都歌仙窓の指折 一 卷

當時江戸歌人の住所を、東西南北に分ち、主要なる人には、各歌一首記したる一枚摺なり。例へば東の方にては、

重胤は村松町、千浪は新大阪町、類則は本所一つ目にと記せるが如し。嘉永三年芝明神前尙古堂上板。（この類は尙多々あるべし）

たまのみすまる 五 卷 寫

横山由清

神代より文龜大永頃までの女流千人の傳と、各一首の歌とを載す。嘉永五年成る。◇由清は文政九年に生れ、明治十二年に歿す。年五十四。月の舎と稱す。伊能類則、井上文雄等に學ぶ。本邦制度に委し。

女房卅六歌仙傳 二 卷

橋本直香

又歌仙部類抄といふ。女房歌仙の歌三首づつの中、各人一首づつを抜き、その解釋と傳とを詳に記せるもの。高島正興及橘冬照の序あり。繪は高島千春が筆あり。嘉永六年上梓。◇直香は文化四年に生れ、明治二十二年に歿す。橘守部の門人。赤阪の氷川神社の官司たり。

國學復古派系統 二 卷 寫

岡本保孝

國學者を系統により次第し、その傳記を簡條書に誌し、概評を加へたるもの。◇保孝は幕臣、寛政九年に生れ、明治十一年歿す。年八十二。況齋と號す。清水濱臣、狩谷披齋に學ぶ。著書約三百八十部あり。

近世歌人師弟一覽 二卷寫

中川長延

三八

安政三年成る。◇長延は中川自休などの一族にや。

古學家傳稿 二卷寫

天野政徳

種々の資料を引ききて元祿以降の古學家及その他の歌人の傳を誌せるもの。材料もよるがまゝに記せるものにて、未定稿なれど、他に見えざる史實あり。自筆本井上軒因氏所藏す。その人々は藤原雄風、正木千幹、賀茂真淵、建部源信、加藤千蔭、村田春卿、荷田蒼生子、倭文子、林諸鳥、荷田御風、富士谷成章、加藤盤齋、戸田茂暉、契沖、荷田春滿、安藤爲章、高長、加藤枝直、加藤宇萬伎、三島自算、新見正路、片岡寛光、清水清臣、大石千引、關岡野州良、楳取魚彦、山岡俊明なり。◇政徳は幕臣にて通稱を圖書といふ。字を其所、葛廬と號す。大石千引に學ぶ。文久元年に歿す。草錄集、奇辭題林等の編著あり。

古學小傳 三卷

清宮秀堅

始に學統の譜を掲げ、次に水戸光圀より以下七十五人の國學者の小傳、學統、膠歴、生歿、墓所、著書等を載せたり。安政四年成り、明治十年増補し、同十九年に活版に附す。◇秀堅は文化六年に生れ、明治十二年に歿す。

年七十一。下總佐原の人、棠陰と號す。新撰年表、香取新誌等の著あり。

百人傳彙 二十卷寫

笠亭仙果

小倉百人一首の歌人の傳記に關するものを、數多の書より博引治集せるもの。排列の順序は作者部類等の如く、始に帝王次に攝關といふが如く、身分の上下によりて列ねたり。安政五年二月綴りあり。黒川眞道氏仙果の自筆本を藏す。◇仙果姓は大宅、名は廣道。文化九年に生れ、慶應四年に歿す。小説家。

古學道統譜 一摺

文雅堂

安政五年八月短冊師文雅堂主人が當時存生の國學歌人を道統により一枚摺とせるもの。道統不知のものは別に擧げたり。

安政文雅人名錄 一卷

安政七年當時の文雅の人々をいろは順に列ねたるもの。大沼枕山の序あり。西村屋書店より發行。

國學師名錄 一摺

三九

文久二年戊春松坂町白木屋嘉助上木。

近世殉國百人一首傳 小四卷

城兼文

安政戊午、櫻田義學、阪下義舉等より波山義學の徒等に至る志士百人の小傳にして、中にその詠作を挿む。明治二年印行す。

萬葉集作者部類 一卷寫

速水行道

古典歌集萬葉の部を見よ。

明治文雅姓名錄 一卷

清水信夫

明治十年東花堂より發行す。舊高崎侯大河内桂閣の序あり。

近世歌人略草 一摺

中川長延の早く上梓せしを、更に明治二十二年廣田常善の上板せるもの。

國學三遷史 一卷

中野虎三

徳川時代の國學者百六人の傳をあげ、著書を載す。卷首に國學道統略譜を載す。三遷の名稱は國學の勃興期、完成期、衰移期の三つに分てるに由る。逸見仲三郎増訂し、井上頼園校閱す。明治三十年吉川半七發行す。

本朝歌人集 一卷

田中彦三郎

當代の歌人の肖像姓名位階等を誌せるもの。明治三十三年刊行。

近世歌人略系 一折

歌人を道統の譜に作り、その生國、家號及年齢などを註し、安政七年春、夢園の識せるもの。明治三十五年二月廣田常善發行。

慶長以來國學家略傳 一卷

小澤政胤

慶長以來明治の御代に至る國學者五百四十人の傳を年代順に列ね、始にいろは索引と國學傳統略譜を添へ、年表を附し、明治三十六年國光社より發行せるもの。井上頼園の校閱あり。

日本國學史

國學者傳記集成

一 卷

大川 茂雄
南 茂樹

三三

慶長より明治三十六年末までに故人となりし、神道家、國史家、有職故實家、歌文學家、語學家、約六百十名を歿年月の順に列ね、各人の傳を生歿、住所、姓名、系圖、學統、年譜、經歷、性行、逸話、雜載、著書の十餘項に分ち、數多の資料を掲げたり。紙數千七百頁。明治三十七年大日本圖書株式會社より發行す。

四、歌題附詞書

總 說

和歌も古は題詠なし。唯事に臨み物に觸れて自家の胸懷を詠じ出でしに過ぎず。所謂即興詩のみ行はれたりしなり。その後萬葉集の成りし時代に至りて、多少題詠も行はれ始めたり。萬葉七及十の兩卷は詠物の歌を以て充たされたれど、その多くは後に撰者が題を加へたるかと思惟せらるるものあり。然れども夙く天智天皇の時侍臣及後宮に命じて春花秋葉を比べて詠ましめられたるが如き、大作家持が事を豫想して諷詠せるが如き、皆題詠にあらざるなし。唯その數多からざりしなり。下つて古今集を見るに屏風の歌、歌合の歌多く、これらは題詠たること固よりなれど、さすがにはしがきを具へたり。大井川行幸の和歌の如きも眼前の景致を採つて題とせられたるが如し。藤原氏の榮ゆくにつれて、入内年賀等の慶事に屏風を贈ること流行し、歌人をしてその畫證を作らしめしが如き、或は歌合の盛に行はれしが如き、或は又唐詩を讚美するの餘り白居易等の詩句を題とせるが如き、或は佛法の興隆につれ經文の題を詠めるが如き題詠盛に起り、爾後の撰集にはその量いよいよ多きを加へぬ。特に金葉集などに至りては、地書あるも例へば立春の心を詠み待るとか、始聞鶯といへる事をよめるとかいへる如く、題詠を以て満たされたるを認むべし。この他「花爲春友」とか「月照菊花」といふ心を詠める結題の類少からず。

三三

源俊賴が無明抄に、詠むべき文字、詠むべからざる文字、回して心を詠むべき文字、さへて詠む文字など、結題の詠法を示し、悦目抄には更にこれを詳述せる如きは、實に時代の要求に應じたるものなりしなるべし。この頃より新古今時代に至りては、撰集はいふまでもなく、家集も殆んど題詠を以て埋められ、而して當時は歌の内容よりも形式に重きを置き、三代集の詞などを用ひて、新しき結合新奇の排列などに腐心せる傾向熾なりければ即興實事の歌少く、範を中古に取り、わけても百首の如きは堀河兩度百首題に據りたるもの多し。そが後の百首はこの百首に多少の變更を加へて用ひたること、例へば元日を元日松となすが如き少しばかりの變易を試みたるに過ぎず。詩句題の如きも千篇一律の觀なきにあらず。慈鎮和尚の拾玉集などに至りては古今集の歌一首づゝを題として詠めるあり。例へば「袖ひぢて結びし水の氷れるを春たつ今日の風やとくらむ」を題とせるが如し。これらは珍らしき例とすべく、而も本歌取にあらずんば、古歌の意を換骨脱胎せるものに過ぎず。後京極攝政その他當時の大家の間には、流石に東、西、南、北、中、白、赤、黄、黒等の如き抽象的の難題をもよく詠みこなしたるあり。定家の拾遺愚草には日本紀實歌集の例を追ひたるか、追善の爲に史上の人物を詠ぜる詠史題も見えたり。經文題の如きは拾玉集を始めその他の集にも次第に細く深きに及ぼし、西行の六道の歌の如き、後京極の五波羅密の如き、爲家の十二因縁の歌の如きも、この例證と見做すべし。

八雲御抄には正義作法等六部門を立て、從來の歌學を統合せられたれど題ばかりは集められず。但しその學書の部に題林百二十卷ありて、注に、清輔、歌合三十卷、會三十卷、百首三十卷、雜々三十卷と擧げたり。この題

林は六條家の清輔が當時若しくはその以前に詠まれたる題と歌とを集めたるものと覺しく、蓋し歌人が備忘の爲によりより記し置ける零本は別として、この類の書の嚆矢たりしなるべし。但しこの書は今佚して傳らず。定家の歌學書並に八雲御抄に題林に關して特にいふところ無きを思へば當時は組題などもさまたてむつかしき定もなかりしか。後成より定家、定家より爲家と御子左家の歌學確立するに至りては、後の歌人は定家の詠める題を取つて詠するもの少からず。彼の藤河百首四文字題は難題百首として歌の修養上堀河百首につぎて必ずこれを詠する習とし、千首は爲家の詠千首に據るもの多し。降りて永正の頃に至りては、古今句題後撰句題拾遺句題等の勅題を下され、後には三代集句題といふ書も成る。又八景題も詠むこと起りたり。その前後にあたりては、誰が手に成りしか、堂上家などには和歌題林及明題部類等の書を傳ふ。その始なるものは桂宮本に於けるが如く、唯順序もなくかき集められしを、一條兼良の和歌題林抄に至つて四季戀雜と部立して檢出に便せしが如し。又雲上にては畏くも後水尾院は四季戀雜の題を多く集め類題寄書三卷を欽撰し給ひ、又別に一字御抄八卷を撰ませ給へり。この書は天地山海より閨朝寒暄、人物居所、その他結題の文字虚辭熟字の題を蒐集して部類を分ち、加ふるに二十一代集以下の諸集より例歌を引かれたれば題詠の参考となること前古無比の好書なり。

又年中行事の一つとして時を定めて行はるる雲上の公宴御會洞中並に坊中御會等に於ては、出題も飛鳥井冷泉などの先規ある家に命ぜられ、舊慣を尊重せらるるを以て、その歌題の如きも一々記録に留められたり。御會御願繰出帳の如き原簿もあり、年々これに書添へられたるものにて、それらより抄録したる公宴仙洞出題とか、禁

夷院中台始題若しくは和歌題留等の書あり。その沿革を見るに宜しとす。

徳川幕府の時代に至りて歌題及例歌を集めたるもの次第に多く成りぬ。千首以下の組題を知るには慶安版の明題部類抄あり。題名をいろは引とし例歌を載せたるものには延寶版の題林類集あり、元祿版の和歌明題撰要鈔あり、四季題を更に細かく分けて例歌を挙げたる山科言繼の和歌題林思抄の元祿版あり、虚字、熟字、結題の文字を主とし例歌を載せたる元祿版の一字御抄と共に世に行はれたり。貞享開板の河瀬蒼雄の和歌拾題は題の數千を數へ、組題にては、尾崎雅嘉の増補明題部類を以て最も備れりとす。

次に名所題は土御門天皇の承元中最勝四天王院の障子に題せるものに始まり、次いで内裏名所百首となり、定家が蒲瀨八景を詠せしより、良基の南都八景、近衛晴嗣の近江八景、後水尾院の松島八景、惺窩の市原八景等數十種の八景歌を生じたるが、汎く名所題を集めたるものは岡西一時軒の名所題林あり。世外子の名所組題集に至りては、名所千三百六十餘を挙げ、雅嘉の續明題部類に至りて大成せり。

次に句題といふに二種あり。單に句題といふは詩句を題とせるものにて、これに對して假名句題を分つ。句題を集めたるものには享保中洛北山人睡翁の序を加へたる句題和歌抄あり。尾崎氏の増補和歌明題部類下卷には永正の三首題より百首に至る句題を集めたり。次に眞名題即ち漢字の題に對し、又一方にては古今六帖に於けるが如き假名題も近古に至りては時に用ひられたり。特に三代集假名句題は前に説けるが如く足利幕府の末に行はれ宗匠家などには特にこれを定めたるあり。冷泉假名題といへる書の如きはその例とすべし。洛北山人睡翁の序あ

る句題和歌抄には假名題を挙げ、尾崎雅嘉の増補和歌明題部類の下卷には一首より百首に至る假名題と六帖假名題とを載せたり。景樹門下の大塚寛柔は、八代集三十六人家集古今六帖より假名題をぬきて四季戀雜に分ち、和歌假名題を出し、蘆庵門下の田山敬儀は一首より二十首までの假名組題を集めて組題玉苜を刊行す。加藤景範が廿一代集中の詞書ある歌のみを集め部類して出せる和歌實踐集及高井八穂が假名題の歌のみを叙てたる古詞類題の如きも、眞名題ばかりに據らざる反動なりとす。

要するに題詠に於ては題の作物に及ぼす影響は至大なるものにして、世の和歌が穩當を旨とし平板に陥れるは、取題の上に卓然たる見識なきに由ることも見遁すべからず。従つてこの弊を免れんが爲に、徳川時代の中期に於ても五井蘭州の如き新題を試みたるあり。また特に奇題を探り求めたる奇題和歌集を撰みたるあり。上田秋成の如きは唐の月令に基づき、七十二歳の時、七十二候の新題を掲げて詠めるあり。明治維新の後太陽曆頒布せられ、季節と景物とのくるひを生ずるや、これが調節を圖らむが爲に、福羽美靜は歌題歳時表を作り、その門生に與へたることあり。爾も時世によりて自ら變易あるべきなり。一時新しき文化の事相を歌題とすることも行はれ、新題和歌集の刊行せられしも自然のことなりとす。彼の秋舎主人落合貞文は古き題にては活氣なき作を生じ易きを憂ひ、鐵櫃に輪飾かゝれり」とか「芭蕉の霜よけを取去りぬ」とか「残れる雪に雉の足跡あり」とか「麥畑の末に城見ゆ」などの如き日課歌題。三百六十五題を定め門下同人に新しき歌を詠ましめむことを謀れり。畫題論の盡しきが如く歌題も最近は大に昔日と面目を改むるに至れり。

詞書或は端書は歌と相埃ちて表彰を完くするものなれば、古人がこれに留意せし跡は歴然たり。後撰の詞書が杜撰なりとて之を指摘せしは宣長が詞の束緒なり。建部綾足は八代集の歌の詞書をとりに類別して『はしがきぶり』を著し、身分或は種々の場合に於ける古例を考へて『はしがきぶり續篇』を出す。いづれも啓蒙的のものなり。藤井高尙は『佐喜草』をものし、石津亮直は撰集に見えたる詞書を類別し、萩原廣道は『詞の葉山の葉』を出せり。その他歌學の書には多少これを論ぜざるはなけれど、今は省きてこゝに略せり。

書 目 解 題

桂宮本和歌題林抄 一卷 寫

後京極攝政、黃門定家等の大家が出しし六首題、十首題、十五首題等の題を書き集めたるもの。その筆者年代は明かならざれど、もと桂宮御本にて、今は宮内省圖書寮の一本あり。尾崎雅嘉の群書一覽に挙げたるとは同名異物たり。

桂宮本明題古今抄 一卷 寫

永享より文明に至る數次の歌會に、飛鳥井雅世、雅親、雅康等の出しし題を集めたるもの。古寫の一本同じく圖書寮にあり。またこれと同じき内容の他の一本には、和歌題林と外題せるものあり。

和歌題林抄 二卷 寫

一條 兼 良

四季戀雜の題を示し、題意を説き、各二三首づつの證歌を載す。群書一覽にはこの書能因法師の作なるよしひ傳へたれど、さにあらずとて種心秘要抄の序を引いて、一條禪閣の集めおかれたるものとせり。

明題部類抄 大七卷

組歌の書にして、千首題より、七百首以下百首五十首十首一首一首に及ぶ。古く緒紳家に用ひらる。七卷本あり合綴三卷本あり。慶安三年浪華の村田庄右衛門刊行。

類題寄書 三卷寫

後水尾院

諸書より類題を抽きて親ら輯め給ひし書にて、部類は四季戀雜の六門とす。この書傳へて有栖川職仁親王家にありしを、風早公雄拜借して謹寫せる旨、奥附に見ゆ。原本宮内省圖書寮にあり。

一字御抄 二卷

同

天地山海より鳥獸蟲魚に至るまでの結題を八門に分ち、いろは順に列ね、證歌を載す。八卷本あり。元祿三年上板す。

百題拾葉 八卷

前書の廣本なり。

知題抄 一卷寫

歌題につき十數條の注意を記したるもの、飛鳥井家相傳の書にして、寛文六年清水良世の寫本あり。歌學部にも出す。

題讀曲切紙 一卷寫

四季戀雜の題の讀曲八通、探題三十四切紙、希題切紙四通、題の用意切紙五通、以上慶長十二年玄旨より傳へたるを、嫡々相承し、延寶元年望月長孝の寫せる本あり。

題林類葉集 七卷

古來の撰集家集中の歌を、題名のいろは順に挙げ、出所を上に、詠主を下に記す。歌數三千に殆し。延寶五年成る。七卷三冊とす。

和歌明題拾要鈔 七卷

頼阿、後柏原院、雅俊、堯雅、爲家、伏見院等の詠歌數千首を歌題のいろは順に編みたるもの。上に歌題、次に

原集の名、歌、その下に作者名を挙げたり。元祿七年出版。

名所題林 五卷寫

岡西惟中

古來の名所を詠める歌を集め、類集して詠合の材料とす。

増補和歌題林抄 十一卷

北村季吟

二卷の題林抄を増補し、例歌を多く挙げ、頭書に詠み合すべき詞名所故事等を加へたるもの。寶永三年北村四郎兵衛開板。安永中再刊。

和歌拾題 一卷

河瀬菅雄

撰集家集より廣く題を輯め、四季戀雜に分ち例歌を擧ぐ。題の數六千に及ぶ。貞享五年門人惠藤一雄の序、進藤知雄の跋を加へて出版す。

拾題辨知抄 一卷寫

阪靜山

歌學の部を見よ。

名所讀合 九卷寫

題をいろは順によりて挙げ、その下に名所を載す。

和歌組題集 一卷

世外子

和歌組題數百を類集し、寶永六年鳥丸家窪田以政が桂宣辰の藏本により増補せるもの。

名所組題集 一卷

同

名所千三百六十餘ヶ所を部類し、終に四季景物考を加へ會席用に供す。

句題和歌抄 三卷寫

睡翁

拾遺愚草及其他に見えたる句題、假名題を抄出せるもの。享保二年洛北散人睡翁の序あり。同四年板行。

三代集句題 三卷寫

古今後選拾遺各題にて、古今は永正二年禁中御月次題の「春立つけふ」より「千年のためし」まで、後撰は永正

三年禁中御月次題にて『年もこえぬる』以下百題、拾遺は五年の御月次題にて『年たちかへる』以下句題を輯む。

粧香明題部類後篇 一卷寫

公宴、東宮御會並に諸社御法樂之題、百首、五十首、三十首、二十首、十五首、三首に分ち、享保十九年より寛保元年に至る間のを集めたるもの。寛保二壬戌年林鐘廿三日拾遺源朝臣在判の奥書ある一本神宮文庫にあり。

習古麻稽古百首題 一卷寫

上人は實曆の頃の人。六窓塵談の批評をなせり。門人の爲に結題五百首を集めたるもの。六窓塵談と合綴せるあり。

冷泉家假名題 一卷寫

冷泉爲久及同爲村の、古書に例なき題を出せるものを、集めて一冊子となす。宮内省圖書寮に一本あり。

和歌出題考 一卷寫

柏崎具元

假名題 一卷寫

源 尹 祥

明和五年釋慈雲よりの問書にして、歌會出題の故實等を記せり。具元は又の姓を北畠といひ、一名を要と呼ぶ。春二十、夏十五、秋二十、冬十五、戀十、雜二十の假名題を、師家の口傳により短冊に記せるもの。終に萬治二年十一月三十日、公宴句題三十首、御當座の題を記せり。◇尹祥は和歌詞譜の著者、坐光寺爲祥と同人なるべし。甲州市河の人、南屏と號す。

御會御題繰出帳 一卷寫

永正五年より寛政に亘る間の御會始、七夕、重陽御會の題を見る爲に抄出せるもの。寛政三年改ある一本高松宮家にあり。

増補和歌明題部類 二 卷

尾崎 雅 嘉

明題部類の誤を正し、更に貞治以降當代に至る公私歌會の組題を汎く集め、四季に次第し、奥に朗詠題、詩句題、經文題、假名句題、六帖題等を添へたり。寛政五年庭田中納言の序及自跋あり。題集としては最も整へるもの。寛政六年板行。◇雅嘉は難波の人、書肆を業とす。寶曆五年に生れ、文政十年歿す。年七十三。蘿月と號す。群

書一覽、百人一首一夕話、古今集部言葉等の著あり。

三

續和歌明題部類 一 卷

尾崎雅嘉

名所の組題、一首通題より百首題まで、各出題の年月題者等を擧げ、次に四季戀雜の部門に隨ひ、題を擧げ、各題に讀み合すべき名所を古今の歌書により數多出し、肩には書名を記し、下には國名を載せ、詠作の便となす。但し證歌は増補松葉集、新松葉集に譲りて載せず。庭田中納言の序及び自序あり。前書と相俟ちて參考となすに足る。

掌中和歌明題抄 横一卷

同

續掌中和歌明題抄 同一卷

同

この二書は、前二書の中より平易なる組題を抄出し、旅中會席などの用に充つ。共にぬさぶくろの中に收む。

掌中和歌明題抄 横一卷

同

春夏秋冬戀雜の部門に隨ひ、中古以來詠み來れる題の意を説き、中古近古の歌を證として出し、終に何方、何處、未遍、未飽等の結題の熟字をいろは分となし、その詠み方を喩す。ぬさぶくろの中に收む。寛政八年板行。

ぬさぶくろ 横一卷

同

掌中明題以下三篇の外、濱萩、掌中假名字例とを合綴す。寛政八年發行。嘉永二年補刻せり。

七十二候 一 卷

上田秋成

著者七十二歳の時、唐土の月令に基づき、新題を設け、彼我風土動植の異同を説き、自詠をその間に詠み入れたるもの。尙その序に七十二候中春氣變以下菘菊含まれて新に月令の次序を立てたるよしを一つ一つ説明せり。そのかみ歌友とこの新題を探りて詠める歌あり。そは別に雜集の部に説くべし。

追擬花月令 一卷寫

同

七十二候の姉妹篇と見るべきものにて、唐の花月令に擬し、我國の花卉とその季節を漢文にて記せるもの、前後に國文の序跋めきたるあり。但し跋文は未缺けたり。

和歌題辭要解 小一卷

伴資矩

高蹊が夙く記し置ける草本が、天明の火に失せしかば、資矩父の教を受け、結題の中訓にて詠むべきものを拾ひ、

歌の學部

いろは順に列ね(例へば色、入、如何等の如く)その読み方を説示せるもの。享和元年の序あり。文政六年刊行。◇資矩は又資規といふ。本姓高橋、字は直樹、高蹊の養子となる。文化七年歿す。

和歌假名題 二 卷

大塚寛柔

八代集、三十六人家集、古今六帖等を参酌して、假名題のみを四季戀雜に分ちたり。菅原三位の序、文化二年自跋あり。同四年刊行。

組題たま苗 小三 卷

田山敬儀

一首より二十首までの假名の組題を、四季戀雜に分ち集めたるもの。千蔭の序を加へ文化五年板行。◇敬儀は伊賀の人、字は文良、従事と號す。明和三年に生れ、文化十一年に歿す。年四十九。小澤蘆庵の門下四天王の一人。百人一首圖繪を著す。

公宴仙洞出題 一 卷 寫

文正元年より下りて安政五年までの御會始、七夕、重陽、神影供、年賀等の御題を年月の下に記したるもの。參考とするに宜し。

禁裏院中會始題 一 卷 寫

公宴、七夕、重陽の歌題寛永以降のものを輯めたる寫本宮内省圖書寮にあり。

和歌題留 一 卷 寫

弘化三年夏百首題より慶應三年まで禁中洞裏等に於ける歌題を留書せるもの。高松宮家に一本あり。

歌題歳時表 一 折

福羽美静

太陽曆の頒布につれ、舊曆の景物を新に方法を立て、配布せるもの。明治六年登山學舎より發行す。

端 書

はしがきぶり 小 一 卷

建部綾足

八代集の端書を、長きは上を切り下を殺ぎ、春夏秋冬、まじはり、戀、紀行、雜の八部に類別せるもの。明和三年板行。

歌の學部

はしがきぶり後篇 小一卷

同

三〇

君、祖父母、舅姑に奉る詞、弟妹等にいふ詞、月次或はあるじぶりにいふ等の詞書の例を、古書によりて擧ぐ。安永二年板行。

佐喜草 一卷

藤井高尙

歌の詞書には物に記し置くと、高き人に見參らすると、人に送るとの三様あることを始め、これに關する種々の注意及撰集家集に見えたる式例等を詳に説く。橘千蔭及本居大平の序を加へ、享和三年板行。

増補新撰はし書ぶり 二卷

石津亮澄

撰集に見えたる詞書を類別し、後の歌人の參考に供せむとせるもの。上卷は四季、まじはり、哀傷、賀に分ち、下卷は、こひ、紀行、離別、雜に分ち、消息文を附録とす。文化十四年に成りしものにて、文政二年荷田信美の序を加へ、同三年板行。◇亮澄は大阪の人、安永八年に生れ、天保十一年に歿す。年六十二。富草舎と號す。尾崎雅嘉に學ぶ。

詞書葉山乃栞 小一卷

萩原廣道

總論三條には、佐喜草の説を引き、次に冠婚葬祭の 或は花晨夕夜等に、人を訪ひ若しくは人に訪はれ、或は人を送るなどの場合に於ける書式十數條を詳に示す。嘉永元年板行。◇廣道は文化十年に生れ、或は十二年に生るとも。文久三年に歿す。年五十一。霞沼と號し又蒜園とも稱す。源氏物語評釋、心能種等の著あり。

三二

五、歌 詞

總 說

歌人が詠作に方り形式に力を用ふること、殆構想に譲らず。随つて語の吟味詮索は夙くより行はれ、古歌の難語を解説することも昔は一の歌學たりしなり。五髓腦の一に數へられし仲實の綺語抄が順の倭名鈔に倣ひて部類を設け、詞を拾ひて注釋せしもこれが爲なり。八雲御抄の中に由緒言世俗言の別を立て給ひしは時代の新古により採擇に便あらしめむが爲なり。爲家が詠歌一體に制詞を定めたるは、此道の桎梏たりといへども、いはば一種の擇詞法なりしなり。下りて宗祇法師がものせし分葉の如きは、互に混じ易き同義語若しくは同音語の差別を知らしめ、詠作に利せむとせしなり。一切の歌學書に擇詞のことを論ぜざるはなく、中には歌學書を題しながら、部門を立て多くの詞を蒐集して註を加ふるを要とし、その發端若しくは末尾に少しく詠歌法を説くに過ぎざるもの多し。平安朝の末期より鎌倉時代に亘りて難語の註釋として考據頗努めたるは顯昭が袖中抄を最とし、色葉和雜抄これに亞ぎ、徳川時代の初頭に於ては松永貞徳の歌林樸樵等之に次ぐ。分類辭書の體をなせるは、足利時代に於ては宗碩が藻沙草に踏えたるは無かるべし。いろは引は紹巴が匠材抄ありて歌人連歌師共に用ひたり。爾後分類的のものは、隨集集詞林三知抄行はれ、いろは引のものには吳竹集最も多く用ひられ、まさな草等これに亞

ぐ。但しこれらは古學の起らざりし以前に啓蒙的のものとして極めて重寶とせられしなり。かゝる詞の書はやがて辭書の發達を促し、谷川氏の和訓栞、清水濱臣の語林類葉、石川雅望の雅言集覽、保田光則、中島廣足の續儒となり、増補となり、岡本保孝の言露となり、吉川忠行の語麗となる。又一方にては五井純禎の源語梯、菅原種文の源語雅言解及池永泰良の萬葉見安補正、鹿持雅澄の古言譯通より足代弘訓の萬葉類語（百卷）の如き、一集一部の辭書をも生ずるに至れり。中にも萬葉集古今集及歌道の参考書として用ひられし伊勢物語源氏物語に關する語釋書は古來より甚だ多ければ、今茲には省きて言はず。

和歌が假名にて記載せらるる關係上假名遣といふことが歌學上の大切なる一項となりて、定家の假名文字遣といふもの斯壇に重んぜられ、尋いて二條關白良基の假字遣近道及三條西實隆の假名遣つづらをり等その羽翼の書も成り、特に假名文字遣は慶長年間に至り出版せられ、荒木田盛微の類字假名遣は寛文に、某氏の蜷蛸涼鼓集は元祿に開版せられ、堂上歌學家並にその流を對む人の寶典となりたり。圓珠庵契沖が和字正濫抄はこの堂上家假名遣に對する一大鍵槌たりしこと、これに對して橋成員の通例全書は反對を表明し、契沖の和字通妨抄は更にこれを擲碎せしことは堂上派歌學と古學派との對立を生ぜし學界の一大現象たりしなれど、堂上にてはその渦中に入ることなく明治維新の頃まで唯因襲的に定家文字遣に準據し、民間古學派及水滸に於ては契沖の假名遣を使用し來れり。契沖の假名遣は楳取魚彦の古言梯その他の書によりて完成せられたれど、事は語學史に關すること多きが故に、以上の主要なるもののみを擧げて他を略することとせり。

次に手爾波のしらべといふことが、和歌の上に重大視せられたることは假名^三以上の問題たりしなり。而してこの研究は鎌倉時代に起り、室町時代に及んで連歌師によりて多少の講究を加へられ、やがて姉小路式十三ヶ條の傳となり、歌道秘藏録となり、春樹顯秘抄となり、細川幽齋の手より堂上地下に傳へられたり。堂上派に於てはその道のものに限りて傳授せらるる習となれるを以て、大なる進歩を見ざりしも、民間に於ける古學派及その他のものは廣く世に公にせむと志せるを以て自ら深き攻究を試み、その結果を發表せるを以て、甚大の進歩を來たし、特に本居宣長の紐鏡及詞の玉の緒は、忽にして天下を風靡するの勢を有したり。即ち幾程もなく、幾多の玉緒學者を出し、紐鏡及玉緒の訂正増補をなせる事實がいかに斯界に影響を與へしかを知るべし。

これに先ちて富士谷成章のあゆび(てにはと伺じ)の研究は當時學界の珍とするところ、宣長翁といへども、その創見に敬服したりしなり。あゆび抄は、かざし抄、よそひ圖などと共に富士谷家の三具抄と稱して、語學上並に斯學上にも重要な地位を占むるものとす。

そも言語は時世につれて變化を生ず。その外形のかはれるものはさて置き、内容に轉義を來たしたるものあり、若しくは誤用せるもの尠からず、近體諸家のこれを誤るものあり、これを發醒せむとて宣長が玉霞を著すや、小澤蘆庵、橘千蔭、村田春海、三井高蔭、富樫廣蔭等これが辨難を著はせるもの多く、或はさよしぐれの如くこれに則りたる書を出すもありて、斯壇に影響を與へたること亦少からず。

次に枕詞が古來和歌の上にかに用ひ來りしかは、古歌集を繕くもの知るところ、釋日本紀に引用せる日本

紀私記の中にも、發語の名によりて多少講究を加へられしを知る。然れども未だ一部の書として特にこの詞を扱ふに至らず。詞延集には三十四種の枕詞を説き、二條家秘傳書の中にも主としてこれを説くあり。三條西實隆の和歌枕詞より進んで下河邊長流の枕詞燭明抄に至りて、その義や、明かとなる。燭明抄の特色は古傳説を捨てずして集めたるにあり、而して正當と考ふべき一説を立てざるはその短所なり。眞淵の冠辭考に至りて新説を出しこの研究に一新時期を劃す。されどもその弊や牽引するに至る。後の學者これが落ちたるを補はむとせるものには損取角彦及服部高保の續冠辭考あり、これを補ひつつ尙自家の見を立つるものには上田秋成あり。これに反對せむとて説を立てたるものには鹿持雅澄の萬葉枕詞解あり。或は冠辭考を縮め、若しくはその拔萃の如きものには義亮の石上あり、安達盈の冠辭考略あり。言靈派の語學者中には高橋殘夢の石上枕詞例、三代枕詞例最も優れたり。殘夢は一面言靈派なると同時に、一面數多の例を歸納して立説する傾向あり。以上の諸書は冠辭の解釋を主とし并せてその性質を究めむとするものにて、詠歌の上に應用せむとするものには、契沖の詞草正採抄を始め、損取角彦の冠辭懸緒の如き、建部涼俗の詞草小苑の如き、或は加藤景範のみやびこと玉かつらの如き、松山貞主等の冠辭袖几帳の如きあり。これらは詞によりて枕詞を引くを旨とせるものなり。或は同じく詠作の爲にせむとするにも、深澤薫の類聚冠辭略解の如く分類別として解説せるあり。この類のものは他に類例多からず。この他解釋を主とするものには、雨引山惠岳の枕詞選註、座光寺尹祥の詞譜、推易堂の舊詞考の類等二三にして止まず。こも亦その詳なることは別に誌すべし。

これらの書を除き、歌學の爲にせるものは、眞名草の如く事物の名を主として集むるあり。加藤景範の虚詞考の如く旨と副詞及動詞をのみ集むるあり。萩原廣道の古言譯解の如く主して用言を收むるあり。入江昌熹の異名分類抄の如く物の異名のみを汎く蒐むるあり。又富士谷成壽の詞葉新雅の如く俗言より雅言を引くものあり。橋本魚彦の古言叢の如く俗語の句より雅言の句を引くものあり。或は和歌梯などの如く、五七の句を列ぬるあり。精粗繁簡相錯れりといへども、各方面に亘りて着手せるを見べし、但し完璧なるは未これあらずといふべし。

書目解題

秘藏抄 三卷

上巻始に、ほのくくと明石の歌以下、歌の本とすべきもの五首を挙げ、次に、まそを辭、あじろたまま等異名を含める歌四十餘首を載せ註を加ふ。終に十二月の異名、及短歌（今の長歌を指す）旋頭歌、誹諧詩の例を載す。中及下には植物、鳥、獸、雜の異名證歌を挙げ簡單なる註を下す。古語深秘抄及續類從四五六に收む。古今打聞躬恒撰之とあれど、この例歌中には躬恒より後の人の歌も交りてあれば後人の假托の書なること疑なし。

仲實綺語抄 三卷寫

歌學の部綺語抄を見よ。

莫傳抄 一卷

草木鳥月などの異名を説き、證歌を挙げたるもの、源俊賴の作と傳ふれど後世の偽書なるべし。一條兼良が室町將軍の爲に註進せしといふ和歌藏玉集はこれと大同小異なるもの。或は鎌倉末期若しくは足利初期に成りたるか。

古語深秘抄に收む。但しこの書には末に萬葉集草木並十二月異名集英傳抄終とあり、前田侯爵家には應永二十八年の古寫本あり。深秘抄本より歌十五首多し。例へば、春の部、川高草の次に、川古草……藻と題し。下水に月やすままし川こ草かりそめの間も波のたすは。の歌あるが如し。

詞 顯 抄 一 卷 寫

伊勢物語の中の歌語を解釋し、證歌を載せたもの。天永二年の奥附本宮内省圖書寮にあり。和歌知顯集に同じ。

和歌知顯集 一 卷 寫

一に伊勢物語知顯集ともいふ。桂大納言經信の作と傳ふ。經信は承徳元年に薨じたれば天永二年はその歿後十五年に當る。

袖 中 抄 二十 卷

顯 昭

萬葉及古今集以下堀河百首頃までの歌詞中、極めて解しがたきもの、若しくは故事あるもの三百餘言を、諸抄を引きて考證辨析せるもの、有栖川宮家御藏本は卷子本二十卷にて正安第二曆五月中旬候発書筆了執筆阿闍梨祐尊と

あり。古文書を綴ぎ合せて裏に記したるもの數卷ありて、中に卷四、五、七、十一、十九卷及二十卷の後半は僧定爲の筆、他は室町時代の補寫なりといふ。慶安四年板本は魁本十卷とせり。歌學文庫にも之を收む。

清水濱臣が狩谷掖齋本によりて享和元年一校し、同三年再校の上、僻案を註し、文化二年更に諸書を引きて校合せる一本黒川眞道氏藏す。高田與清はこれが索引一卷を作る。

色葉和難抄 十 卷 寫

萬葉集より千載詞花集までの古歌中故事などにて解しがたき詞七百餘を抜き、いろは順に列ね註解を加ふ。原本は片假名交にて記す。この書古くは慈鎮和尚等の作と傳へたれど、年山紀問卷三には契沖の説を引き、「尊氏將軍以降天台宗僧の撰と見え申候然に慈鎮和尚の作或は顯昭の作など申候得共この兩人の手より出づとは見えす」云々とあり。尙考究すべきなり。

八雲言語部 一 卷 寫

順 德 院

八雲抄の枝葉言語部を別冊とせるもの。技葉部は、天象、地儀、時節等十數門に分ち、言語部は世俗言、由緒言、斷簡言に分ち、歌語を抜き、所々小註を加ふ。これが索引としては八雲類標一冊あり。

種心秘要抄 一卷寫

八雲御抄、清輔一字抄により、歌語を世俗言由緒言に分ち小註を加ふ。作者不詳。別に同名の書あり。

藏玉和歌集 一卷

草木鳥獸の異名を四季雜に分ち、物名に小註を加へ、證歌を載せ、次に月の異名を挙げたり。元祿十四年に上木す。又類從二九〇巻にも收む。元祿本には巻末に此一巻者自室町殿草木異名事依被尋申二條攝政良基公被註進、清書之時密々寫留者也、とあり。類從本には二條攝政良基公の七字なし。良基にあらて、その子一條禪閣にあらざるか。四季雜の部は莫傳抄と大同小異にて註の文章に多少の相違あり。又引歌の一句ぐらゐる異れるあり。又一首位増せるもの、又足らざるものあり。十二月異名及歌は兩書全く別にして尙藏玉には月の外他の異名を數多く添へたり。恐らくは足利時代に莫傳抄に増補せるならむ。

千種抄 四巻寫

潮信子

古集の歌詞を註釋す。享祿四年の奥附あり。潮信子は天文享祿頃の人、未だ氏名を詳にせず。

假名遣つづらをり 一卷寫

三條西實隆

假名遣相傳の事、をおの假名、ひふとばかりゆく字、中のえを書くこと等假名遣を説ける一本高松宮家にあり。

環翠軒出鈔 二巻寫

舟橋宣賢

著者越前に淹留中、六巻の古今集、八雲御抄、仙源抄、歌林良材等十八部の書中より、詞を抜き、いろは順に列ね、少註を加へ、二段に記したり。奥に環翠宗尤と自記せり。彰考館本は八巻となれり。◇宣賢は文明七年に生れ天文十九年薨す。官正三位侍從。當時の碩學。

宗祇類語辨 一卷寫

延徳二年宗祇の撰、彰考館には如上の外題を用ひたり。分葉に同じ。

分葉 一卷寫

宗祇

同じ語にて意義の異なるもの、及紛れ易き類似せる語九十五語を挙げ、註を加へて區別を示す。宗祇師が關東下向の時心敬に示ししに貴ぶべきものとて寫しおきたるを、延徳三年宗長寫し傳ふる旨の奥書あり。この書異名あり、次に擧ぐるが如し。

歌林山かづら

一卷 寫

分葉と同じ。神宮文庫に慶會常典が寶曆五年正月に寫せる本あり、延徳二年宗長より村田肥前守に送りたるよし記せり。江戸戸倉屋喜兵衛開板。

拾芥愚抄

一卷 寫

分葉と同じ書にて、未だ水邊體用のこと、雜物分別のこと、一座に二句の物など連歌に関する法規を載せたり。南葵文庫には、天正九年川田縫殿助奥附ある一本あり。

和歌詞證歌集

一卷 寫

分葉と同じものにて外題を異にせるのみ。

詞延集

一卷 寫

初に枕歌詞とありて、あしびきの山の類三十四種をあげ次に古歌の詞をあぐ。歌詞大概とも呼ぶが如し。定家の説を擧げたるところあり。こもりくの泊瀬を、かくらくの泊瀬とよみたるなど足利時代のものならむか。神宮文

庫に一本あり。彰考館本には依室町殿仰所注進文安五年和歌所といふ奥附あり。

萬葉鏡曇集

一卷 寫

春告草、さいたづま等の異名を詠める歌を始め難解の古歌を擧げ簡單なる註釋を下し、末に名所十二月姫の名、十二月花鳥次第を擧ぐ。梵灯庵の名も見えたれば、足利末期の作か。神宮文庫及彰考館に一本あり。

藻汐草

二十卷

宗

碩

詞を天象時節地儀等二十綱に分ち、各目はいろは順により並べ、註釋せるもの。分類辭書として稍完全なるもの。歌人連歌師の座右に備へたりし書なり。寛文九年上木。◇宗碩は宗祇の門人。月村齋と號す。河内の人。

續藻汐草

十卷 寫

宗碩の藻汐草に倣ひ、萬葉の詞を部類し、諸書に照して註を加ふ。作者明かならず。

和歌藻汐草

一卷

宗碩の藻汐草と同じ。明治四十四年東京一致堂より發行す。

類字聞書 二卷寫

歌連歌の爲に、詞をいろは順に連ねて註す。帝國圖書館本。

三代集詞解 二卷寫

三代集中の詞をより／＼抜きて小註し、五代集の詞を聊かばかり附録とす。桂宮御藏本宮内省圖書寮にあり。

倭歌秘要抄 一卷寫

はねてには十七字のこと以下、三十五條を載す。近衛家に一本あり。

春雨抄 二十卷

鱧重常

歌連歌の爲に詞を集め、いろは順に列ね、小註を下し、數多の證歌をあぐ。寛永十六年林道春の序あり。明曆三年上板す。

隨葉集 三卷

上卷には四季の詞を、中卷には戀の詞及名所を、下卷には神祇の詞を列ね、證歌を擧げ詠歌の助とす。正保五年上木す。

いささめ 十卷寫

いささめといふ詞より、簾の袖口といふ詞まで、いろは順に連ね、註を加へ引歌を添ふ。藻汐草を引ける所あり。

歌林撲楸 二十八卷寫

松永貞徳

日本紀の詞、奥儀抄、袖中抄、童蒙抄の詞その他故事ある詞を、いろは順に列ね、諸説を擧げ、次に自説を加ふ。書名は詩經の林有樸楸にとり、十四冊本あり。八卷本あり。篠田力齋本は二冊とせり。◇貞徳は大龜二年に生れ承徳二年に歿す。年八十三。連歌師花の本の宗匠となる。長頭丸、明心居士等と號し、又花咲翁と稱す。幽齋等多くの人に學ぶ。

詞林三知抄 二卷

源泰季

詞を神祇四季雜に分ち、假名と漢字と俗解と三段に記す。詞數多からず。寛永十二年杉田勘兵衛開板、寛文五年再板(二本)延寶六年新刻三本とせり。

和歌吳竹集 十卷

歌連歌に關する詞句名所故事等をいろは順に並べ、證歌を擧げて註釋す。寛文十三年版は十卷、後多少の詞を増損して奥に詠方の心得等を附して二卷となし、寛政七年尾崎雅嘉序を加へて板行、明治の御代にも印刷に附す。

類葉和歌溪雲抄 一卷寫

中院通茂

五十串、稻筵、岩戸柏、出湯等の如く、歌詞をいろは順に列ね簡單に註を加へ、證歌を載す。

榮雅抄 一卷

飛鳥井雅親の將軍に進められたる歌學書にて、延寶辛酉六月京都梅村彌與門板行。

五拾集 三卷寫

歌詞を月の順列にね、一ヶ月の中には、いろは順に並べ註を加ふ。内閣文庫に一本あり。

僻考集 一卷寫

下河邊長流

解しがたき歌語を註釋せるものにて、彰考館に一本あり。

釋萬葉集附錄假名格 一卷寫

水府にて撰みし釋萬葉集の附錄にて題名の如く假名遣を説けるもの。首に契沖が作りおこせし倭字正濫に増減して、いろはを以て部を分つは初心の人の見易からむが爲なりとあり。神宮文庫本。

眞名草 五卷

河瀬菅雄

事物の名等をいろは順に並べ、註を下し、席詠法の助とす。書名は、まさなき事どもいとど多かるべければ名つくと自序の中に見えたり。元祿三年洛陽梅村彌右衛門開板。

持明院家假名遣 一卷寫

持明院基輔

いろはをお、えゑの書分は輕重の第一也慎むべし慎むべしと説起して、輕重相通五音五位を説き、假名遣の心得を示す。寶永三年正月の奥附あり。高松宮家本。

萩のしきり 小二卷

中堀倍庵

歌學の部

歌連歌の詞をいろは順に集めて註す。匠材抄に取る所多し。元祿五年成り。享保三年板行。

詞林綱目 二卷

荻のしをりに同じ。又詞林萬葉良材ともいふ。

和歌言葉辨故事 一卷寫

いせや日向物語、岩代の松、ゐての下帯、斑女、飛火の野守等の由緒ある歌語を引き、註を加へ、終に證歌を載す。

和歌故事記 一卷寫

和歌言葉辨故事に同じ。

和歌詞の抄 十五卷寫

北村季吟

範兼の和歌童蒙抄、顯昭の袖中抄等に倣ひ、歌語をいろは順に列ねて説明す。享保十二年谷口文淡の寫本あり。

いろ波わけ歌録書 一卷寫

職仁親王

歌詞をいろは分となし、その意義を説き、古今の歌集及源氏物語等より例を引きたるもの。新しき例歌は靈元院天皇、烏丸光榮の歌を多く取られたり。御白筆本高松宮家にあり。

詞の寄書 一卷寫

同

奥儀抄袖中抄等に見ゆる雜語をぬき、更に風雅集六百番歌合等の語を抄出せる一本高松宮家にあり。

和歌出似葉要解 一卷寫

冷泉爲村

てにはを解く。ぞるこそその作りかへの歌五首あり。例へば『その受は引の音きしとこそは又えの音のかなしかし』と知れ等の歌なり。百瀬川に收む。

和歌手爾於葉見聞私録 一卷寫

安永八年聿英堂自謙枕流申集記とあり。佐々木信綱氏一本を藏す。

歌文要語 小一卷

建部綾足

歌學の部

天部、雲象、風雨、地部、山類等廿一部に分ち、語を列ね少註を加ふ。明和二年刊行す。

歌文要語補 五卷

早川廣海

建部綾足の歌文要語を増補せるものにて、古事記より土佐日記まで十九部の書の詞を分類し註を加へたり。享和三年源廣養父の序、林景覽の跋あり。◇廣海は明和六年に生れ、天保五年に歿す。字景述、樺園と號す。

濱づと 小一卷

加藤景範

天象、歳時、方位、地儀等に分ち、歌詞と作例を掲ぐ。

和歌虚詞考 一卷

加藤景範

歌に用ふる虚詞(動詞副詞の類)をいろは順に列ね、註を加へ、勅選集より證歌を引く。有賀長收の跋を加へて寛政元年板行。

掌中まさな草 小一卷

寛政元年尾崎雅嘉の上木するもの。

新和歌政名草 小二卷

眞名草を尾崎雅嘉の補ひて寛政四年に上木するもの。

異名分類抄 四卷二冊

入江昌熹

八雲、藻汐に洩れたる異名及それらの書に名目のみ舉げて證歌なきものを補ひ、天部、時節、地部、神祇、人倫居所、器財、魚貝、鳥獸草木に分ち註釋せるもの。天明三年自序あり。寛政六年板行す。◇昌熹は大坂の人、享保八年に生れ、安政十二年に歿す。年七十四。幽遠窟と號す。萬葉類葉抄補闕、久母乃取蛇尾等の著あり。

詞葉新雅 一卷小

富士谷成壽

俗言より歌語を引く。排列はいろは順にして、語數三萬に餘るといふ。弟成胤のはしりあり。寛政四年上板す。◇成壽は御杖の前名。

保東々規春十名 一卷寫

時鳥、無名鳥、童子鳥、みつぎ、すこ鳥、妹背鳥、蜀魂鳥、杳代鳥、杜鵑、くきら等ほととぎすの十異名を説け

るもの。

玉 霞 一 卷

本居 宣長

歌文の一部に分ち、歌部には近體の歌に使用する詞辭の誤を正し、文部には端事道記消息文の誤を示す。書名は『玉霞まなびの窓に音たてておどろかさばやさめぬ枕を』と題せる歌に由る。寛政四年上板。天保十四年再板。

玉 霞 雜 詞 一 卷 寫

小澤 玄中

寛政四年玉霞を批評し、數十條に互りて辨難せるもの。末に『驚かぬ夢がたりせむかしましき夜半の霞は音やめて聞け』以下四首を添へて諺る。◇玄中は芦庵が名。

玉 阿 羅 禮 論 一 卷

竺 愷

玉 霞 附 論 一 卷

淺 草 里 人

共に玉霞を批難せるもの。寛政四年に成る。文化十二年刊。竺愷は橘千蔭、淺草里人は村田春海が變名を用ひたるなり。

辨玉あられ論 一 卷

三井 高蔭

竺愷及淺草里人の説を辨駁せるもの。文化十三年刊行す。◇高蔭は伊勢の人、寶曆九年に生れ、天保十年に歿す。年八十一。鳥居阪三井家の四代目にて、宣長の門人藥屋と稱す。集あり。

玉あられ書人 一 卷 寫

富 樫 廣 蔭

本居翁の説を駁せるもの。

玉 霞 論 辨 一 卷

玉阿羅禮論、玉霞附論、辨玉あられ論を合せて、天保元年に刻せるもの。

和 歌 梯 二 卷

富 士 谷 御 杖

五七等の歌句を集め詠方の助とせるもの。寛政六年成る。上木。

濱 萩 一 卷

尾 崎 雅 嘉

歌學の部

古語の心得易きを撰り、いろは順に列ね、その下にその詞を含む熟語。數多細書し、詠歌初心のもの爲、會席用に充つ。ぬさぶくろと合綴横綴小本なり。

詠歌古言道の枝折 三 卷

萩原元克

古風の歌をよむ人の爲に、萬葉を主とし紀記物語の詞をも交へ、五十音順に列ね註を加ふ。枕詞も載せたり。宣長の序あり。寛政十一年に成り、享和元年上板す。◇元克は甲斐の人、通稱平吉、鈴屋の門人。

歌辭要解 二 卷 卷

伴資規

歌に詠むべき詞を、いろは順に、一言二言といふ様に並べ註を附けたり。文化三年序あり。同十二年資規校正して上板。

歌辭要解糾謬 一 卷 寫

清水濱臣

前書の誤を正せるもの。文化八年十二月廿七日卒業泊酒舎主人と誌せる稿本あり。

童翫心底抄 一 卷 寫

詠歌の爲に係結及手爾波の用法を簡單に説けるもの。寛政十三年正月の日附あり。首にてにをはを知らずる歌の旁にことほりを加へ、言葉をもて、女童までも見易く耳近からん爲に大小の假名にて記すと見ゆ。神宮文庫に一本あり。

和歌詞の種 二 卷

片岡徳

枕草子、榮花物語、紫式部日記、和泉式部物語、映衣の五部より然るべき文句を摘み、四季戀雜に分ち、各題を更に幾多の小題に従ひて列ねたり。藤井高尙の教によりて成れること序に見ゆ。もと七卷二冊なりしを、後嘉永二年詞の花管と改め四本として世に出せり。

倭歌難語抄 二 卷 寫

萬葉以下諸集より、一風ある詞句をもてる歌を抜き、その詞句の題によりて列ねたり。例へば始に色なき風、いろさえず、色々袖等の詞をもてる歌を叙てたるが如し。

詞草類葉 一 卷 寫

宮内省圖書寮に神社の部、佛寺の部合一冊あり。神祇には天つ神、國つ神、天くだります神等の如くその類語を

歌學の部

歌學の部

類集して所々註を如ふ。佛寺の部もこれに準ず。全部幾卷なるを知らず。こはその殘缺なるべし。

清藻部類 五卷寫

鶴峰 戊申

天地、草木、禽獸、節序、佛事、宮室、形體、器財の部を設け、清少納言の枕草子の内容を分類し、詠歌の助とせるもの。文化十四年の自序あり。自筆本狩野亨吉氏藏す。成中は豊後の臼杵の人、季尼といひ海西と號す。天明八年に生れ、安政六年に歿す。年七十二。語學新書、鍔木文字考等の著多し。

雅語譯解 一卷

鈴木 朗

古今集源氏物語時代の詞をいろは順に列ね、俗言をあて、なほ盡しがたきは註解を加ふ。語數千三百八十七。市岡猛彦の序あり、文政三年成り同四年刊す。◇朗は尾張の人、明和元年に生れ、天保八年に歿す。鈴屋の門。難屋と號す。言語四種論、雅語音聲考等の著あり。

據字造語抄 一卷

清水 濱臣

漢語を和歌和文に用ふるに方り和げて使ひし諸例を集め五十音順に並べ、その中を天象、地儀、人倫人名等に分類し、一々出典を擧げその可否を評記せるもの。例へば庶苑をかせぎのそのとし、桑門をくはのかどとするが如し。

文政五年に成る。

奇語抄 一卷寫

本居 大平

中古の歌集より奇語をぬき、五十音順に列ね、その下に出處及び歌を擧げたるもの。例へば始に小町集の天の戸川、次に躬恒集の秋つしらべ、次に能宣集のあしかさすなどを列ねたるが如し。自筆本本居豊顯氏所藏。

ことだま 一卷寫

高田 與清

いはちどり、たぎまち等の古語を釋せるもの。歌詞考の原稿かといへり。松屋叢書卷七十に收む。

歌詞考 一卷

高田 與清

松屋叢考の中に收む。みたまのふゆ、かぢをたえ等の難語を集め考證解説せるもの。文政九年上板。

松花集 八卷寫

詞林三知抄の體にならひ、歌詞をいろは順に列ねて解したるもの。引歌あり。文政十年櫻舎の寫す旨奥書ある一本あり。

歌學の部

古調梯 一 卷

一名を歌鏡とも又雅言梯ともいふ。雅言を五十音の順に排列す。文政六年刊行す。

萬葉類語 百 卷 寫

足代弘訓

始五卷は音例等にして他は類語なり。前後の句を擧げ、所々註を加ふ。

歌集類證 一 卷 寫

同

山の山鳥、ふりみふらすみ、つくともつきじ、はれてもくもるの如き重詞對詞ある詞をあげ、その出處を示せるもの。赤堀又次郎の國語學書目解題に擧げたる歌集類語十卷と同じ類のものなるべし。

歌集類語 十 卷 寫

足代弘訓

八代集より詞をぬき、俗語にて解釋せるもの。

類語或問 一 卷 寫

堀秀成

人の問により昔いにしへ、はたまた、わけわき、まどふまよふ等の類詞の區別を説けるもの天保元年に成る。

雅言童噓 一 卷

河崎清厚

古へ今の詞をいろは順に列ね俗解をつく。天保六年成り、同十五年上木。高橋知周の序あり。語數三千四百十八に上る。◇清厚は伊勢の人。通稱惣太夫。本居大平の門。

和歌山路之琴 小 一 卷

橘千蔭

假名遣、てにはの承應、枕詞を摘出し幼學の爲にす。枕詞は下の詞の頭をいろは順に列ねて詠作の助とせり。天保七年三木詳の序を加へ、平橋重負等上板。

ちまちのぬきほ 一 卷

竹村茂雄

詞寄の外、假名遣、天仁遠波をあげ、初學の便となす。天保十二年成る。同茂枝の跋あり。◇茂雄は伊豆の人、明和六年に生れ、弘化元年歿す。年七十六。穂向屋と號す。鈴屋の門。又村田春海にも學ぶ。

古語本釋集 上 卷 寫

香川景樹

いろは順にて詞を擧げ、これに關する歌文を引きて説を立てたるもの。上卷はいよりなに至る。下卷は已未見す。

和歌こと葉の葉 二 卷

池田東圃

四季戀雜に分ち、古人の詠じたる五七の詞句を擧げ、次に例歌を載す。大橋長廣園絡衣軒序あり。天保十三年に成る。圖書寮本。◇東圃は京都の書家、池田東籬の一族か。

あひおひ 一 卷 寫

伴直方

あひおひ、おしね、おばすて、みづわぐむ等歌詞中、假名の紛らはしきもの十二條を擧げ、契沖、宣長、春海等の説を引き、次に自案を加へたるもの。天保十二年睦月の自序あり。◇直方は直樹の子、

和歌詞の千草 六 卷

石川蓮和

和歌の題意を説き詞をいろは順に集む。植松雅恭卿の序あり。弘化三年刊行す。

歌辭類聚 六十六卷 寫

足代弘訓

五十音により古集より類詞をぬき證歌を出せるもの。嘉永二年春より筆を起したりと見ゆ。宮崎文庫の有たり。

今神宮文庫にあり。

古言譯解 小 一 卷

萩原廣道

歌に詠むの中、主として萬葉集時代の川言を集め、五十音順に列ね俗解を加ふ。西田直養の序あり。嘉永元年に成り同四年大阪河内屋より上板。

冠辭鶴音 小 一 卷

華月亭

冠辭を五十音に列ね、一頁五行二段に記す。屯華宮主訓跋あり。草鹿砥宣隆の作か。

たまのやどり 一 卷 寫

三代集及三十六家集より、類詞ある歌を二三首及至五六首づ、擧げたり。例へば後撰の、降雪の蓑白衣打きつ、の次に、狭衣の紫のみのしろ衣云々の歌を擧ぐるが如し仲田顯忠などの作にあらざるか。殘夢の靈の宿とは別本なり。

歌格類選 二 卷

半井梧庵

歌の學部

歌語（名詞を除く）をいろは順に列ね、一格に四首宛例歌を八代集よりぬき、その旁に註解を附したるもの。嘉永四年に成り翌年上板。長澤伴雄の序、香川景恒の跋あり。◇格庵は文化十年に生れ、明治三十二年歿す。今治の人。法橋となる。

續歌格類選 二 卷

半井梧庵

前書の續篇にて一詞毎に三四首の例歌をあげ、末に歌學の方則、係結等を載す。山田泰平の序を加へ、嘉永六年上板。

和歌新吳竹集 二 卷

池永泰良

吳竹集に池永泰良の更に詞を増し加へたるを、嘉永七年石津亮澄考訂して上板す。◇泰良は大阪の人、文化中歿す。年三十に滿たず。上田秋成の門人。

雅語譯解拾遺 小 一 卷

村上忠順

鈴木朗の雅語譯解の補篇にて、語數千六百。安政五年に成る。明治五年名古屋の三輪清七發行す。◇忠順は文化十年に生れ、明治十六年歿す。年七十一。刈屋藩士、蓬蘆と稱す。名所菜、詠史河藻歌集、散木弄歌集標註等の

著あり。

歌集類言柄の響 七十四卷寫

生川正春

二十一代集を始め、夫木集、三十六歌集その他物語の歌家の集より豊富なる例をとりいてて詞の八衢の次第に基きて擧げたるもの。齋藤拙堂の序あり。原本津市教育博物館にあり。◇正香は伊勢の津の人、春朋と號す。足代弘訓の門人。文化元年に生れ。明治二十三年に歿す。年八十七、言葉の二道、つるぬるの辨等の著あり。

詞のさきくさ 一 卷

久松祐之

袖珍本にして、雅言文字俗言と三段に分ち、極めて簡單に記せり。安政六年成る。◇祐之は江戸の人、通稱五十助、幽篁と稱す。

玉霞窓の小篋 五 卷

中島廣足

玉霞を補ひたるものにて、彼の書にならひ、歌部文部を立て、紛れ易き詞辭を抜きて解釋す。前篇三卷は秋田殖及佐々木弘綱の序を加へ、文久元年に刊、後編二卷は明治二十年中島惟一の序を加へ、前篇と共に印刷に附す。脱稿は嘉永七年なり。

歌の學部